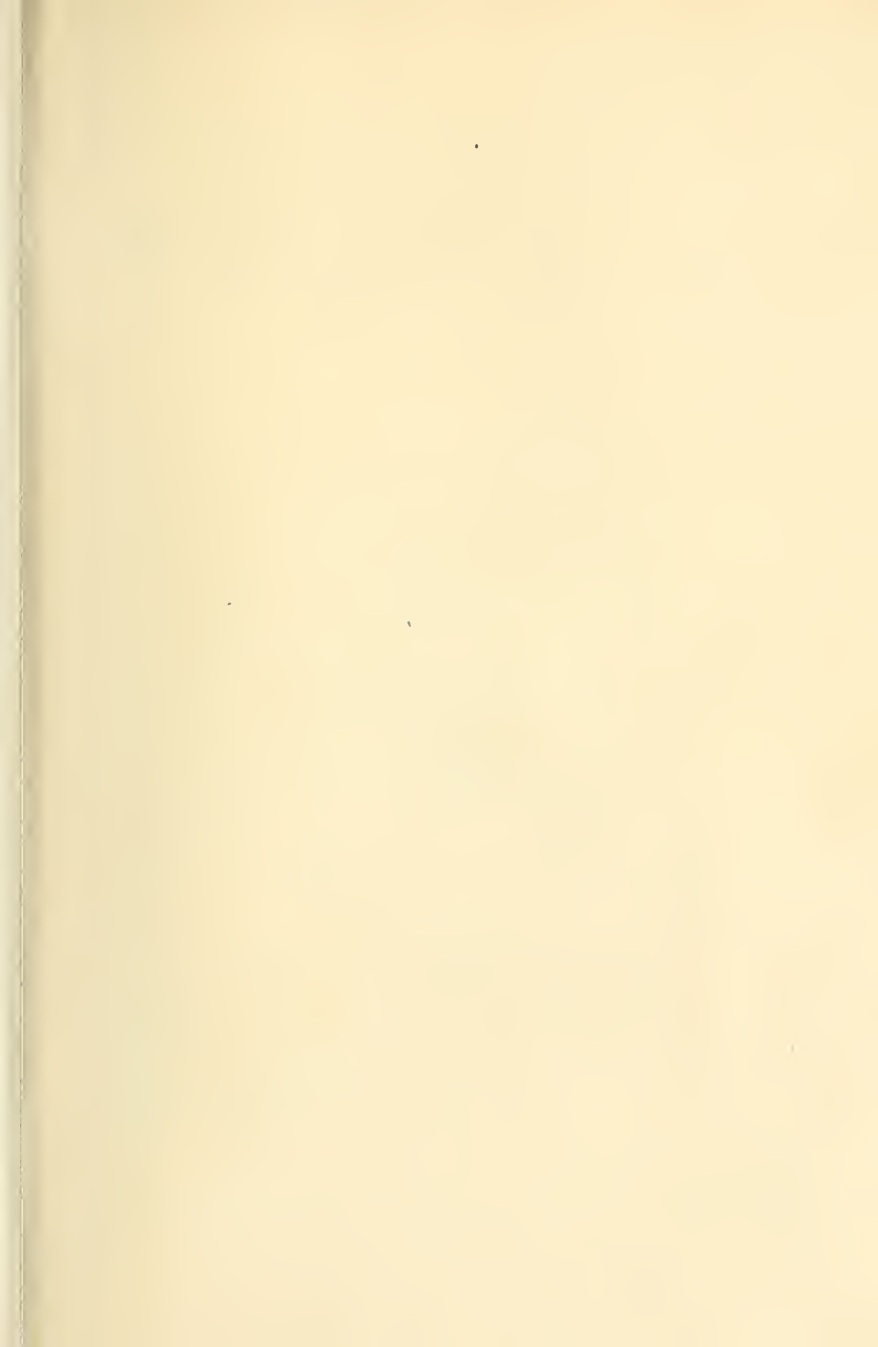
碧梧桐著
子規を語る
汎文社版

口繪説明

書翰蒐集家として知られた大阪の渡邊得次郎氏は、子規の「明治三十三年十月十五日記事」といふ、當時の「ホトトギス」に掲載した、一日記事の原稿紙二十餘枚を一卷として所持してゐる。其の卷頭に、子規關係の人々が、いろ〳〵筆を執つてゐるが、この中村不折の子規病床圖も亦た其の一つである。私が「春待や」の句を題した書體から言つて、凡そ明治四十一二年頃と推斷される。さればこの繪も、それ以前に描かれてゐたもので、畫と同時に書いたものでなく、一二年又は三四年の後に筆を執つたものと想像される。子規病床圖もいろ〳〵あるやうであるが、當時を想起せしめる雰圍氣は、簡素な筆ながら、この畫面に最も横溢してゐると思ふ。——碧梧桐記——

春待や宿痾を堪て憂かりし

序

子規廿三回忌の歳、「子規の回想」と題して書いた拙稿があつた。主として私との交渉のあつた、子規のまだ名を成さない潛行時代の文書と事實によつて、私だけの感想と推斷と批判を卒直に吐露したものであつた。

今年其の卅三回忌に際して、尙ほ之に附加し、改删すべき多くのものゝあるを覺えた。

「子規の回想」と別に、卅三回忌の追憶文を新たに草する感懷をも抱くのであつた。

汎文社が子規卅三回忌を記念せんとする早急な企圖に新たに筆を執る餘裕はなかつた。

卽ち「子規の回想」に多少の改删を加へ「子規を語る」と改題し、其の企圖に副ふの外はなかつた。

著者としての不本意はともかく、此の一篇亦た子規の一側面を知るよすがともならば幸

ひである。

附錄として添へた三篇、亦た子規の他の一面を窺ひ知る興味を喚ぶであらうことを信ずる。

昭和九年二月

碧梧・桐　識

目次

表紙

河東碧梧桐肉筆

子規を語る

碧梧桐著

一　木入れ

「お父さん、木入れがまゐりました。」

嫂の甲高い聲が何處かでした。私は井戸ばたの流しの飛石を渡つて、裏庭から玄關へ出る戸口で父に會つた。裸足で尻からげて、筋張つた瘦せた脛をむき出しにした父は、手の泥をはたいてゐた。物置から大きな秤と棒を持ち出した父について、玄關前の中庭へ來た。いつもの栗毛の馬が、もう半分薪をおろされてゐた。私はこの木入れの阿爺の手甲をした、バッチを脚絆で締め上げたやうな姿がすきだつた。片目のやうなしかみ面も恐くはなく、却つて穩やかな愛

嬌があつた。咽を掘るやうなシヤがれ聲にもなつかしさがあつた。馬の片荷づゝ、櫟の割つた薪の山が二つ積みあげられた。三尺もある薪の割れ目は、まだ生木のうるほひを持つたつやつやしさが日光の下に晒されてゐた。薪の山に棕梠繩の綱をかけて、秤に棒を通して、一方は木入れの阿爺、片方は父が肩を入れようとした時、誰か知らん、降つて湧いたやうに人があらはれた。

何やら父と二三度問答してゐて、父があはゝゝと笑つて、肩を入れかけた棒を、其の人に渡した。さうして、父は秤の棒を手にした。

其人の手から黒い風呂敷包みが地上に投げ出された。白い手が頭の邊の空間で二三度明滅した。本統にキラ〳〵する白さだつた。薪がやつと地からすれ〳〵に持ちあげられた。木入れの阿爺は、爪立ちするやうに肩を伸しあげた。棒をかついだ二人と、秤の棹を持つた父とが、神輿でも、舁ぐやうにして、も一つの薪の山へ移つた。

又た薪の山が地からすれ〳〵に持ちあげられた時、私は始めて、白い手の持主の赤く染んだ横顔を見た。赤く膨れあがつてゐた。

「こりや御迷惑ぢやつたな。

「イヽエ。あの、稽さんはおいてるかやな。

「稽はけさ一寸久米へ使ひにやつた……まだもどりますまい。

「今夜は……。

「乗坊、正岡さんにおぢぎおしよ……。

私はこれまでいく度も耳にしてゐた、升(のぼ)さんがこの人だと直覺した。横に切れた眼が私を射つた。への字なりに曲つた口もいかつい威嚴を示してゐた。私を射つた眼が大きくくり／＼左右に動いた。

升さんは父と、かうやつて生木を買ひ込んでおいては、それを玄關前の空地に薪棚のやうに高く積み上げて、凡そ一年位枯らして行く、薪の貯藏法の話を問答してゐたやうだつた。私の家の薪棚と言つたら、當時一つの話柄になつてゐた。中には內證で薪の商賣でもしてゐるのぢやないか、と疑つた程仰山に積み上げられてゐた。それが、玄關で「頼まう」をいふ人の頭を壓してゐるのだつた。

これが私が子規といふ人を知つた最初だつた。何でも私が七八つの頃だつたから、子規は十三四であつた。其後も父はよく、若いのに出來る男だ、二つも三つも上の兄友達にひけをとらない、と言つて感心してゐたのを私は小耳にはさんだ。そんなにエライ人なのか、と木入れの來た時の第一印象を想ひ出しては、升さんの顏を見るたびに、自然に頭が下がるやうな氣がしてゐた。

横に切れた、ギロツと光る眼は、其後も同じやうに光つてゐた。病床に釘づけになつて、寢返りも容易に出來なくなつた後には、こちらへ視線を向ける爲めに上ワ眼を使つたり、横眼で睨んだりする、一層鋭い光りと威嚴とを投げるのだつた。

顏面美容學からいふと、眼と眼との鼻梁を挾む距離が多くなる程顏は醜くなるのだといふ。其の反對に其距離が近くなればなるほど美しく見えるのだといふ。音樂家に美しい顏の少ないのは、常に耳を働かす爲めに、顏面筋が外部へ〳〵運動する、其の結果が眼と眼との鼻梁を挾む距離を多くするのも其の一原因だなどゝいふ。

併し、子規の眼の位置位、鼻梁を挾んだ距離の多い例は、私も嘗て經驗した事がない。二つ

の眼が對立してゐるといふよりも、個々の眼が孤立してゐる、と言つた方が適切な位離れ〴〵だつた。けれども、顏面全體として破調的の醜さも、不權衡な滑稽さも見出されなかつた。廣く豐かな額、反齒を包むやうにした――其實反齒では無かつた――上唇の膨れ上つたへの字なりに結んだ口と相待つて、燃ゆる情熱と、透徹した判斷力と、狃れ難い嚴格さとを漲らしてゐた。子規の死面でもとつて置けば、顏面美容學などはすぐ覆へされてしまふのだつた。

私はショート・サイトで其の眼光に打たれてから、約二十年間其の光りの下に昂奮もし、屈服もし、反抗もし、曖くも冷たくも、美しくも醜くもさまようてゐたのだ。一言に盡せば、其の眼光の下に淨化されて來たと言ひ得るであらう。それは私の素質の享け容れ得るだけに。

二　詩　會

私の父は朱子學の道學者だつた。江戸の聖堂にも學んだことのある經學者だつた。松山藩の少參事とかいふ役まで勤めて、大參事に陞任しようとした時、其の任でないと言つて致仕したやうな物堅い人だつた。晩年千舟學舍といふ塾を開いて諸生を薫陶したりしたが、其の前にも素讀や講義を聽きに來る人がぽつ〳〵あつた。

父などの先輩にあたる松山の儒者に大原觀山といふ人があつた。子規は其孫であつた。子規の母堂は、名を八重と言つて、觀山の長女であつた。子規は其の長男、妹律子さんは其の長女で、外に次男も次女もなかつた。觀山の初孫といふので、祖父にも愛せられてゐたことは想像に難くないが、觀山は明治七年に歿してをり、子規は慶應三年生れであるから、丁度其の八歳の時に祖父を失つたのであつた。子規は觀山に論語などの素讀をしてもらつたといふと、既に六七歳頃から漢書に親んでゐたことになる。尤もそれは當時の士族子弟の一般的な教育法では

あつたが。子規の父といふ人が、當時の學問には疎遠な人であつたので、自然私の父の許へも通學するやうにもなつたのだ。

稽さんと言つた稽三郎は、私の三番目の兄で、早くから母方の家を繼いで竹村姓を名乘つてゐた。後に名を字の鍜と言つた。慶應元年生れの二つ年上であつたが、子規とは無二の友で、書を讀むにも、詩文を作るにも好敵手であつた。

私の手許に、當時回覽雜誌ともいふべき詩會の草稿で「壬午第三月會稿、會主竹村生」といふ一冊が遺つてゐる。壬午はいふまでもなく明治十五年で、子規十六歲の時であつた。其の回覽名簿に「武市君――武市庫太、元代議士――正岡君、森君――森貢、後に知之退職軍人現存――小林君(正信)宇高君、梅木君(修吉)――以上三氏不明――三並君――三並良、獨逸學者現存――柳原君、柳原正之、號極堂、元伊豫日日新聞社主現存――等八人の名前が乘つてゐる。當時これらの人々は「明新舍」といふ會盟を作つてゐた、が又た其の中で、三友とか五友とか言つて、氣の合つた同士の會合もあつたやうだ。

右の會稿は各自の批評を加へた後、私の父の斧正を乞うてゐるやうであるが、中に子規外二

三の人の原稿は見當らない。總て文章は漢文のみで、七言絶句の詩は約十首許りある。子規の筆跡は、「升」と署名した、各詩文の頭註のやうに書いた批評で見る事を得るのであるが、其の整頓した細字は、就中老熟味を見せてゐるのに驚かれる。武市庫太の「野馬圖」と題する詩の上に「前評獲我意、升妄評」、竹村鍜の「寒梅說」の上に「文字只百餘字耳而感慨之意備到可謂文簡而意盡矣、升妄評」などある。十八歲を年長者にした少年の會合が、口には天下國家を論じ、筆には漢文以外のものを書かうとはしなかつた。これらの八人が必ずしも早熟ではなかつたのだ。

私の家は、昔の侍屋敷で、三百坪許りもあつた地所の中に、廣いのは十二疊の座敷、狹いのは三疊の玄關など、十間許り横長うつゞいてゐた。物置同前になつてゐた內玄關の板の間なども、臺所つゞきに家の北側を占領してゐた。住居と倉庫とが一處くたに一つ屋根の下に覆はれてゐるやうな家だつた。後に千舟學舍が開かれて、毎日早朝から素讀生が四五十人も通ふやうになつてから、開放された八疊と六疊の二間などは、一方が本箱の詰つた書庫であり、一方は姉達が手ずさびにした機織場であつた。十二疊の座敷の庭には、周り三四十間もある水の泉む

池があつて、南うけの晴々しさが、障子を透して中床に飾つた鎧櫃の金箔の定紋を照らしてゐるのでもあつたが、前の書庫の八疊の軒近くには、こんもりした樫や、其の外には五抱へもある松の大樹なども聳えてゐて、同じ南うけでありながら、いつも仄暗く欝陶しかつた。子供心にもたゞ恐ろしいといふより、入らずの間と言つたやうな神秘の間であつた。何でもが化けて出るといふ話から、本でも化けるであらうと、時々父の机の上に載つてゐた唐本の、濁つた黄色さを、不氣味に眺めるのでもあつた。

兄達の詩會といふのは、この神秘の間でやるのだつた。それも晝間ではなくて夜であつた。今夜は詩會だといふ日には、よく姉達が、お煎りと言つて、水に浸した生米を炮焙て、ゴソリ〳〵煎つてゐた。詩會とはお煎りを噛りながらどんなことをするのか、といふことよりも、よくまアお化けの出さうなあんな部屋でなければ作れないのか、と詩を一種不可思議なものにも想像するのだつた。自分も大きくなれば詩を作るのだらうが、其の時あの神秘の間の空氣に、兄や升さんのやうに平氣で同化出來るのだらうか、と未來の不安に襲はれたりもした。可なり猛烈に叱るせいもあつたらうが、兄は成るべく口をきかなかつた。それで几帳面で潔癖でもあ

つた。自然氣むづかし屋に見えた。二つも年下の升さんも、それらの年長者に負けない氣位と元氣に滿ちてゐた。口でも筆でも、何でもおいで、と言つた才氣煥發なところもあつた。柔しく穩やかではあつたが、あの眼とあの口に總ての注意を集注することを忘れてはゐなかつた。もう一家をなした老成人でもあつた。五分葱のランプの下で、唐本のお化けの無音の聲で唸つてゐる中で、氣むづかし屋の兄と、眼光炯々たる升さんとが、デロッと睨み合つてゐる光景を想像して、いつになく寢つかれなかつたこともあつた。

三　其戎宗匠

いつの夏のことだつたか、風通しのよい座敷の床の間近くに机を据ゑてゐた兄の側に私は坐つてゐた。私がきいた爲めであらう、兄はペラ〳〵した一枚の唐紙に活版刷りにしたものをひろげて、これが發句といふものだといふ説明をしてくれた。私が發句といふものを見たのも聞いたのも、これが最初だつた。私も十二歳位になつてゐて、詩の平仄位父から敎つてゐた頃だつた。白丸や黑丸や半黑丸などを、筆の軸で押しては、フツクチキに平字なし、などゝ暗記のまゝを口まねする位のことは知つてゐた。發句の話をきいても、たゞ此頃兄は何だか變なものをやるのだとしか思はなかつた。私の素讀的習慣性が、嘗ては恐れた兄をいくらか輕蔑せしめる傾きもあつたのであらうが、兄は叱りながらも、五七五と並べる音律や、短い言葉の中に無量の意味を籠める面白いものだ、と極力說き進むのだつた。

其の唐紙の一枚刷りは、三津ケ濱の其戎といふ先生の出してゐるもので、其の中にある其十

といふのが、自分の號だと言つた。これが正岡で、これが誰だ、と嘗て詩會で寄り合つてゐた人の號も敎へてくれた。何でもそこには、團扇をどうするとか、澁團扇とか、畫をかいた團扇とか、團扇といふ字が行列してゐた。同じ字の列んでゐるのが、妙にをかしくもあつた。今まで見たことのない世界に引張りこまれる好奇心も唆つた。これだけの字を並べるのが、詩をつくるよりもむづかしい、といふ疑惑にも閉ぢられてゐた。

どういふ動機で、發句をやるやうになつたのか、わざ〱一里半も離れてゐる三津ケ濱まで先生を尋ねて行つたりしたのは、誰の手引であつたのか、其の當時の子規の俳號は何と言つたのか、又た其戎といふ月並宗匠は、どういふ系統の人であつたのか、それらに關する記憶は私には全然ない。子規と直接言葉をかはすほどの親しみを持たなかつた其の時分の私は、子規から發句についての話をきく機會もなかつた。顧ふに、詩とか文とか、四角な字許りひねくつてゐる間の遊山氣分で、誰かの勸めるまゝに投句でもしたのが、其戎の摺り物に載るやうな結果になつたのであらう。鯛ばかり食ひ馴れた口に、オコゼも乙だ、といふ位の氣分であつたのであらう。

この時分の書生は、まだ大部分町々で徒黨のやうなものを組んで、お互ひに喧嘩したりするのをエラがつてゐた。自由民權説にかぶれて、政談演說をやる先走りしたのもあつた。詩を作つたり、文章を書く稽古をしたりするのを、柔弱呼はりして、書生ののけものにしてゐた。そんな氣分の中で、世捨人か隱居のするやうな發句を面白がつた子規や兄やは慥に書生中の異色だつた。ハイカラなと言はうか、物ずきといはうか、兎も角金箔つきの文學青年だつた。

其戎宗匠に一隻眼があつたといふよりも、かういふ文字のある文學青年を相手にする、それを自分の弟子に持つことの興味に驅られたと見る方が正しいかも知れぬ。其の時の兄の話では總て評判がよくて、一番いゝ三座といふところにとつてくれたりするとのことだつた。さうして、こんなことをやつても、正岡は矢張一番うまい、などゝ言つたりした。

併し、其戎宗匠の話は、其の後兄からも、又た子規からも再度耳にしなかつた。子規からは遂に一度も其戎の話をきかずに了つたのだ。其戎が早く物故したのか、それとも子規の方で交際をつゞけなかつたのか、尤も發句などに興味を持たなかつた當時の私は、兄の話も半分は浮の空できゝ流してしまつた。それを追窮する興味も持たなかつた。

四　野　球

私が子規宗の一人になつて、發句といふものを始めて作つたのは、それから四五年後の明治二十三年であるが、それまでに子規と私との間に一つのエピソートがある。

當時まだ第一高等學校の生徒位にしか知られてゐなかつたベースボールを、私が習つた先生といふのが子規であつたのだ。私の十六になつた明治二十一年の夏であつたと記憶する。當時東京に出てゐた兄から、ベースボールといふ面白い遊びを、歸省した正岡にきけ、球とバットを依托したから、と言つて來た。子規と私とを親しく結びつけたものは、偶然にも詩でも文學でもない野球であつたのだ。それで松山のやうな田舍にゐて、早く野球を輸入した、松山の野球開山、と言つた妙な誇りをも持つてゐるのだ。

球が高く來た時にはかうする、低く來た時にはかうする、と物理學見たやうな野球初步の第一リーズンの說明をされたのが、恐らく子規と私とが、話らしい應對をした最初であつたであ

らう。兄とは違つた、何處か粋な口のきゝやうから、暖かなやさしみを持つた態度の前に、私は始終はにかみながら、もぢ〳〵してゐた。團扇の柄を兩手で揉むやうにして煽いでゐた仕種までが妙に慕しかつた。

この初對面の延長で、私はすぐ表の通りへ引張り出されて、今まで教つた球のうけ方の實地練習をやる事になつた。私は一生懸命にうけるといふより球を摑んだ。掌の裏へ突き抜けるやうな痛さを辛棒して、成るべく平氣な顏をしてゐた。頭の上へ高く來たのは、飛びあがるやうにして、兩手を出しさへすれば、大抵はうけられる、一寸投げて御覽、と言はれて、共の投げ方が丁度いゝ具合に往かない。二三度繰り返して、やつと思ひきつて投げた球を、一尺も飛び上つてうけたお手本に驚くよりも、半ば忘れかゝつてゐた眼つきの鋭さが私を喚び覺した。子規は赤く腫れたやうになつた私の手を見ながら、いろ〳〵に言ひ慰めて、初めてにしてはうまいものだ、ナニ球はすぐうけられるなど言つた。併し私は、それまでに經驗のあつた、擊劍を敎へて貰つた時のやうに、呑氣な巫山戲た氣分にはなれなかつた。

子規の家を始めて尋ねたのも、野球の一般法則を聽く約束があつたからだ。當時はまだ今日

のやうに適當な譯語もなかつた。さうして聽く私には、英語の力が薄弱だつた。メンバーのそれ〴〵の役目から、勝敗に關する複雜なコンディションを一通りわからせようとした、先生の勞を多とせなければならない。教つてゐる生徒も、前日の球のうけ方より、どれほど骨の折れたことだつたらう。何でも子規はグラウンドの詳しい圖面と、メンバーの名前と、球の性質に關する表のやうなものを書いてくれたので、後生大事に貰つて來たことを覺えてゐる。

可なり暑い日でもあつた。シヤツ一枚の肌ぬぎになつた子規の前に、赤い西瓜が盛つて出された。白い細い長い指の股から垢を探み出してゐた子規は、私にも勸めるよりか、自分でしやぶりつく方が早かつた。

私の家では、西瓜を食ふのは年にたゞ一度で、舊の七月に七夕祭をする時だけであつた。それも子供の七八人もある大家族を擁してゐたので、せい〴〵二切れか三切れの割宛に過ぎなかつた。今、目の前に盛られた西瓜の鼻を衝く凉しい豐かな芳ばしさに打たれながら、私は輕々しく手を出す氣にならなかつた。物固い儉約に馴らされた私の家の習慣と、餘りに距離のある眼前の事實が、新たな感想となつて、私の頭の中を往來してゐたのだ。

さう言へば、いつの歸省の時に尋ねて往つても、御馳走に西瓜の出ない時は無つた。毎日尋ねて往つてもけふのは善かつたとか、惡かつたとか、西瓜の評が出た。さうして誰よりも一番餘計に食べた。或年非風——新海正行、亡——と一處に歸省した時など、月を見に行かうといふので、近くの石手川まで出かけた。月の冴え〲した水のない磧の石に腰かけて、其日見た田舍芝居の評などしてゐる中、非風が持つて來た西瓜を、そこらの石にぶちあてゝ割つたりしたこともあつた。

西瓜を食つたあとで、無論今後の目的の話も出たと想像する。同鄕の人物論などにも言ひ及んだと覺える。軍人や政治家などになる氣迷ひを早くから感じてゐなかつた私は、子規の文學話に聽きほれるだけの素地を持つてゐたのだつた。

かくして子規と私との結びつく機緣、不用意と無雜作な間に釀成した。私が子規の懷ろに飛び込んで行く、私の生涯を支配する運命は、もう一步の眼前に迫つたのだ。

五　處　女　作

「明治二十三年三月二十三日調焉」と肩書きして、表紙に「發句集、河東秉五郎著作」と書いた古い私の手記の草稿がある。中に「二月四日より三月二十三日迄の發句（發句やら何やらわからず）左に掲ぐる如し」とあり、表紙裏には「赤色は正岡君の添削にかゝる者にして、余が此發句集に載せたるものなり」とある。

これによつて、私が始めて發句といふものに指を染めた時日も、亦た其の時どんなものを書きならべたかも一々明瞭過ぎるほど明らかになるわけである。かやうに十七音を一々指を折つて數へなければならないやうな、抑々の作り始めの記錄の遺つてゐる例は、恐らく他に多く見ない。自分の製作を、何から何まで一々整理して、後人が其の遺稿を蒐集するに困るやうな手間を出來るだけ省き得た子規でも、明治二十年頃の其戎宗匠入門時代の處女作については、遂に採錄すべき何らの史料もない。

私のやうに、總てをやりツ放しな、疎懶な生活をしてゐるものに、却て稀有な史料の保存されてゐるのは、たゞ偶然其のものであり、又た一つの奇蹟でもある。

私は自分の草稿として見るよりも、古人の遺稿として眺めるやうな、骨董的客觀的興味をさへ喚られる。

枚數は總て七枚で、十行の罫を入れ、如何にも人に見てもらふやうに謹直に清書してある。謹直ではあるが、腰のぬけたふら〳〵した下手な醜い字だ。朱で一つ〳〵丁寧に批評もし、テニヲハの間違を正したりしてゐるのは「松窓山長妄批」とあるのによつて、私の兄であることがわかる。兄は詩の方で「松窓」といふ號を持つてゐた。大方この處女作を他の草稿で子規に見てもらつたのを、又た別に清書して兄にも見せたものらしい。不幸にも、子規に見せた草稿の方は殘つてゐないが、それは手紙か何かで來たので、序でに其の批評を書き移し、一度に二先輩の評を見るに便したのだ。

兄の批評は丁寧親切を極めたもので、前書の文章の亂雜なのにさへ一々筆を加へてゐるが、子規のは、約七八十句の中の十七八句を訂正して、其の作例を示してゐるに止つてゐる。一二

の例を擧げると

吾が宿の庭には五本の梅の木ありけるが皆々開き亂ければ

五本ともさきそろひけり昨日今日

とあるのを

梅が香や屆かぬくまもなき小庭

と訂正し、

正岡常規君を慕ひて夢に見ければ

ほとゝぎす鳴きしと見しは夢の中

とあるのを

ほとゝぎす聲に驚く朝寢哉

と改删してゐるたぐひである。季の有無とか、二段切れとかいふやうな、當時の發句の定法をも何にも知らない、言はゞ無鐵砲に十七字を並べた、奇怪千萬なものであつたから、子規もいい加減にあしらつて置かねばならなかつたのであらう。若し私が其の前に、發句といふものゝ

一般的約束や、句作上の道德律などを子規に質してゐたとしたら、かほどまで破格に其の習慣を無視した、其の習慣に無學なものを押しつける事は出來なかつたであらう。恐らく野球傳習の夏以來、東京と松山の間で書信の往來をしてゐた中、子規から句の便りなどもあつたので、かねて一見した覺えのある其我の唐紙摺りなどを想ひ浮べ、少年の向ふ見ずに子規を驚かしたのであらう。

明治二十三年は、私の十八歲の春だ。私はもう父の書庫から幼學便覽どころか、圓機活法などを引張り出して、五言とか七言とか、時には律詩などをひねくつてゐた。一方中學も三年級位になつてをり、宅での素讀も其頃はもう無點本にも及んでゐた。日をきめて父の論語の講義をきく會などにも出席してゐた。

鐵棒にすがつたり、ランニングをやつたり、無關心に遊ぶことも人後には落ちない腕白ざかりであつたが、何處となく人生に對する、疑惑的とも言はうか、詩的とも言はうか、官能の奥に浸んで來る神秘な感情に目覺めようとする時でもあつた。

生れてこのかた、朝に夕に目馴れた石鎚の山つゞきになる南の連山の、霞にこめられた淡々

しい姿を、或る人格に對するやうな感情の昂奮に唆られながら、涙ぐましい心持で、ぢつと眺めてゐねばならない時もあつた。

けれども、友達仲間で、女の噂さなどをする意味が私にはよくわからなかつた。正月のカルタ會で、友達に引張られながら、知らない家にも押し寄せて往つたものだが、そこにどんな女性が一坐してゐたかには、まるで盲目だつた。私の戀の目覺めは、それから三年も後だつた。

平仄に合せて文字を拾ふやうな、機械的な漢詩の物まねは、當時の私にはもうぴつたり合ふものでは無かつた。何だか隣の庭をいぢつてゐる庭師に加勢してゐるやうだつた。無意識にも自分の庭の草に手を觸れたかつた。さうして、何らかの慰めをそこに得ようとした。私の人間的自覺の萠芽が、何物かを詠はうとした、抒情の處女地だつた。若し私が音樂に對する特殊な耳を持つてゐたら、私は其の音樂につれて我知らず踊り出したかも知れないのだつた。

試みに私の發句と子規の改作とを比較してみる。

早びるで泉村より土筆狩　　（原句）

筆捨てゝけふはつみけりつくづくし　　（改作）

續々と梅に後繼ぐ桃杏　（原句）
梅ちりて桃と杏の後備へ　（改作）

春の日に冬見る今日の山の上　（原句）
佐保姫は裾にすがるやふしの山　（改作）
春風の吹き殘したり富士の雪　（同　）

路のはた錦織り爲す櫻哉　（原句）
佐保姫の錦織り出す櫻哉　（改作）

鶯やたまさか來鳴今宵哉　（原句）
鶯やたまには花の咲かぬ枝　（改作）

原句は手ぶりも知らないで、我武者らに踊つてゐる。改作はさす手引手を心得た型に欲つてゐ

る。直感直情の陶冶された詩の境地には距離のあるものとしても、原句にはまだ墾かれない敷地の處女性が髣髴として全く其の匂ひを失つてはゐない。改作は理智の學問的に働いた、情操を無視した技巧によつて強く彩られてゐる。恐らく子規も、かういふ實例に對しては、今日苦笑せざるを得ないであらう。

私が子規から貰つた手紙の中で、保存されてゐる最も古いものは、明治二十三年五月七日東京本郷局を出たものである。裏には「東京本郷眞砂町、正岡常規」とある。子規はまだ松山の舊藩主の後進養成の目的で建てた、常盤會寄宿舍といふ、同鄕の書生の合宿所にゐた頃である。――入口に大きく「常盤會寄宿舍」と書いた札がかゝつてゐた。それは子規の書であつた。常磐の磐が「盤」と書いてあつたので、一寸問題になつてゐた。

長さ一間に餘る細書は「風の便りに一筆さし上申候處、直樣御返し文給はり難有拜誦仕候、無用の挨拶はぬきにして、痩腕の許す限り御高問に御答へ可申候」と書き出して

佐保姫は春の神にて、漢語の東皇又は靑帝といふに同じ、秋の神をば龍田姫と申候、支那の靑帝白帝などゝしかつめらしくいふよりは日本流に女性にするかた文學には面白く存候、西

洋にても MUSE など、中は女神に御座候。

「なんのその」の句は御意の通りに御座候、何故に此句がよきやと申せば、これはもと「なんのその」といふ前句があつて、此下に何かつけよといふ題なり、故に何とつけてもよろしけれど、成るたけ「なんのその」といふ意味が強く感ぜざれば、おもしろからず、然るに大高源吾が桑の弓も一心こりかたまれば、巖をつらぬくものを、何事か志してならぬ事やあるといひふくめたるは殊に面白し、これは陽氣發處金石皆透といふ句を翻譯せしものといふも可也、おまけに此句の面白きこと最一つあり、御承知の如く源吾は赤穗義士の一人にて常に復讐の事のみ考へ居候事故、此句もその意より出でたることにて、精神一到何事不成、まして況んや復讐の事をやとりきみたる處は此句に現はれ居候

「初雪や御用の外は車とめ」これも御說の如し、「御用の外は車とめ」といふ制札のたてあるものと見るべし、勿論車どめは雪のためならぬとも、丁度雪の日にこゝばかり車どめとなりたるは、雅人の本意にかなふて面白しとやいはん、「小便無用」の句も矢張制札なりなど古句に詳しい解釋と說明を加へ――其外尙も數句に――て後

此外の句も御了解なければ次便に可申上候、又以上の説明したる句につきても猶少しにても御疑あらば御申聞被下度候、總じて文學といふもの殊に詩歌發句の類は成るべく少き言葉にて成るべく多くの意味を現すやつか面白き也、漢語にて含蓄とか意在言外とかいふも即ちこれに御座候、李白の問余何意棲碧山云々の詩や芭蕉翁の古池の吟などの面白きと申すも、畢竟含蓄の多くして言外に無限の味ある故也、もし面白いのを面白いといひ、さみしいのをさみしいといはゞ何の妙味かこれあらん、是等は御面會の上ならでは御詳細に語りがたし、以上申上候發句にても皆含蓄ある故に面白き也、發句は巧者にいはずともありのまゝをいふがよきなり抔といふは、未だ俳諧の眞味を心得たる者には無御座候、まづは御返事匆々頓首

と結んである。懇切丁寧といふのは、かういふ教へ方をいふのであらう。これについて想ひ起すのは、私の處女作の批評を求めた時、其の返書の末に、もつと古句を讀めと言つて約十四五句を作例がはりに示してゐた。始めて發句の世界に導かれた私は、其の作例に逢著して、未知の曠野を行くやうな迷妄と昏惑を感ずるのだつた。私の解釋し得る、私の頭の爲し得る理智の總てを働かして、其の迷妄と昏惑を訴へた、其の返書がこの手紙であつたのだ。私はこの手紙

をうけとつて、どれほど衷心からの喜びに浸つたことだつたらう。でなくてさへ、子規を夢に見るほどの憧れを持つてゐた。私は其の說の當否などを判定する餘裕もなく、この掲げられた灯の下に、俳諧國に踏み入る危い足もとを照らし出してゐた。

が、「ありのまゝをいふがよきなり抔といふは、未だ俳諧の眞味を心得たる者には御座なく候」と言ひ、前揭私の處女作を改删した句振りと言ひ、やがて一二年の後に、俳句革新の聲を擧げた人の前奏曲として、其の甚しきアイロニカルな雜音的響きを持つ、むしろユーモラスな味ひを味ふべきである。

この二十三年の手紙の名宛に、子規は自ら「ほとゝぎす」と書いてゐる。私は子規の喀血をした事情はよく知らないが、子規といふ號が、其名の常規が土臺で、其の咯血を血に啼く意味にしたものであつたことは、ずつと後にきいたのだつた。始めはいろ〳〵に言つたが、子規といふいゝ字を見つけた時は、一寸うれしかつたなどゝ言つた事もある。この手紙に「ほとゝぎす」とあるのを見ると、無論其の喀血後で、子規といふきまつた文字を求め得た前らしくもある。恐らく當時は既に大學に入つた初年位であるから、一生不治と考へられた病に犯されたのは、それより一二年前、一高在學時代であつたに相違ない。

二十三年の夏には歸省して、一ケ月ばかり滯在した。尤も私の記憶も朧氣であるから、或は前年の二十二年であつたかも知れないが、子規の家を訪うた時、スツポン屋が其の格子戸の前に荷を卸してゐて、血に染つたスツポンが桶の中に生ま〳〵しく置いてあつた記憶だけは、ま

ざく〳〵と描き出される。病後の保養に、スツポンの血を飲めといふのが、イヤなものだと言つたやうな言葉もかすかに憶ひ出される。

　此時の土産は、其の年向島の櫻餅屋の二階に立て籠つて、自ら文藻を練つたといふ「七草集」であつた。秋の七草を見出しにして、美文、小説、詩、和歌、發句、今様、都々一、何でも來いと言つた風に、各種各様の創作を網羅したものだつた。持ち重りのする程厚みのある草稿だつたが、私は先づ其の書體の秀麗なのに打たれてしまつた。それを熟讀玩味したい。と言つて借りて歸つた。

　この「七草集」は、永く世に出る機會を失してゐたから、當時之を知るものは、子規に親しい二三の者に過ぎなかつた。子規といふ人が、人間的にも、詩人的にも、又た社會的にも、完成した一人格者となつた前時代のものであり、其の修養期のものであり、同時に子規の大事業の捨石でもあつた。兎も角燃え上らんとする叡智と、開き始めんとする情熱とが、制御しきれない奔放な勢ひで、口をつき、筆に任して煥發したものだ。子規の仕事から言へば、まだ乳臭い甘さがあるかも知れない、才能に誇つた衒氣に充ちてゐるかも知れない。けれども當時の私は、

嘗て耽讀した馬琴よりも、三馬や一九よりも、新たな熱と親しみを持つて、其の草稿を抱きしめるのだつた。

尤も其の時代は、露伴、紅葉、美妙齋、浪六等新たな文士が世にもて囃されて、それ〴〵一代の巨匠の如く傳へられてゐた。大學では略ぼ同期であつた紅葉の人物如何位は知つてゐたから、或は「彼等が」と言つた、自信と自負に滿腹してゐたかも知れない。そこに功名心も湧き、成功を急ぐ焦燥も伴なふ。同時に其の不治の病體である事が、悶々の情をも唆る。このまゝ朽ち果てゝは堪らない、と寢ても覺めてもぢつとしてをれない自己禮讃の焦燥は、子規の生きる道としては、餘りに當然であつた。この翌々明治二十五年に「月の都」を書いたのは、正に其の焦燥懊惱の爆發した烽火であつた。「七草集」は其の前提、其の小手調べであつたとも言ひ得る。

この「七草集」を書いた時に、そこの櫻餠屋の娘と子規との間に、或るローマンスのあつた事は、其の後四五年も經つて後に始めて聞いた。異性に對するローマンスといふものを餘り持たない、持たないといふより殆んど絶無であつた子規の一生に、このエピソートは砂漠中のォ

アシスのやうな恵みを思はせる。松柏欝蒼たる木の間の一本の花を偲ばしめる。子規は私達後輩に對する位置、と言つたやうな一通りの理性からか、それとも自己の情熱を打込んだ戀として語るには餘り貧弱であつたのか、晩年いろんな追懷談をして、可なり際どい處まで突込んだりしたけれども、このローマンスに就いては、遂に自ら其の一端にも觸れなかつた。たしか子規生前であつたと思ふ、五百木瓢亭の案內で私達二三人、向島長命寺內にあつた其の櫻餅屋に往つて、おろくと言つた其の娘——當時は旣に母になつてゐた——と話したことがあつた。話したのはたゞ瓢亭ばかりで、私達は子規のローマンスをバックにした一人舞臺のヒロインを大向ふから見るやうに、遠くから好奇の眼で其の女を眺めてゐた。若さと花やかさの疾くに失なはれた、行儀正しいとりすました樣が、淋しくいぢけてゐた。自分はもう老いた、と自覺したらしいあきらめが、暗く閉された伏目がちの瞼に刻まれてゐた。細づくりの、何處といふ缺點のない女であつた。色の黑いのが江戸ツ子らしい粹な樣子にふさはしかつた。子規の病氣の話をしても、羞恥を感ずる心の閃めきは、もう其の瞳には見られなかつた。私達は何らの期待をも持つてゐなかつたのであるが、それでも調子はづれのしたやうな失望を感じないわけには往

かなかつた。

子規の唯一のローマンスも、内的に子規でなければならない心理の特殊性を帶びてゐない。其の開展起伏に深みも強みも見出されなかつたとするなら、子規は遂に戀といふものを本統に體驗しなかつたかも知れない。この秘密は私達もまだそを解く鍵を持たないのである。

七　寄宿舍生活

明治二十四年の三月であつたと思ふ、私は東京で勉强する事になつて、松山中學の四年級を中途退學して上京した。さうして兄や子規と一處に常磐會寄宿舍に入つた。

私は一高の受驗準備の爲めに、錦城中學の五年級に入つた。其年七月の試驗には落第した。一方文部省の方針が一變して、來年からは受驗入學生を募集しないことになつたので、私は其の八月に再び故鄕の中學へ舞ひ戻る事になつた。在京僅かに五六ケ月に過ぎなかつた。

私は一年位勉强して東京にも馴れた時分、入學試驗を受けたいとも思つてゐたのであるが、何も經驗といふので、願書を出したのであつた。落第を覺悟の準備でも、小さな私の頭はどぎまぎしてゐた。兄や子規と日暮顏を合せてゐながら、文學談や俳句の話などを落着いてきいてゐるゆとりを持たなかつた。何かしら責任をおつかぶせられてゐるやうな、それでゐて勉强も身にしまない、都めづらしい田舍者のアタフタした氣分で終始した半年だつた。

當時の寄宿舍生活で、私の記憶に遺るもの丶片影二三。

×　　×　　×

寄宿舍の建物は、略ぼI字形をなしてゐて、上下の水平線にあたる部分が二階立てになつてゐた。其の左側が南うけで、そこに横長い庭があつた。庭の一方に運動機具唯一の鐵棒があつた。子規は其の鐵棒を見下ろす二階の一室、多分八疊の間を占領してゐた。兄と私とはI字の垂直線にあたる食堂の側の六疊間の一室に同室してゐた。

子規の部屋は私達二人の部屋に比べて、廣々してゐた。そこらに和書洋書の區別もなく、書きかけた紙や、もみかためた反古などが時には足の踏みどころもないやうに散かつてゐた。それが一層部屋を廣く奥深く見せるのでもあつた。兄はよく、正岡も不精者で、もういく日箒をあてないか、第一ほこりつぽくてあの部屋へはいる氣がしない、と言ひ〳〵した。私がいつか、「獺祭書屋」の讀み方と謂れを尋ねた時、子規は鼻梁に皺を寄せながら苦笑して、狼藉たる座右の様を指しながら「これよ〳〵」と言つた。獺が巣にいろ〳〵の魚をあつめて、それを貯藏するのを、支那の詩人が「魚を祭る」と形容した。かういふ形容は支那人獨得と言つてもいゝ。

我輩の巣は、本や反古を祭つてゐるので、物好きや氣まぐれではないのだとも言つた。

×　　×　　×

「おふたりともおいてるだらうと思つてゐた」と、私達の部屋の障子を明けたのは子規であつた。兄と私とは、ランプを一つ宛ともして、夜の勉强をしてゐた。

「マアおはいり、何やらこの邊が綺麗になりたナ。

「さうよ、さう言はれると何だか、丁度二タ月目かやナ……あの床屋でけふ始めて氣づいたんだが、短尺をかけとるナ。

「ありやアお前、ずつと前からさ……何やら深雪かなといふのぢやらうがナ。

「さうかやナ。すると我輩もよつぽど、うつかりひょんとしてゐるナ、近頃頭がわるいせいだらうか、ハヽヽ。

「ハヽヽ、あの床屋の主人がちつとはひねくるやうな話をきいたやうに思ふ、ありやアお前ぢやなかつたかナ。

「アシが何を知るもんか、あの短尺だつてけふやつと氣づいた位さ……さうお言ひりやアい

つか非風がそんな事を言つたことがあらい、さう〳〵。

久しぶり床屋に往つたといふ子規の、透きとほるやうな色白の顔が、私にも貴公子のやうに美しく見えた。兄と向き合つて胡坐をかいたぼろ〳〵の袴が、綺麗な頭と對照して、ランプの燈の下にぱアとのさばつた。

「それはさうと、けふはお土産を持つて來た」と、うしろに手を廻して、三人の中へ出したのは、見覺えの岡野の紙袋だつた。岡野の一番の大袋で、いつか茶話會か何かの時に、私が使ひに往つて抱へて歸つたそれと同じ袋だつた。袋は三人鼎坐の中に、不釣合に大きな尻を据ゑてゐた。

「煎餅といふやつは、話しながら食つてるとなんぼでも際限のないもんぢやナ、イヽエさうぞナ。けふは財布の底をはたいて來たんだが、何だか袋ばかり大きいやうぢやナ。」

子規は辯解するやうな口吻で、袋の胴中をバリ〳〵二つに裂いた。今まで立つてゐた袋が、ガラ〳〵音を立てつゝ横倒しになつた。

床屋俳諧の話から、大學の講義の話、紅葉眉山などの人物論、源氏物語の好き不好きなどそ

れからそれと子規と兄の話は、絶間もなく移りかはつて往つた。時計を見て驚いた子規は、勉强のお邪魔をしたナ、と言つて立つた。私は煎餅腹を抱へて、其夜の勉强、明日の代數の宿題で二時頃まで起きてゐた。

× × ×

寄宿舍のすぐ近くに、梅毒病院の原といつた廣場があつた。舍生の野球好きは大抵毎日この原へ、バットと球を持ち出してノックをやつた。私も時には松山仕込みの下手糞を恥ながら、其の仲間に加はつた。無理な球のとり方をして指を挫いたことも二三度あつた。今でも右の藥指の第一關節が曲らないで、毒蟲のやうな格好をしてゐるのは、この時の一記念でもある。

けふは珍らしく元老が出かけるさうな、といふ元老の一人に子規も加つてゐた。私は球をうける散兵線の中に加つて、原の一方の隈に立つてゐた。一通り打順の濟んだあとで、子規が打方に立つた。イヨーなど〻囃す聲も聞えた。二つ三つ打つてる間に、どうしてか空ばかり打つやうになつた。バットを十ぺん振つて、やつと一つあたる位だつた。上衣を肌脫ぎにした、眞白いシャツが、私の目にも何かを暗示するやうに沁み込むのだつた。空を打つバットを氣にも

しないで、元氣よく振り廻はす力強さが、私自身をきまりわるがらせた。と同時に子規に對する氣の毒さが湧いた。私達が顏や手足を洗つて部屋に歸つた時、子規は私の部屋で、兄と話してゐた。まだ肌も入れない、シャツのまゝで敷居に腰をかけるやうにしてゐた。乳のあたりに刷毛で刷いたやうに赭土の泥がついてゐた。

「馬鹿にくたびれたかい、バツトがあたらないと、一層くたびれるやうぢやナ。しばらくやらないと、ちよつとした呼吸を忘れる……恐ろしいもんぢやナ。

子規がこんな事を言つてゐるのを小耳にはさみながら、けふに限つて血の氣のない、艶のない、蒼ざめた其の横顏をぬすみ〳〵見てゐた。顎の關節のところが、お能の面のやうに刻み出されてゐるのでもあつた。

× × ×

虛子と私との交際は、中學に入つてクラスを一處にしてからであつた。クラス中の有志で、廻覽雜誌のやうなものを始めてから、其の有志の中でも親しい中になつた。虛子は小學時代からの秀才で、いつでも一二番の首席を爭つてゐた。私は彌次と腕白で通つたまア〳〵ガラ〳〵

書生だつた。虚子には「聖人」といふ綽名があつた。無口で謹嚴で、串戯一つ言はなかつたからであらう。私の綽名は本名の「ヘイ」で通つてゐた。聖人とヘイとは放課後よく往來したものだつたが、學校の書物や宿題などをお互ひに勉强した事は一度も無かつた。廻覧雜誌はたしか「四州會雜誌」と言つたやうに記憶するが、其の誌面は、聖人よりもヘイの方が牛耳つてゐた形だつた。自然二人の間の話は、詩歌小説などの文學談を主にして、いつとなく未來の大文學者を夢見る點で共鳴してゐた。虚子が私を引張り込んだ謠曲の會なども、可なり頻繁に催されたものだつた。私の家などゝは全く別な、一種濃厚な家庭の空氣の流れてゐた虚子の宅では、母堂を始め令兄夫妻も、虚子同様に私を遇さるゝのであつた。殊に母堂の蜜のやうな愛は、惜氣もなくと言つた風に私にも頒たれるのだつた。父や母に甘へるといふやうな味を知らなかつた私は、虚子の家を尋ねる事に、又た別な憧憬を持つてゐた。

こんな關係から、子規と私のつながりは、當然虚子にも及ぼさなければならない運命にあつた。虚子も私といふ相棒を失なつた淋しさからでもあつたのか、この私の東上中に、子規に紹介し、其の添削を乞うてくれ、と歌稿句稿のやうなものを送つて來た。私はどういふ考へてあ

つたのか、口で紹介する位置に居りながら、筆で推奬する手段をとつた。子規がそれを讀了したかどうかは知らない。又た其の草稿を添削してくれたかどうかも判然と覺えてゐない。何でも讀み覺えの文章規範か何かをもぢつた、漢文直譯體の紹介文であつたから、子規も仰山らしく餘計な事と感じたかも知れない、今考へても背に汗の流れることだ。併し、後に自分の後繼者として選んだ、唯一頼みにする者と推奬した程、子規の打込んだ虛子との接近する開幕のシーンとしては、それ位の添景は、或は何らかの刷き餘りの色彩ともなるであらう。

× × ×

大方の試驗も濟んで夏期休暇が近づいた。子規はたしか木曾路をあるいて歸鄕すると言つてゐた。明日出發といふ前晚であつた。兄と私は子規の、まだ獺祭書屋のまゝである書物の中に坐つて、子規と話してゐた。

何處まで汽車で往つて、それから菅笠を着てあるきたいとか、棧橋がどうだとか、福島あたりに二三日泊つてゐたいとか、前途を期待するやうな、私には何だか羨ましい話が綿々と盡きなかつた。其の中子規は金入れをあけて紙幣の勘定を始めた。私の目には、却々仰山な金だつ

た。今まで私の金入れには嘗て入れたことのない紙幣の數だつた。

「この一圓紙幣が十圓であつてくれるとナ。」

子規は紙幣の一枚を指で彈きながら、苦笑するやうに笑つた。兄もそれについてクツ〳〵と笑つた。

其の時分の私の學資は月七圓であつたと記憶する。それで月謝も下宿料も小遣ひも筆墨紙料も辨ずるのだつた。自分の學資は一圓紙幣がたつた七枚であることを、この子規の夏季の旅費の前に改めて計算させられるのだつた。

× × ×

こんなイヤな變なものはない、と言つて、大學の角帽はいつでも本箱の上に埃まみれにしてゐた。裾長がに袴をひきずるやうにはいてゐるのも、當時の書生の流行を支配してゐた、薩摩ぽの豪傑風とは違つてゐた。大學の角帽と一高の柏葉の徽章は、書生登龍門のシンボルでもあつた。町でもそれとなく幅を利かせたものであり、私學書生のケナルがつたものでもあつた。

未來の角帽を夢想してゐた私は、既に大學の拘束的な教育に飽いてゐた子規の心理の忖度しよ

うはなかつた。たゞ妙な事をきかせられる、と、ぼんやり聞き流してゐた。時には又た人並みはづれたエライ考へのやうにも享けとれた。寄宿舍の玄關などで、子規の角帽洋服姿を見出した時、オヤと輕い驚きを感ぜねばならないほど、角帽輕蔑思想が浸み込んでゐた。

× × ×

兵隊の服裝をした人が、日曜によく子規の處へ遊びに來た。一人は五百木飄亭（名は良三、現存）で、今一人は新海非風（名は正行、亡）であつた。其の外にも連れ立つて來る兵隊さんが二三人あつた。非風は背の高いので砲兵にとられてゐた。ブの厚いゴツ／＼した革の長靴が、ぬぎちらかつた玄關の狙板下駄の中に、この群小と言つた風にのさばりかへつてゐる時は、きつと非風の遊びに來てゐる時だつた。

飄亭は故鄕で父の千舟學舍の塾生であつたこともあり、十九て醫者の前期後期の免狀もとつた秀才といふので、會へばきつと言葉をかはしながら、心から親しむ氣持よりも、遠くから尊敬してゐる心持だつた。まだ丁年前後の若さでありながら、物に動じない落着きと、深く物を考へ入つてゐるとも見える凹んだ羊のやうな目つきとは、大抵の人が人相を一變する兵隊の幾

何學的の線の交錯と、生ま〳〵しい原色の露出である色彩でさへも覆ひ紛らすことは出來なかつた。瓢亭は生れつき色が黑かつた。が、其の色の黑さは、此人がどういふ未來を持つかの運命の謎を一層深くするのに役だつてゐた。

非風を知つたのは、偶然子規の部屋で會つたのが最初だつた。氣の輕い、賑やかな、言葉に誇張的な形容が多かつたが、併し十分に明るさを持つた、中で一番親しみ易い人だつた。どういふ話でも半分笑ひながら、さも嬉しさうに、一語々々に力を入れて行くので、いつか其の方向に引きずられるのだつた。美しく並んだ白い齒を見せる大きな口から垂れさうになる涎を拭き〳〵話しすゝむ時が、其の喜びと明るさの絕頂であつた、面長な規則正しい顏に、ゆとりを與へる二重の眼瞼のやさしさが漂つてゐた。總てが瓢亭と反對であつた。それでゐて一番仲がよかつた。時折この二人が子規の部屋に落ち合ふ時などは、時代物、世話物、悲劇喜劇の役者ぞろひと言つた形で、歡樂は他の舍室を壓してゐた。

子規から俳句の話をきいて、少くも句作らしい氣分に浸つて往つたのは、恐らくこの二人を嚆矢とするであらう。さう言へば、當時寄宿舍內の廻覽雜誌と言ふやうな、それも文章を主と

したものが、子規の手で纒められてゐた。兄と子規が中心で、美文、詩、和歌、句、今様等それぐ〳〵の文藻が滿載されてゐた。其の中に、飄亭、非風等の名も無論加つてゐた。何といふ名であつたかは記憶しないが、當時紅葉を中心とした硯友社の「がらくた文庫」に匹敵する體裁のものだつた。他の氣まぐれな連中の中に、飄亭と非風とは子規の兩脇士の格で光つてゐるのだつた。

此外に早く子規の仲間になつてゐたのは、藤野古白（名潔、亡）であつた。子規と從弟同志で、年も飄亭、非風等と同じで、子規より二つ許り若かつた。其の生涯を支配したローマンスの爲めこの寄宿舍には入舍しなかつたやうであるが、時折遊びに來る位の事はあつたらしい。兎も角、古白の物を凝視したやうな、神秘其のものを捉へてゐるやうな瞳の潤ひに親しんだのは、もつと後の事であつた。

飄亭、非風、古白の事は尙ほ後に書かねばならない。子規を中心とする藝術の醱酵素としてこの三人を閑却することは出來ないのである。併しながら、どのやうな大事業でも、其の出發間際の第一步は、當事者も殆んど無意識の、沒我の、何物も捕捉しない漠然たる運動であるや

うに、これらの人々の參加した時代の原始的狀態は、無方針無理想と言つていゝ空虛な運動に過ぎなかつた。言ひ換れば、まだ藝術の領域に足を踏み込まない遊戲其のものだつた。

この遊戲狀態から藝術狀態に進化して往つた機緣は何であるのか、氣まぐれな玩弄的觀念から、嚴肅な精神的觀念への轉換の動機は何か。かういふ疑問が當然起らねばならない。

尤も、子規其人の複雜な心理に立ち入つてまで明確に解析する事は不可能であるとしても、外に表はれた事實から、其の一端を推測し得ないにも限らない。そは姑らく後廻しにする。

× × ×

試驗入學全廢の爲めであるとは言へ、私の上京の素志の傷けられた、うら悲しい氣分を胸に祕めながら、私も七月の末から房州の旅に出て、成田、北條、日本寺あたりを四五日あるいて歸つた。當時の記憶は判然としてゐないが、毎日照りつける炎天の下を、たゞ一人トボ〳〵あるいた、何の面白味もなく、苦しくつらかつた、其の苦痛を囃すやうに、蜩が朝から晩まで鳴いてゐた、旅人としてのたよりない淋しさを痛感したのだつた。けれども、試驗勉强から解放された、頭の自由な、其の寂寞のドン底で、始めて拘束から放たれた自分といふものを、微か

ながら認めさせたやうだつた。入學試驗までは、文章を書くとか、句を作るとかいふ事から自然に遠ざかつてゐた私は、この旅中の觸目の景情を謳ふやうな氣になつて、何やら手帖に書きつけたものを、十七字にまとめたいといふ、又たそれがどうやらまとまつて行くやうな好奇心にも驅られてゐた。

明治二十四年で私が子規から貰つた手紙が二通殘つてゐる。其一つは歸省した子規が、まだ上京中の私に寄せたものだ。其の全文を左に掲げる。

玉書拜讀前便芳牘に就而は小生かん違ひ致候よしひらに御宥恕可被下候、それならば最早一言もなかるべく候、英雄豪傑の定義は未だ一定せず、いづれなりとも御判定次第也、前條已に取消申候上は俗氣云々の語も無論消滅之事と御了承被下度候、俗氣は如何なるものかいふだけ野暮には候へ共、つまる處野心とか功名心とか大望とかいふことのあるものは卽ち俗氣あるものと被存候、勿論世の中に全くこれなきものは全くこれなかるべし但深淺多少の差違あるのみ○中學校事件に付ては先日一寸尊大人まで申上置候得共、是非御歸鄕とあれば致し

方なし、勿論世事は塞翁の馬なるものを
小生の發句御評判被下候處有難候得共、御高見は愚意とは大に相異り申候
今度の御句は前便に變りて皆々面白く存候これがまづ旅行の一德に御座候、面白くないと思はるゝは乍失敬

見返せは電信棒の二ッ三ッ

ひら袖も十年ぶりや夏の旅

の二句に御座候

枯木折る人もありけり夏木立

は丈草の

啄木鳥や枯木を探す花の中

に似て感情の深きを覺ゆ

一息に三里はきたり蟬の聲

古人の

鵜につれて三重はきたり岡の松

に通ひていみじく物せられたり

蜩やはりきる白帆糢糊として

實に〳〵面白き句調感服の外なし、只糢糊の二字のみ春めきて何か心の足らぬ心地するは口をし

故人五百題の新本ならば方々にて見受申候、切通の手前右側の書籍店にて續編も揃ひて四冊有之しやに覺之候、代價は四冊四十錢かと被存候、新本は高きが上に板わるき故不都合に御座候、御返事まで草々不一

一日　ほとゝぎす

青きりさま御もと

拙句御目にかけるへきものなし一二

ふきかへすすだれの下や蓮の花

ふきもせぬ風に落ちけり蟬のから

心太そへてねのつく清水哉

御一笑に候

この一日は封筒に八月一日とあるので、二十四年八月一日であることが明らかだ。英雄豪傑論と俗氣論とは何に因由するのか不明である。これて見ると、子規と私との間には、松山と東京とで二三度書信の往復をしてをるやうであるが、それらが皆散逸したのは遺憾である。兎も角、何かにつけて、子規の說にのみ盲從してゐなかつたらしい私の態度が、子規のこの癖に障つたらしい文句の上にも表はれてゐる。併しながら、房總旅行の所產であつた吐き捨ての駄句、自信も持たなかつたものに對して、かやうな贊辭をうけとつた私の喜びは想像に餘りある。句に對して暗中模索してゐた私は、この贊辭によつて始めて一道の光明を與へられたやうな氣がした。句になる要諦の寫實のコツはこゝだ、といふ自覺の第一階梯をふんだのだつた。落第不名譽を荷うて歸る私の心の中には、人知れずこの悅びを祕めてゐた。

故人五百題を買ひたがつた私の心持も、大方に推察することが出來る。尤も古句研究の目標

が、まだ故人五百題あたりに限られてゐた幼稚さを語るやうなものであるが、さりとて化政天保調などを一足飛びに、芭蕉中心の元祿調に迫つて行く用意は、無批判な低級な遊戯觀念から見て、一頭地を拔いてゐないとは言ひ得ないのだ。これは私自身の發明からでなくて、子規の半生の訓話や議論に感化されてゐた、寧ろ子規の意見であることは言ふまでもない。元祿調早わかりの俳書として、故人五百題を推稱した子規の管見は、恐らく子規の創意であり、又た合理的な批判の基礎を持つてゐた。

× × ×

當時の同宿生の中で子規の感化をうけた一人に、勝田明庵（名は主計、前大藏大臣、現存）があり、五島五州（名は武雄、後姓を西原と改む、現存）があつた。明庵は當時一高在學中であつたが、句に對してはさまでの熱はなかつた。五州は少し後れて來たと記憶するが、一時は純俳人として立つかと思はれるほど、總ての會合に出てゐた。五州は大學を中途でよして、地方の中學校長などを勸めてゐたが、其後鄉里松山に老後を靜養してゐる消息を得た。

内藤鳴雪（名は素行、享年八十、亡）は、當時寄宿舍の監督をしてゐて、同じ棟つゞきに一

家を構へてゐた。監督と言つても、兄や子規などゝは半ば友人として交際すると言つた親しい間柄であつたやうだ。在宿期間が短かつた爲めに、私には監督者被監督者としての交渉が少しも無つた。まだ文部省の參事官として在職中であつたとも記憶する。句に遊んだのは官を罷める前後の事であるから、恐らく翌明治二十五年頃からであつたであらう。尤も漢詩の應酬などは、常に兄や子規の間に行はれた。子規の部屋で、一調子高い琅々とした話聲のあたりに響き渡るのを聞いて、どうも先生からしてあれだから困る、などゝ舍中で子規派に反對してゐた佃派（佃一豫、元滿鐵理事、亡）の誰かゞ言つたりしたこともあつた。

八　三つの會稿

夏季休暇で東京から歸鄕する書生は、大方東京での書生風を露骨に調子づけて、爼板のやうな薩摩下駄をごろつかせ、腰に手拭をぶらさげたりして、鼻つくやうな田舍の町を一人で占領したやうな顏してあるいたものだが、さういふ東下りのまねは、再び上京の機會を失なつた敗殘の私には出來なかつた。人に顏を見られるのもつらかつた。が、子規がまだ歸省中であり、虛子も可全（私の今一人の兄、名は銓、現存）も子規と往來してゐたりしたから、私の居るべき天地は案外に廣かつた。私が學校の勉强などをそつちのけにして俳書を讀んだり、句作に沒頭したりするやうになつたのは、この夏の氣分と習慣が其の素地を作つたのだつた。

二十四年八月十五日と日記に記した私の句稿がある。

八月十五日高濱を訪ひ團扇二三本ありけるが一本の繪は滿月低くして尾花いくつも風になびき月にあたりたる處は銀色にして否らざる處は靑色顯然たり是に題せよと謂ひければ

と前置をして數句を並記してゐる。

八月二十五六日締切、兼題、鶉、案山子、蓼の花、待戀、砧（國名三ツ入り）

八月三十一日武市友阿兄と共に高濱の樓上に會を開く終りに飯を食ひ茶を飲む、其席上題（武市は武市雪燈名は庫太、前記詩會の一員と同人、阿兄は可全）

など書いてゐて、判紙二十枚ほどの一冊が全部、句又は和歌の愚作で埋まつてゐる。外に子規と會合したやうな記事もないから、十五日頃には、子規はもう上京したのかも知れない。

この八月三十一日の會合の草稿を纏めて「岸の細波」と題した一冊が遺つてゐる。其の卷頭の連俳三半歌仙の中に雪燈、可全と共に子規の名も見えるから、子規在鄕中の會合の作をも合せ錄したものであらう。東京の子規の仲間には、昔の詩會を繼續したやうな會合も時々催されてゐたであらうが、松山に於ける我々仲間の俳句會は、恐らくこの八月三十一日か、それとも子規在松中の會合を其の起源とするであらう。左の子規から貰つて二十四年の手紙の他の一通は、這間の消息を知る便りともなるであらう。

（受信地松山、發信地東京、時日は九月十六日）

河東秉君、高濱清君兩梧下

愚生在郷中は種々御厚志を被り、殊に出立の節は三津まで御見送り破下難有奉存候、其後御手紙も被下、早速御返事可申上筈の處、俗事（試驗といふ大俗事に御座候）の爲に妨げられ、今まで延引いたし、今後も暫時の間は氣せはしく、ゆつくりと御起居相伺譯には難參と存居候、併し實際氣せわしきのみにて、少しも勉强不仕、着京後今日まで爲したる事も、盡く俳諧に關する事のみ、風流の罪過とはこれを申すべきか呵々

河東君より被下候送別の御文面白く拜讀仕候、發句わかりかね候へども、句調甚だ高く申分なき故、後學には分らぬものとして中々に尊く存居候、高濱君も紀事御示し被下難有存候、愚生出津の砌一句もなく殘念に存候故、おそまきに左の一句備御笑覽候

これ見たか秋に追はるゝうしろ影

其後も雅莚御開き被成候よし、只千里の翼なきを恨むのみ、盲探りの新趣向杯聞くさへもはや興に入り申候、課題の分別稿にしたゝめ御送申候、御叱正被下度候、此草稿は御地に御留

め被下、會稿の中に御とぢこみ被下度、御批評は夏休みに見るか、叉た幸便の節御送り被下度候、併し貴下等の御稿は拜見仕度存居候、小生數日間大宮氷川公園（これは上野停車場より丁度一時間の汽車程也）へ閑居致候、當公園は敢て人工によりしものには無之、松樹林立、共間に秋草參差たる處は、いふに言葉なく書くに筆動き不申程候、殊に萩の名所ともいふべく、一面萩薄のみの廣漠たる原野も有之、古のむさし野の名殘といへば今更に忍ばれて、都に歸ることのいやに相成申候も、餘り子供らしくとや御考可被成候、若し貴兄等と共にこゝに遊ばゞ如何に快ならんを。さりとては海又海、山又山

河東君に申す、先日尊大人より御手紙被下難有拜誦仕候、早速御返事可申之處、前述の如く氣ぜわしく存候、折柄今暫らく御音信も難致、右よろしく御鶴聲奉願候、叉武市雪燈へも右同樣

明治二十四年九月十六日　西子拜啓

三日月の重みをしなふ薄哉

狼の人くひに出る夜寒哉

葛花や秋を尋ねてはひまわる

山姥の畫に

奥山や秋はと問へばすゝき哉

美術論の後に

月雪やこれ見るための米のめし

右拙句數首御一笑被度候

文中にある子規の原稿は「岸の細波」の次ぎの會稿「暇なき月日」の中に綴ぢ込んである。十二の青罫の入つた薄い雁皮紙に「明治二十四年秋宿題」と書き出して、鶉、蓼、案山子の句約三十句書きつらねてある。蓼四句の後に

いづれも藪の竹の子テモはづかしい。それとも蓼くふむしの茶人殿おすしのあいそにでもなりませうか

又た案山子三句の後に

自號西子

西行の子とは思へど鳥をどし

誰をおどさんとてか案山子のもの〳〵しきこそ似而非わざなれ。いとみにくゝ出來たる

も哀れとは見給へや

などの戲文を附し、叉た「月下言志」の下に

自ら其分に安んじ已れに恥ぢず是れ丈夫の心也世に知られざるこそ中々たうとかりしか

明月はこよひなりけりくもるとも

名をあぐるは固より煩惱の源さりとて名を思はざる大悟徹底の上人は何人かおはす。我

少にして天下後世に名を擧げんことを思ふ稍人となりて漠然として腕のふるふべき所を

知らず。さりとて多少の名譽心なからんや一鄕にあぐる名だにかたきものを

むさし野やこゝだけも月は八百里

眞面目な抱負の一端を漏らしてゐる。さうして最後に

御用捨なく奉願上候也　子規庵西子

と落欵してゐる。言ふまでもなく西子はほとゝぎすの異名である。「子規庵」と世間の宗匠の持

つてゐるやうな庵號を附したのは一時の洒落氣分に過ぎなかつたであらうが、これがやがて子規と定まつた號とする前提であつたであらう。

「岸の細波」「暇なき月日」に次いで尙數册會稿は編まれたと思ふが、私の手もとに十月二十五日の日附のある今一册「二輪梅」が遺つてゐるのみである。以上三册とも判紙拾枚乃至二十枚位の古風な廻覧雜誌であるが、各作者が同時に饒舌な批評家となつて、朱、インク、墨等で、寧ろ亂雜な程度に批評を加へてをり、批評の批評を試みてをり、どの頁も殆んど餘白を持たない賑やかさである。無論子規の原稿に對しても、手加減を加へるやうなことはなく、甲是乙非の評が滿紙を染めてゐる。中には駄洒落に類する冷評なども交つて、日頃お互ひの無邪氣な、分け隔てのない交際ぶりをも偲ばせてゐる。併し我々仲間のお互ひの批評は、たゞ言ひ勝ちに了つてゐるが、子規の批評には心からの尊敬を拂つてゐたので、會稿を必ず東京に送つて、最後の判定を乞うてゐたやうである。「岸の細波」を開いて見ても、最初の一句から朱で丁寧な批評を加へてゐる子規の筆跡は、隨所に見る事が出來る。子規も半ば興味本位で、誰かの批評に「ヒヤ〳〵」と添へがきしたり、「相變らず達者だね、ハヽヽ」とひやかしたりもしてゐるが、

共の教へるべきを教へ、正すべきを正してゐる、對藝術の眞面目な研究的氣分も、共の倦むことを知らない親切な批評の奥に流れてゐる。可全の草稿の中に「小生讀ンデ此ニ至ル時ハ明治二十四年十一月一日夜十二時二十分ナリ　規」と書いてゐる如きは、この蕪雜な草稿をさへ等閑に看過してゐない用意を物語つてゐる。殊に「總評」として卷尾に附してゐる共の意見などは、當時の私達の襟を正しうせしめたものであつたばかりでなく、これらの瓦礫の中から、一つでも眞珠を拾はうとしてゐた、批判的努力をも意味してゐる。さうして今日から見ても、この會合に對して爲し得る批評の粹と言つてもいゝ慧眼に推服させられるのである。

總　許

「岸の細波」とは蓼にちなみ給ひしやさりとては覺束なし

諸君子の高作數百首拜見仕候、何とも格別これといふ御秀逸も少き樣に相見え申候は如何にや、併し出色のものをあぐれば先づ左の如し

白露のこぼれかゝるや啼鶉

萩の家は二軒ならんで秋の風

鶯や谷間〳〵の水の音

松影をたゝきひくめてさよ砧

十一月二日

東京本郷臺寄宿舍南窓の下にて

子規庵西子妄評

次ぎの「暇なき月日」にも、句々について細評を試みてゐるが、尚ほ各人の草庵の末尾に、個人評ともいふべき十七字を列ねてゐる。例之ば虚子の草稿の後には

三日月はたゞ明月のつぼみ哉

一句代贊　子規

私の草稿の後には

面白う聞けば蜩夕日哉の一句千誦萬吟猶あかず

ひぐらしや隣もねむき糸車　子規

（此句贊に非ず）

可全の草稿の後には

春か秋か何とも見えぬ我亦香　　子規

雪燈のには

鬼灯や田舍の秋は秋らしき　　子規

と記し、卷尾には

明治二十五年一月三日夜當衆落掌卽夜閱し終り候

一枝に四輪は多し冬の梅　　子規題

など落款してゐる。

尚ほこの「暇なき月日」には「伏林子兎角」といふ異號て、藤野古白も批評を挿んでゐるのが目につく。

こよひはふけたればとて席上兼題の分だけ見のこし侍り　二月五日夜

月かげをふるひあげけり四手網

と其の筆跡が卷尾に見える。恐らく明治二十五年の一二月頃は、この會稿が子規派俳句の公

的性質を帶ひる其の捨石のやうに、獺祭書屋の机塵にまみれてゐた時であらう。

次ぎの「二輪梅」には、卷尾に意外なことが記してある。

不相變諸兄の批點は小生のと大に異り候、これも古き故に、今更いふもくだくだしかるべし。併し青桐虛子兩君の殊の外の句柄の見劣りずるは如何。可全君の時雨の詠は句々老錬にして金石の響あり、眞に壓卷の御手際なり

有明を小窓ひとつに時雨けり　規安

「これも古き故に今更いふもくだくだしかるべし」とは、固より子規自らの謙遜の辭ではあるが、私始め盲蛇的の愚見を吐露するにさへ、尙ほ聽かうとする餘裕を存してゐる。尤もとりやうによつては、虛子と私とに痛棒をくはせて、どうしてさうわからないのだらうと歎息した意味も含まれてゐる。たゞこれらの處女的蕪作時代に於てさへ、外的な師弟の關係から意思を拘束する月並な覊絆を脫して、自由に解放してゐた襟度の美しさを回顧すべきであると思ふ。この「二輪梅」にも、湖伯、壺伯等の名で、古白の批評が挿まれてゐる。

尙ほ前二卷「岸の細波」「暇なき月日」では、虛子には定まつた號がなかつた。高濤と書いた

り、清と一字にしたりしてゐる。又た時に「放子」と言つたりしてゐた。この「二輪梅」に至つて、始めて「虚子」の文字が表はれてゐる。一日子規と此の話をした時、其の本名をもぢつて卽座に「虚子」と捻出したのは子規であつたとも記憶する。放子の意味にも共通するといふので、總てに異議がなかつた。併し私はまだ「青桐」「女月」「桐仙」などゝ言つてゐて、一定した號を持たなかつた。碧梧桐の三字を捻出したのは、虚子と一定する前後のことであらうが、それにきまつたのは恐らく子規が「日本」の文苑欄を受持つた後の事であつたであらう。

九　小説會

子規から明治二十四年に貰つた手紙が、今一通出て來た。封筒を失なつたので、何處から發信したか不明であるが、まだ常磐舍にゐた時分であらう。

度々の御手紙拜受難有拜讀仕候、前便拙句に付御評判被下拜謝々々、尤ちつと氣のへにの誤か）くはぬ處もあれど、されど大體に於ては小生の意見と符合致候故、別段申上る程の價値なし

ゆらくと夕日ひろかる枯野哉

といふ句は小生の句にては無之、瓢亭の句作故右正誤す。雲助の句御改作被下候へども、御句の味小生にはちつとも相解し不申候、冬枯の句も「そつて行く」と御修正被下、それ面白からぬにはあらねど、格別拙句より見あげたりと思ふ程のものとも不覺候、前便に御示し被

下候御句の中

狼や炬燵火きつし(きか)旅のやと

は一かどの名句と被存候、其餘は盡くぼろにて、吾兄平生の技倆は盡さずく、
御返事のおくれ候は別に何といふわけもなけれど、先日來忙がしきやうな心地にて、且つ昨
日は寄宿舍第四年紀祝宴故、それらの爲に延引仕候次第也、試驗の事御尋ね被下難有存候、
まづ今年の處はどうやらかうやら及第致し候
大洲地方へ御旅行之由健羨々々、小生曾て大洲に遊ぶ、而して今日より之を見るに已に十年
の星霜を經たり、山水非ならず、頭顱已に非なりとても申べき位也呵々
御示の句中

散る木の葉風はたてよこ十文字

は實に名句なり、蓼太に迫るもの也

阪下りて風になりたる枯野かな

の句も句法何となく面白し、其他御得意の句をはじめ、皆面白からず

國民の友の十七字評僕も一見せり、大兄の御評「近頃の一快事」抔と被仰候は何の事やら心得不申、發句といへども稲雀の一句を除きては見るにたるものなし。蛇ふんでの句の如きも大俗々々、其人の作とも覺えざる位也、我兄の御褒詞心得ず、如何々々

謠御上達大賀々々

十一月三十日　　子　規

碧梧桐兄

「まり唄」

といふ題にて五枚限りの小説を今年中に作る約束あり。來年正月二日に當地粹人右をもちよりにて開く筈、竹村尊兄も出題者なれば無論仲間の一人なり。吾兄も願はくは本年中に右御認めの上小生迄御送り被下間敷や、銓兄、高濱君にも御傳へ被下度奉願候

以上が其の全文である。この手紙によると、發句に指を染めて僅に一年餘を過した私が、子規の句に向つても正面から斧鉞を加へるやうな大膽なことをやつてゐる。今日から考へて、そ

れが當時の私であつたかどうか、甚だ疑はしいほどの潛越さである。恐らく古白、飄亭、非風を始め、私の二人の兄でさへ、左樣に出過ぎたまねは爲し得なかつたであらう。併し左樣に大膽な所業も、私としては、全的な自己を暴露して、子規にブツかる意味に過ぎなかつた。お世辭やお座なりのまぬるさに堪へないで、眞摯に一生懸命に熱中する信念の表はれであつた。道の爲めとか、自己の爲めとかさういふ效果には恐らくは無意識であつたであらう、私自身の詐らざる感情、曲くべからざる理解、其の總てを投げ出す人を、たゞ子規にのみ見出してゐたのであつた。かくて公明なる批判を要求するといふのでもなかつた、透徹する敎訓を仰ぐといふのでもなかつた、私は子規の前に、私自身を暴露しなければならない衝動に餘儀なくせられて、無我に振舞つてゐたと言つた方が適切であるかも知れない。言ひ換へれば、些の疑惑も隔意もなしに、私は子規を信じ切つてゐたのだ。

この廿四年の夏のことであつた、私は每日のやうに歸省中の子規を尋ねてゐた。庭の木に鋏を入れたり、畑を耕したり、草をとつたりする、夏休みの年中行事が、其の爲め延び〳〵になつてゐた。或日もう出かけようとしてゐる時、座敷で父とばつたり出會つた。

「此頃はエライ正岡信仰ぢやノー。

父は冷笑するやうな口吻で、汗ばんだ裾をからげながら、私の前に立ち塞がつた。私は今迄感じたことのない、父に對する反抗氣分をぢつと壓しつけて默つてゐた。

「マア、正岡信仰もまアエヽ、チト庭の木も刈らんといかんぞイ。

父はさう言つて、私の前を避けて、づか〳〵素足のまゝ燒けた庭土の上へ下りて往つた。

私は門を出てから、けふに限つて、父がなぜあんなことを言つたのか、其意味を考へねばならなかつた。たゞ毎日遊んで許りゐて、家の用をしない、といふ警告ばかりではないやうだ。久しく父に物を聽くといふこともしなければ、子規と同じく東京にゐる中兄にたよらうともしない、自分の骨肉を忘れてゐるやうな、私の態度や氣分を不快に思つてゐるのではないだらうか。さう思つて、平生寛大であり、何の干渉がましい事もしない放任的な父にも不似合な言葉だ、と改めて不快と反抗を感ずるのだつた。私は子規を信ずることによつて、私の最善を盡してゐる、前後の商量もなしに子規に阿附してゐるのではない、それが爲めには父とでも爭ふことを辭せない、とひとりで反抗氣分を昂らした。

が、夏休みの年中行事を打ちやつて置く事も出來ない。日の出ない朝早くから晝迄其の仕事にかゝつては、相變らず子規の處へ日參してゐた。父はそれきりもう何も言はないで、機嫌のいゝ何のこだはりもない、いつもの穏やかな顔をしてゐた。

私は明治二十七年に父と永別するまで、父に對してこんな反抗感情を持つた經驗は一度もなかつた。大方父の無意識な言葉を、幾分自分の熱中さを咎める心から、妙に曲解した私の誤りであつたであらう事を、今でも後悔するのだ。

大洲は松山から約二日の里程で、肱川といふ愛媛縣第一の長流に面した景勝の地だ。この時は途中內の子といふ町に一泊して、往復三四泊の旅行をしたのであつた。小兄の可全と外に二三の學校友達が同行したと覺える。日曜毎に釣に行くとか、近くの山登りをするとか、人並な健脚仲間であつた私は、歸鄉以來餘り目に立つ事も爲し得ないで、せめて句でも作つて、やるせない思ひを慰めてゐたのであるが、國の中學に復歸も出來、時候も秋になつて、追ひ〳〵落着いた仲び〳〵した、屈托のない昔の私に還つてゐた。この四五日の旅行が、私にどれほど心からの嬉しさを喫つたことだらう。東京で房總の一人旅をした、うら淋しく涙ぐましかつた、

まだなま〳〵しい記憶と對照して、總てが樂しい華やかな、秋の輝かしい太陽の光りに踊りあがつてゐた。

この旅行の收穫として、又た恐らく澤山な駄句を書きつけたことだらうが、幸ひに其の草稿は散逸した。大方これ見よがしに、子規にも通信して、多大な讃辭を期待してゐたのだつた。こゝに上げた「散る木の葉」の句は、後に子規の小說「月の都」に加へられたと記憶する。どうしてこんな句を名句としたか、私も終に其理由をきゝもらした。寧ろ「坂下りて」の方が、遙かに句らしいものになつてゐる。情操の流れが妥當な表現をとつてゐる。

國民の友十七字評は誰がやつてゐたのか、今覺えてゐない。國民の友と言へば、この時分私の愛讀した唯一の雜誌で、其の政治論を始め、每號全卷を通讀したものだつだ。さうして德富蘇峰といふ人の私達を敎へ導いてくれる達見に敬敬してゐたのだつた。後藤象次郎伯の大同團結といふ政治運動が新聞を賑はしてゐる時だつた。末廣鐵腸といふ國の宇和島の雄辯な政治家が、其の主義宣傳に四國を巡遊した。政治に無關心であつた私も、松山での其の演說會をきゝに往つたのだつたが、鐵腸先生の二時間にも餘つた一人演說の內容が、嘗て國民の友で熟讀玩

味してゐた、富國强兵論の溫習だつたので、甚しく失望したことを覺えてゐる。演說をしながら、テーブルの橫の板の間へ、しよつちう痰や唾液を吐きつける無作法な態度にも顰感した。政談演說會といふと、輕薄な低級なものに考へるやうになつたのは、この第一印象が與つて力あるのだつた。さういふ關係にある國民の友であつたから、其の十七字評をも勢ひ妄信して、痛快呼はりをしたものと見える。この痛棒を喰つて、私も幾分反省したのか、其後以前のやうに國民の友を愛讀しなくなつた。

こゝに「まり唄」といふ小說の課題が報ぜられてゐる。別に際立つた事件でもなく、一つの有り來つたことゝして書かれてゐる。何らの記錄も遺つてをらず、私の記憶も漠然としてゐるが、前に揭げた「岸の細波」の最後に、私の中兄が、左のやうな批評文を書いてゐる。

若手の先生がた、憚る處もなく畏るゝ所もなく、自由自在にものせられたる御手際、いさましなどいはむは愚なり（中略）卷中載する所、玉石混交せるは今更に咎むべきにはあらねど唯だ發句のみ多くて他の文學の僅ばかり見ゆるは如何にや、發句の國文學に於ける地位、將來に於ける發句の發達、發句學の淺深など考へ來らば、諸君は重きを發句に置き過ぎずや、

諸君の見識は一方に偏し居らずや、何ぞ雅文をも作らざる、狂歌をも讀まざる、近松なり西鶴なり馬琴なり種彦なり、文章は猶ほ多く、川柳なり都々逸なり、詩も豈乏しからむやは、諸君請ふ其眼を大にしてよ、其見を偏せしむるなかれ（下略）

この意見の當否は別として、かやうな勸說もあつたので、子規も小說會をやるやうな氣にもなつたのではないであらうか。尤もそれまでの子規は小說界に乘り出す十分な野心を持つてゐた。又た私達もこつそり小說の物まねを書いて見た事もないではなかつた。一代に名を成す上から言つても、發句は小銃的に餘りに無力だ、小說――雄大な小說の大砲でなければ巨彈は飛ばない、と言つた大ざつぱな賣名的考へも時には私らを支配してゐた。發句の雅會のやうに、小說會も當然生れるべきであつたのが、むしろ延び〳〵になつてゐたとも見られる。

この「まり唄」を課題にした小說會の結果は、後に掲げる子規の手紙の中に詳しい。

學校の試驗といふものゝくだらなさは、どこにも大學生といふ一人格を認めない、根本の思想に發してゐるのだ。ノートや敎科書の詰め込み暗記を强ひるのは、小學中學生扱ひと何の差違もないのだ。それに敎師といふ敎師が、どれも下劣な俗物許りだ。學究的には物を知つてゐるかも知れないが、それならエンサイクロペディヤで澤山だ。イヤな人格に、用もない學問をおしつけられる、學校とは一體こんなくだらない檻なのか。まるで學問といふ美名をかぶつた牢屋だ。この牢屋を無事に服役しなければ學士にはなれないなんて、學士とはやがて特赦放免囚の異名ではないか。四角な帽子で頭をおしつけられて、金鈕の詰襟で締め付けられて、眞に監獄學校のいゝシンボルだ。頭が馬鹿になつて、咽でキウ〳〵言つてゐる、本統に笑はせる。アレで一人不平をいふ者もないどころか、俗惡先生の前に、俗惡おべつかを並べて、拘束と羈絆と强制と壓迫の醜骸をさらけ出してゐる。いくら娼婦でもアヽまで無氣力で無人格では有り

得ないだらう。それでも世の中では、其の無氣力無人格の特赦放免囚の随一を、天下の秀才といふ。大學を人間の羅市と心得て、銀行會社から買ひ出しに來る。一科九十點以上、總平均點九十六點などゝいふ紅白粉をつけて、成るべく太店に賣り付けようとする。人身賣買の公設市場は、一體何處だといふのだ。大學は德に入る門なり、と孔子は言つたが、成るほどこの德は損得のトク德若に御萬歲のトク、なんだ——自分ながら出鱈目の洒落を苦笑しながら——眞に立派なトクに入る門なんだ。ア、イヤだ〱まだ向ふ三年この苦界に喘いでゐなければならないとは、何として因果なことなんだ。

こんなことを考へてゐる中に、稻妻のやうに頭の中を突きぬける他の考へが閃めいた。

さうだ、學校を卒業してからなんて、そんな呑氣千萬な、まぬるいことでどうなる。學校を卒業する爲めに、其の締め木の苦痛を堪へる爲めに、どれほど無駄なエナーヂーを消耗することか、イヤ生命まで縮められてしまふ。折角卒業はしたものゝ、この傷手を負うてゐるからだをブチ毀して、もう何んにも出來ないなんて、筋書がチヤンと出來上つてゐるやうだ。そんな筋書を踏ませられる大根役者に誰がなる、と言つて人身賣買の公設市場の店ざらしは、我輩の

素志でもなからうぢやないか。まア目を街頭に向けるがよい。十字街頭は生きた大學だ、と誰かゞ言つた。同じ倒れるにしても、牢屋で蛆虫のやうに責め殺されるよりか、街頭の戰場に出でゝ血を流した方が、丈夫の面目、どんなに爽快な事だらう。眞に徒手空拳の戰ひだ。實力の角逐だ。さう思うてさへもう血が湧くのだ。我輩十六歳で鄕關を出てから、もはや人生の半ばに達した。今まで碌々爲さなかつたのも大器晩成を期して、强努容易に放たず、たゞ自重してゐたのみだ。自重もよろしい、けれども餘りに自重に過ぎて、目的のゴールの近づいたのも知らずにゐるのは迂鈍だ。人生のゴールは誰の前にも、さう遠くには離れてゐない筈だ。殊に我輩のトラックは、人生五十の長距離のそれよりか、已にスタートを懸念しなければならない短距離に縮められてゐる。競爭の相手として、風流佛の露伴がゐる。西鶴を脫胎した彼の警句には、人生の祕奧に觸れる解脫味がある。相手にとつて不足のない、堂々たる第一流の選手だ。どんな面相をしてるか、一度見てやりたい位だ。言文一致の美妙齋がゐる。突拍子もないことを考へ出したものだが、イヤ文章の書けない奴が逃げ場所を探しあてたやうなものだが、それにしても達意を主とする文章に對する一發見たるを誰が否み得よう。洒落や警句の案出に無駄

骨を折ることが、果して今後の文學の使命であらうか。惜むらくは彼はたゞ其一發見者に過ぎない。彼の書いてゐる物は、其發見を裏切つてゐる。が、一文體の創造者として、彼にも相當の尊敬は拂はるべきだ。三日月次郎吉の浪六がゐる。張扇を叩いてゐる高座づらをしてゐるが筆の冴えは紅葉眉山を凌駕してゐると言つてもいゝ。隅には置けない代物だ。が、彼の作はせい〳〵非筒女之助との二つで澤山だ。次郎吉でも女之助でも權兵衛でも八兵衛でも、彼に料理されゝば、どれも醬油のきゝ過ぎた煮ぶたしだ。少々田舍臭い、鍋尻に焦げついてゐる。けれども我輩の鹽梅が、彼とは別に、優に食膳に供し得るかどうか、少しは怪しい手つきもするだらうと思ふと、左様に手輕く大言壯語も出來ないか知れない。紅葉は自ら無二の大家を氣取つてゐる、マアあの男の身上と言つてもいゝだらう。金簔をひらなけりやア、文章は書けないなんて柄相當の警句を吐いてるのはまだ可愛い。が、彼は到底戯作者のハイカラたるに過ぎない。近松の情味もなければ、西鶴の觀察もない。繪入新聞の讀みつぎ小說家としての無二の大家たるには、我輩も牡丹大の版コを押してやる。それよりか何處か未來のあるのは眉山だ。神經質だが、物の見方が女のやうに細かく銳どさを持つてゐる。長編よりか短編に脈が通つてゐる。

小じんまりとした纒つた親しさがある。彼を戯作者仲間にしておくのは、彼の前途を誤まるものだ。オツト緑雨のをることを忘れてゐた。先づ我輩が無條件で享け容れるのは、緑雨位のものか。第一に彼の頭の透徹してゐるのがいゝ。世間の俗物に比べれば、變人の部類に屬するかも知れないが、自己の環境も、自己それ自身をも、正しく見透してゐる明快さは、打つとカン〳〵鳴るやうだ。一片の陰翳もない彼の心理狀態が羨ましい程だ。第二に彼の文章の齒切れのよさがいゝ。いゝ齒で青梅を嚙むやうだ。簡潔で力があつて、さうして澁晦ではないのだ。彼の毒舌といふものも、彼の心の美しさを背景にして、その澁面の奧底から滲み出る愛嬌が笑顏を見せてゐるのだ。灰汁がぬけてゐて、罪がないのだ。

かう數へて來ると、篁村、櫻痴、採菊なんて、戯作者の時代が一廻轉して、明治文學の樹立に、それ〴〵の作家が轡を並べてゐると言つていゝのだ。さうだ、明治文學の樹立なんだ。我我の時代の藝術なんだ。戯作的形式習慣からの脫出なんだ、時代精神の上に、文學の眞の意義ある創作を求める、それが我々の素志でもあり、又大きな責任でもあるのだ。書生氣質の逍遙も、其意味に於ては、慥かに先鞭をつけてゐる。ハルトマンの鷗外も、無下に學究として捨て

る事は出來ない。それらの人々と一騎打ちに角逐する勇氣を振ひ起すのは今だ。負けるとか勝つとかいふ效果の如何は固より問題では有り得ない。明治文學の樹立に一指を染める、イヤ彼等の驥尾に附して一太刀二太刀の功名を爭ふケチな弱々しい我々ではない筈だ。明治文學の使命を背負つて立つ抱負――敢て大きいとは言はない――を持たない我々でもなかつた筈だ。逍遙、鷗外は別として、露伴、紅葉を向ふに廻して相手に不足とは言へないかも知れない。たゞ硯友社の仲間でなけりやア、文學者でないやうな、獨占ぶりは少々癪の種だ。彼らが果してどこまで自覺し自任してゐるか、たゞ一時の流行に乘ずる甘い夢を見てはゐないか。森田思軒を中心にする原抱一庵にしろ、民友社を根據にする嵯峨の屋おむろにしろ、宮崎湖處子にしろ、硯友社とどこにどういふ距離があるといひ得るのだ。彼らが「都の花」や「新著百種」に立て籠つてゐる堅壘に迫つて、我々仲間の寄手の威力を示すのも滿更痛快でないとも言へない。「都の花」はどうせ女か子供に讀ませる雜誌だからいゝとしても、今まで出た「新著百種」の中で、讀むに足るものは一體どれとどれなのだ。第一編を飾つた紅葉の「色懺悔」に何の趣向があるのか、西鶴の一代男、五人女の搾り粕を、甘たるい文章に染め上げただけぢやないか。露伴の

「風流佛」正直に言つて、これだけが或る水準以上に出てゐる唯一の作なんだ。どいつもこいつも、色懺悔以下の陳々腐々で、もう三年も前に出た「書生氣質」程の新味も力もないのだ。多士濟々、文運旺盛だなんて、要するに三文文士が空名を走せた以外に、實質の進步も、內容の充實もないのだ。いくら謙遜して見たところで、我々の仲間が、彼ら三文文士以下で畏まつてをるべき場合でもあるまいぢやないか。謙遜はいゝが、卑屈はいけない。どうせ多少の冒險性を帶びなければ、其勇氣は、眞に其の人の力は發揮されないのだ。まして時機といふものは、棚から牡丹餅の落ちるやうな偶然を待つてゐては到底來るものではないのだ。牡丹餅の落ちる必然性は、我れ自ら作らなければならない。英雄時代を生むか、時代英雄を生むか、そこには英雄と時代の自他の區別の出來ない微妙な交錯運動が働いてゐるのだ。要するに結論は、腐爛した大學の空氣は、さう永く呼吸すべきではないといふ事になるのだ。——こゝまで考へて來て、何だか腋下に羽でも生えたやうな爽快さに打たれるのだつた。窓ごしに見える、風に吹かれてゐる靑桐の葉の、自由に活躍してゐる自然の生き〳〵しさが、煽動性を帶びてゐるとも見入るのだつた。

それに餘り大きな聲で話も出來ない一家の私事なんだが、財產といふ程でもない、親の遺產の僅かばかりの金も、我輩の爲めにもう殘り少くなつたのださうな。うか〳〵それまで使つてしまつては困る、と今まで何も言はなかつた母が、伯父に訴へたといふのだ。一方の叔父も、此頃は病氣して無暗に補助は出來ないと言つて居る。永い間外國にをつた獨身生活を、此際改宗するやうな話もある。イヤ我輩も、金で苦勞をする時機に立たせられたのだ。早晚さういふ時機の來ることは覺悟してゐないでもなかつた……それが目睫の間に迫つて來たのだ。我輩の學資の大部分は、舊藩主の奬學金、それを難有く頂戴してゐたのだが、濟まないことには、當然貰ふべきものを貰つてゐるやうな、責務を感じない權利のやうに思つてゐた。もう幾年になるか、永い間の習慣が、さういふ惰性を生んでゐたのだ。同じ學資なら、もつと勉學に足るだけ欲しいなど〻さへ、內々不平がましい思ひをしたこともあるのだ。併し、我輩もこ〻らで決心をするとなれば、それこそ當然辭退すべきであるよりか、學資を頂戴する理由の消滅を意味するのだ。今までの學資には離れる、國からとり寄せる金はない、賴みにしてゐる叔父にも寄りつけない……かうも一時に財難が襲來したものだ、と我ながら感心する外はない。さう言や

ア、今までの我輩は、病氣を好餌にして、少し贅澤だつたかも知れない。書生の分際として、なんて蔭口をきいた者もあるさうだが、同時代の誰れ彼れに比して、旅行もやり買喰ひも盛んだつた……と言やアいつかも非風や飄亭と鮓屋の若葉で、食ひくらをやつて、五圓何がしの鮓を平げたやうな、馬鹿なまねもしたつけ……贅澤と言つたつて、其外ぢやア本を買つた位のものだ。内に顧みて疚しいこともないが、そんならどう生きた金を使つたかと詰問されりやア、まア一言もない始末だ。これから一體どうするのだ、とは特に今の我輩に一番痛い質問だ。どうすると言つて……どうもしようはないのだ。財難襲來！　と叫んで見たつて、どこにも救濟の反響は起らないのだ。この机の抽斗に、天保錢と二厘錢が、一つ二つ三つあるが、今夜はこれでも湯錢に使はにやアならない窮乏さだ。こんなはした金といふので、いつ仕舞ひ込んだものか……この天保錢と二厘錢をどうぶつつけ合つたつて、銀貨にも金貨にもなりつこはない、それと丁度同じ我輩の財政狀態だ。我ながら悲慘なやうでもあり滑稽なやうでもある。……まアどうにかなるだらう、まさかこのまゝ餓死もすまい……誰れがそんな呑氣なことを腹の中で言つてゐる。どうにかなるだらう、も今まではどうにかなつて來たのだが、今はどうにもなら

ない、どうにかなるだらうの行きどまりなのだ。艱難汝を珠にす、も子供らしいが、我輩も平生人並みな口をきいてゐる手前、このまゝ泣寢入りに、愚圖々々で終りたくはない。鈍馬なら鈍馬なりに、田を鋤くなり荷車を牽くなり、それ相當の解決をつけよう。何もだしぬけにドンとぶつかつた問題でもあるまい。有り來つたことに引きづられてけふまで妥協して來たのさへが、生溫るい無考察なお坊ちやん式だつたのだ。口で言つてること、腹で考へることが、お互ひを裏切つてゐた自己欺瞞、見え坊の催眠錯覺、まアさう言つた醜態千萬なものだつた。出ろ！　出ろ！　其弱々しい人間的窠臼を、行き詰まつた其殼を……。

十一　月の都創作前後

二十四年の暮の冬期休暇になつて、子規は常磐舎を去つて、駒込の某家に間借りをした。寄宿舎のやうなガヤ〳〵する處では、所期の大事業を果すことは出來なかつたからだ。子規の大決心の內容を知つてゐる者は、行く先きを危みながらも、其の心理に同情せねばならなかつた。子規はいつもの試驗勉强とは別な、前途に光明を望んだ胸一杯な緊張味を持つて、大事業の前に跪坐した。

大事業とは、小說「月の都」に筆を染めることであつた。「月の都」は子規が世の中の舞臺へ乘り出さうとする處女作であつた。やがて大學を退學する前提の自己處理の積極的述作であつた。

この猛精進を風のたよりに聞いたゞけでも、私達は胸を躍らせたものだつた。子規の出現によつて、文壇に如何やうな渦を捲き起すであらうかをさへ豫見して痛快がるのだつた。

私は子規が小遣錢にも、郵稅にも困るといふやうな便りに接して、此際自分相應な子規奉仕をせなければならない氣になつて、生漉きの卷紙を自分でついだのを二三本送つたと記憶する。其卷紙を使つた手紙の略ぼ同日に書いたものが、現に三本も遺つてゐる。「月の都」創作當時の子規と私達の間の感激の交響が、其手紙によつて明かにされる。

其一（封筒に「千舟町河東秉五郎殿、東京駒込正岡常規、貴稿在中」裏に「一月十三日封、此封の方さきに御覽被下度候」とある。

拜啓愈御淸廸奉賀候、先便御送り被下候まり唄二編慥に落掌貴兄文章俄に御上達の程驚入候、又昔日の一葉桐の類に非ず、否先日會を開き候内にて尤錚々たるものに御座候、去る五日小生宅にて初會相催候、會する者竹村尊兄をはじめ、新海、五百木、藤野にて小生共五人なり、而して尊兄は宿題不出來。小生も實は其日になつて、皆の前で一枚半計り書て責を塞き候譯、話に相成不申候、其他にていへば、私見にては

藤野一。貴兄二（短き方）。新海四。貴兄五（長き方）

位のものか（草稿はいづれも當地廻し濟の上は御廻し可申候）序に申す、來る四月第二會の課題は「渡守」と相定り申候、右諸君へ御通報奉願候、又當地連中にて「落花紛々」と云ふ題にて、一回宛廻書を致し候（これも四月迄）御地にても右興行被下候はゞ難有奉存候（右宿題兩方共紙數に制限なし尤當地にては落花紛々の方は一人一回にて一枚以上五枚以下と定めたれども御地は如何樣にても宜し）

貴兄短編の方の小說御手並の程慥に相見え感服仕候、就中「若しや男ではあるまいか」と云ふ一句筆力勁拔奇想天外より來る者なり、其外總て宜し、小生實は貴兄と藤野との優劣は定め兼居候

貴兄已に御聞及びかも知り不申候得共、小生冬期休暇中仕事（小說見た樣なもの）に取かゝり居申候、其故一時は來客謝絕抔と出掛け大に氣をもみ候が、もう一回ですむといふ所まできりあげ申候（尤これは金に窮しての事なり）成功は無覺束、出版の程も全く不定故高濱兄位の外餘の人には餘り御話無之樣祈候、就而は右拙著中每回友人の發句を相加へ申候（これは少し深意あり）其中貴兄の散る木の葉の句一首相載度御斷申上候、高濱兄のも載せ度と存

候得共丁度適當のもの無之共故不果志候、銓尊兄のも同様・秋冬の句は諸君に句多し、故に困り不申候得共、春夏の二季には困り候（就中夏）季外れ故無理な注文なれども右二季の句御名作御漏し被下度奉願候

先日父上様より小生移轉に付御懇篤なる御忠告被下今にはじめず難有存候、又御教訓之條も固より御尤にて一點の非は無御座候得共、何分小生の身上に就て今日御忠告に従ひ兼候處有之候間今暫時御見のがし被下度、尤御厚情を無にする譯には無之候故不悪御思召被下度、今日は御返辭不差上候により乍憚御鶴聲奉願候

小生昨夜も仕事に賓が入り二時頃迄長起致候處、寒月皎々霜の如し、今朝起て見れば何ぞ圖らん白雪皎々、庭樹皆花を著く、餘りの嬉しさに小躍り致處、はや（十一時頃）太陽相照す様に相成候故雪解も早速と恨み申候、今朝三句を得たり凡々

一つ葉の手柄見せけり雪の朝

小娘にさしかけやらん雪の傘

雪の夜や蓑の人行く遠明り

御斧正奉願候

銓兄にも手紙不差上候間此手紙なりとも御見せ被下度候

又考へたら少々雪の句を得たり其中に

紅梅の可愛や雪の朝朗

初雪をふるへば蓑の雫哉

千鳥なく灘は百里の吹雪哉

とん〳〵と叩けば崩る門の雪

其餘略す

虚子にも御見せ被下御批評奉願候

銓兄の發句面白く覺候

一葉桐長々拜借失敬致候、幸便にまかせ御返申候

哥仙兩行これ亦無暗に評して御一笑に供へ候、當地連俳は一向にはづまず候

右思ひ出し〳〵書き認め候順序亂暴御宥免奉願候以上

一月十二日　　　　　　　　　　水花舍　子　規

碧梧樓兄

一時は來客謝絕の觸れ出して、創作にいそしんでゐたが、年とゝもに其峠を越したので、新居に小說會を開くやうな餘裕をも見たのであらう。この手紙でかほどまで推奬された「まり唄」の拙稿は、どんな趣向でどんな文體だつたのか、何の記憶もない。大方古白、飄亭、非風の先輩の作と一處に綴ぢ込まれて、我々仲間の廻覽に附されたのであらうが、今其の行方を知らない。「昔の一葉桐の類に非ず」の一葉桐は、私の前世紀の述作ともいふべき筆ずさみであつた。「貴稿在中」とあるのは、この一葉桐のことであらう。

こゝに「月の都」と明記してゐないから、或は題號は後につけたものかも知れぬ。「昨夜も仕事に實が入り」と今一回きりで終るところまで書きあげた元氣と安堵とが、初雪を見て小躍りする處にも躍然としてゐる。この手紙をうけとつた私達も遙かに其跳躍に共鳴して、激勵の辭を奉つたものだつた。

共二（封筒表、「松山河東碧梧様、東京正岡升、平信」同裏「此封あとにて御らん被下候方順序に御座候」とあり）

別封已に認め畢りたる後又玉書に接し候故又筆とり申候、高濱子草稿燒捨に就て云々の御議論有之候へども、小生固よりどちらが宜敷とも覺え不申候、乍併いづれ早いか遲いか鳥邊山の煙此身いつまでかながらふべき

小生著述に就而大といふ形容詞過分に存候、筆を取りそめてより殆んど二十日、今宵稍一遍通り畢へ申候（改删すべき處は猶無數なり）其間大息して筆を捨てし幾何ぞ、今迄の大言いづくより出たるぞ

一卷紙　二卷

難有拜受仕候、小生近來大困窮卷紙にさへ殆んど不自由し居る處、且つ此手紙の字を見て筆の禿したるにても察し玉へ、著述などゝ申候も實は窮餘の拙策、或人が近時の小說に銅臭ありとかいひけん天道是か非か、スコット倒產して大に天才を伸ばす天道非か是か

右の次第故此幸便に何か御とめ差上度存候得共、懷中風引致し方なし、さりとて何もなきは

無下に興なしと存じ志竹と申竹葉進呈仕候、これは小生庭前のものに御座候、きのふの初雪猶殘り居るやと被存候まゝ御送り申候

新年の御句乍失敬不足取、小生も十餘句相吐候得共、皆平凡慚愧々々。

我等まで神の御末ぞけふの春

といふ拙句を伊藤可南に相贈り候處、同人よりの返辭に

神殿のしめも動かずけふの春

と驚かされけり、むかし北枝が

元日や疊の上の米俵

と詠ぜし時、芭蕉稱して本年日本第一の元旦と申候、僕亦可南に於て然いはんとす

一月十三日夜十二時　　常規

秉　兄

(奥に、三十年餘別に蝕もせず、薄く青味を持つた、熊笹らしい竹の四五枚の葉の一枝が封じ込まれてゐる)

虛子の草稿燒棄問題と言へば、當時虛子は心から自得することのあつたものか、今までの草稿を全部燒いてしまふなどゝ言つたのを、まだ燒き捨てるだけの價値は我々の述作にはない、などゝ言つて、事を仰山にしたことがある。

「月の都」起稿の苦心はこの數行の文句の上に歴然としてゐる。時には氣乘りがして時の經つのも知らず、時には筆を投じて長大息した机邊の一弛一張見るが如くである。

志竹の一枝が、今尙ほ舊態依然として、封中に卷き込まれてゐたのは、そゞろに當時の雪をしなふた樣も偲ばれて懷しい極みである。

伊藤可南は、子規とは遠い緣者で、從弟ちがひ位にあたる。小兒可全と同年輩の友達で、常磐會にも同居してゐた。今其住所を知らない、恐らくは故人となつたのであらう。

其三（封筒表「河東銓君、同乘君、高濱淸君、正規拜」とあり）

今日六時頃竹村兄來臨に相成、暇なき月日拜見直ちに通讀且つ批評仕候、何分にも千里遠隔のこと故齒がいゝこと多く存候、多き割合には目ざす敵も少く候得共、就中よしと思ひ候は

鬼灯に書談む人はなかりけり　　雪燈

枯枝のすつくと高し百舌の聲　　可全

面白う聞けば蜩夕日かな　　青桐

名月に蜘の巣ふるき軒端哉　　虚子

（ふるきに棒を引いて「これは小生の改作したるものなり」と朱書）

等に御座候、然るに之れ多くは諸君の賞賛に與らぬ者なり、此外にも小生の目をとめ候者あれども、大方は諸君の點と相違致居候、此前の岸の細波にても、小生の發見致候、鶯や谷間〳〵の句の如きも一點もこれなかりしもの也、而して此度の雪燈青桐兩兄の句の如きも亦一點もつけたる人なし噫、小生明朝八時より學校のあるもかまはず、此深刻に此手紙相認候微意御諒察被下度候はゞ大慶に存候也

一月十三日夜（實は十四日）一時四十分頃認　　規　拜

可全兄、青桐兄、虚子兄

小生戯れに詩箋へ三句相認め候に付三君御寄合之節坐間の一興に御批評被下度候、各御氣に

入り候者を一枚宛御取被下度候、若し又二君又は三君の意見合同して同じものをよしとなされ候節、御一報被下度、其時は又痩腕を振ふて更に御笑に供ふべくと存候

前に書き落したる事ある故に記す

暇なき月日の中に小生の草稿も御閑込被下御批評被下候事難有存候、然るに小生の月下言志の二句を大變に御ほめ被下候事意外の又意外にて何とも心得不申候、かの草稿固より碌々たるものなりと雖、月下言志の句よりましたるものなからんや、畢竟諸君のあれを劇賞被下候も、俳諧の理に落ちたる故と歎息するの外なし、再び嗚呼

（今一つの別紙に）

最一つ變な事書き忘れ候故又申上候（畢竟は郵税いらぬ故）小生砧の句に三國讀込として

秋　風　や　窓　の　戸　動　く　さ　よ　砧

とありしを誰かの評に安藝、能登、羽後三國としてありたれども、小生羽後には氣のつかざりしにて、安藝、大和、能登の三國のつもりにて候ひき、されば偶然にも此句は四國讀込みと相成申候、若し「里砧」といふこと有之候はゞ、五國にも相成可申候呵々

銓、乘、清君（この君の字は三字を一字に奇な字を書いてゐる）　　　規　拜

岸の細波、暇なき月日の細評總評にも飽かず、更らに共の不平を漏らすやうな口吻で、後進を誘掖しようとする涙ぐましい師貢友情が紙面に溢れてゐる。別紙の五國讀込みの砧の句についての自慢などは、前半の手紙が餘りに眞率で嚴格で、且つ感傷的でもある一種の緩和氣分からの附け足してある。叱りつけた澁面の底から、ニツコリと笑つて見せる擒縱自在な手段である。

「畢竟は郵稅いらぬ故」とあるのは、此の時分東京と松山を往復する人のある毎に、手荷物やうのものは言ふまでもなく、手紙類も大方依托したものだつた、その習慣を言ふのである。郵稅の儉約よりか、個人の往來の方が、郵便よりも早かつた。まだ郵便制度の幼稚な時代の反映でもあつた。

以上は一月十二三日の書信であるが、引續き一月三十日の書翰にも同じやうな「月の都」に關聯する感想が書いてある。

（封筒裏、東京本郷駒込追分町三十番地　正岡常規發）

明治廿五年一月廿三日御發御書狀落掌拜讀致候

○僕も著作未だ成らず、これに付て色々の御忠告御慰諭難有拜讀致候、出版の上は人にも勸めて買はしめんとの御好意誠に難有は候へども、僕の出版せぬかも知れぬといふ意味は、世の中に適合するとかせぬとかいふ事には無之候。竹村尊兄は頻りに拙著の成就を促し給へども、僕は常に其意に從はず、竹尊兄曰く左樣に骨を折りても世の中に之を見てくれる人はなかるべしと、僕答へて曰く拙著は世人をあてにする者に非ず、世上の評論はどのやうにあらふとも終に愚著に關係なし、只僕は我意の滿足する所に止まるのみ。（固より全く滿足することは出來ぬことなれども）。と友人皆曰く左樣にひねくりては樂屋落ちなりと、僕曰く樂屋落ちにて結構也云々、蓋し僕の出版せぬかも知れぬといふは、第一出版してやらふといふ人なければそれまで也、第二原稿の買ひ手ありとも餘り安價なれば賣らぬ積り也。何故に賣らぬや、名譽に關する故なり、何故に名譽を重んずるや。僕答ふる所をしらず。

○長起きは僕の持病にして、常に肺病腦病と競爭しつゝあるもの也。何も著述の爲といふ譯

にては無之候
○先便戯れに御評論を煩はし候三句當地友人に見せ候へば、初雪一、茶の花二、紅梅三といふは新海、五百木兩氏の說にして、茶の花一、初雪二、紅梅三、とは竹村兄の說なり。
○雪の御句澤山御示し被下候へども、貴兄平生の技倆を盡す者一首もなきは殘念なり。
○此頃は御地雅會は無之候哉、當月課題抔も承らぬ様に覺え候が僕の忘れたるか。
○本日竹村、新海、五百木氏拙宅へ來られ「せり吟」といふことを興行致し候、それは一人題を出して成る可く迅速に發句を作ること也。竹村兄に題を出してもらふて跡の三人にてやつて見たが、實に時間をあせる許りにて中々面白き者は少し。其の時間は早きは十秒、遲きも一分を出でず。先出來し者が大聲に後者を詰れば、一寸後れたる者はまごついて飛んでもないことを書く抔、一入の興にて候ひき。別紙に近來當地の俳風及びせり吟を少々御目にかけ申候以上

西子々規禿筆認

一月三十日

碧梧桐兄俳書下

競吟以下十八句は皆少しもあとより手を入れぬ者也

半分に富士のうつるや春氷　　非風（新海）

冬一分片へに殘る薄氷　　飄亭（五百木）

さざ波をおさへる春の氷哉　　西子

年の夜　年の夜や霰にまじる豆の音　　飄亭

他二句略

萬歳　萬歳の鼓に開く梅の花　　西子

他二句略

若和布　さゞ波のなりにちぢまる和布哉　　同

齒ぎれよくくはれてしまふわかめ哉　　飄亭

他一句略

木の芽　柊の今はやさしき木の芽かな　　非風

他二句略

鶯

鶯のわらじにとまる野茶屋哉　同

他二句略

左の句は一題十句宛競吟拔萃

雲雀

下りるのでなくて落ちたる雲雀哉　非風

下りた後雲に聲ある雲雀かな　同

青空に落ちるものあり揚雲雀　同

他七句略

一つ家の留守靜かなり揚雲雀　飄亭

さらさらとひばり追出す麥田哉　同

遠乘の馬かすみけり揚雲雀　同

他七句略

年よりの杖にすがるや揚ひばり　西子

峠まできても眞上や揚ひばり　同

飛びにくうないか眞上の揚雲雀　同

─他七句略

左の句は皆當地俳人近作に御座候諸君の御評判奉願候

住吉は松の名どころ春霞　瓢亭

白雪や流しにふせし鍋の尻　同

白雪に南天の實の重さ哉　同

狂ひ來てゐろりに消ゆる吹雪哉　同

いて見れば草の下也春の水　同

若草やすてゝ行く旅の夢いくつ　同

玉川の眞中をぬく小鮎哉　非風

口あけて春の日眠る田螺哉　同

花のちる音すさまじき夕哉　同

月が瀨を鶯渡る筏哉　同

山吹の中をせりせり田舟哉　同

飴賣りの峠をこゆる櫻哉　同

第一は雪なり第二炬燵なり　西子

古壁に草靑みけり春の雨　同

兎角して霞になりぬ春の雨　同

横笛（ワウテキ）冴けりな寒梅開く二三輪　同

戀猫や物干竿の丸木橋　同

蝶々や順禮の子のおくれ勝　同

「月の都」をどう處理すべきかの惱みを祕めて、不相變句作に沒頭してゐる。「競り吟」といふものが何時頃始まつたかは、これて判明する。非風、飄亭の下に、割註をして本姓を記してゐるのは、私への紹介を意味してゐる。次ぎに矢つぎ早やに二月十九日の封入手紙が二通ある。

其　一

拝啓御約束之手紙、藤野便に來り候やと待兼候處、荷物未着故模様分らず候へども、幸便に任せ一筆啓上仕候、當地三日程は非常の寒氣にて、嘸々梅も肝を潰せし事と存候處、今朝起きて見れば又々意外の大雪、弊家庭前の眺望だに中々大したことに御座候

○いつか申上候拙句

我等まで神の御末ぞけさの春

といふ句は古人の句に

これてこそ神の御末ぞけさの春

といふ句ありしを發見致し候故取消申候、これでは暗合ではなく、小生のおぼろに記憶致居しものなるべし

○小生先日中より十二ケ月といふことを發明し、それ故毎々十二句宛吐出し申候、別紙に男女句合のみ記載致置候間、御高覧之上御斧正可被下候（銓兄高濱子へも一つづゝ送り置たり）

別紙短尺例の戯れに認めたるもの又々御高評願候

拙著やうやう完成したり、これからの運命は未定に候

小生これから後は試驗が續々と來り候故、存外忙敷もならんと心配致居候
先日藤野叔（恐らくは叔の下に父を脫す）に聞き候へば不相變謠曲御勉强之由、殊に叔の話では將來に望多き由申候大賀々々、小生も去來（年か）か之春頃より以來は謠非常にすきになり、先夜も小川太夫を拙家に聘して鵜飼、車僧、俊寬を聽聞致候、當地有志家は小川の外に天岸一人のみ然れども、稽古する事ができぬに困居り申候
拙著小說は月の都と題して紙數（寫本）六十枚十二回の短篇也、而して末二回は大方謠曲にてつゞまり居り候、これら第一世人には氣に入らざるべしと存居候也

二月十九日　子　規

碧梧桐伯几下

男女句合之中「砧より品しむつかしき」の句はどうも古人にありし樣覺え候、若し見あたりしならば改作可仕候

其　二

別封弊屋にて認め蔴布へ來り候處、藤野の便の御手紙始めて拜見御返事申上候

拙著之事は別封にありそれはよけれど、拙著に付さう度々御すゝめ被下候ては、小生實に辟易して只貴兄と高濱兄とをのみ恐れ居候、天下萬人の毀譽は一向に頓著無し、只御兩人のみをひたすらに恐れ候、小生の意少し御憫察被下候上、拙著を決して善きものと御想像無之様奉願候、右は高濱兄へも御忘れなく御傳へ被下度候、何故に拙著の貴兄御氣に入らぬと知り申候や。それは近來の發句にて相判じ申候、小生近頃の傑作と自ら考へ候者をさし上候ても まるでいかん〳〵といつも御叱責を蒙り候故、小說とても其如くならんと存候、況んや小生とても自ら面白しと思はざるに於てをや

○今度の短冊は猶更御叱りを蒙らんと存居候、どうか思ひきり御叱り被下度候
大洒落はしやれずといふ御しやれ團洲的大澁大澁
凉菟の「いざ櫻」の句は面白し拙句の比にあらず（小生も同句早稻田文學にて見しが始めて也）然れどもさまでの名句には無之と存候
○梅さくや去年の娘の御句面白し
○一日を一夜にして早梅の御句いと面白し

○五月雨やある夜ひそかにとは蓼太の句也
○聞きやるや、○の二句御褒めに預り汗顔
小生自らは何とも思ひ候はず
○鉢叩といふもの御存知に候や、これは今はなきものなるべけれども、むかし京都邊にて冬期瓢簞を叩きて毎夜〳〵念佛を（空也念佛といひしかと覺ゆ）となへながらあるくもの也、其の哀れきかんとてばせをが落柿舍を訪ひしことも有之候

その古き瓢簞見せよ鉢叩

とは去來の秀逸に御座候
○霜やけの拙句はあとにて本を見れば、古人に類例多し、廢案すべし
○先日三人の句を連ね候内にては、非風の句一番よく、小生の尤惡し、それは貴兄の御鑑定も同じ樣也、小生の句にてわかめを御擇び被下候へとも、小生は萬才をとり候（虛子は小生と意見同じ）
序にいふ松山三傑の內にて句作は貴兄一番うまし（恐らくは）併し甲乙の意見に付ては、虛

子と僕との意見常にあひ候はいかに

「鶯やわらじ」の御句面白し、其他多くは檀林調あるは如何、瓢亭の句中「すてゝ行く」は「すてゆく」としては面白からぬ様覺え候、非風瓢亭僕連書の分御撰び被成候句は略々小生も意見相同じ、例の巡禮との御評恐れ入候、拙句古壁の句はよくはあらねど、左程御叱りを蒙る句とも思はざりしに、御句中、追つくや、梅が香や餅、其他少々面白き句は多し

帆柱に帆のもたれけり春の海　　蓼太

「春風や沖の白帆」の貴句と相似たり

二月十九日夕　麻布にて煩雜中認　　子規

青きりさま　まいる

此二通の手紙は障子紙の大きさで、生漉きの伊豫產紙である。始めて小說の題名を「月の都」であると告げ、十二回六十枚の短篇であるとも記してゐる。さうして、其の二の方に「天下萬人の毀譽は一向に頓着なし」と虛子と私を問題にしてゐるやうなことを言つてゐる。蓋し「月の都」の出來榮えについての自己批判、其苦惱を訴へる片鱗の現はれとも見るべきであらう。

次いで「まるでいかん〳〵と御叱責を蒙り」など發句關係に就いて如何にも私達を對等に見てゐるやうな文句を使つてゐる。顧ふに一昨二十三年の春頃から、始めて十七字に指を染めた乳臭のたど〳〵しさが、約一年の間に多少順序立つて來た、進歩とか向上とか形容さるべき私達の變化と推移が、恐らくそれまで唯我獨尊的に自己を信頼してゐた子規を驚かしたものであらう。且つ眼光紙背に徹する底の子規の洞察力は、早くこの二青年の前途を嘱目したものであらう。さうして對社會關係に思ひを走せた時、文壇に一旗幟を立てる自己のサークルとして多くの信頼をかけたものであらう。要するに私達は子規の子飼ひの弟子であつた。血を分けた骨肉と言つた、氏族觀念の概念化した繫がりではなかつた。お互ひに許し合つた同性愛の藝術化でもあつた。子規の歿後年と共に平凡化して行く、今の碌々たる自分を顧みて、當時子規を驚かした時代が、自分の一生の中、最も華やかで純粹で無邪氣で無我な美しさに充ちてゐたとしか思はれない。

非風、飄亭、子規の三人で始めて「競り吟」といふことをやつた。題を出して、早く出來た者から一枚の紙に順次に書きつけて行く、言はゞ拙速を尊ぶ句作鍛錬である。又た罪のない一

種の座興でもある。この競吟は其後しばらく我等仲間に流行して、翌二十六年頃「運座」といふことを知るまでつゞいてゐた。「先日三人の句を連ね候内にて」とあるのは其の競吟の報告であつたと思ふ。——競吟の事については、尚ほ後に記す。

兎も角この手紙は、私からの手紙についての返書であるが、返書に次ぐ返書で、殆んど際限を知らなかつたらしい。郵便の配達時間、又は依托した人の往來の日數、その間だけ、手紙への筆を採らなかつたものとも想像される。子規も半ばは、其の煩累に堪へなかつたことであらう。

十二　痛切な體驗

小生表記の番地へ轉寓、處は名高き鶯横町

　鶯のとなりに細きいほりかな

實の處汽車の往復喧敷（レールより一町許）爲頭痛をまし候

　鶯の遠のいてなく汽車の音

剩へ家婦の待遇餘りよからず罪なくして配所の月の感あり（高濱氏へも御報奉願候）

これは一葉のハガキの文面である。消印に「武藏東京駒込、二十五年三月一日チ便」とある。名宛は松山の可全と私の連名で、東京下谷區上根岸町八十八番地正岡常規、とある。これと前後して同日出の封書がある。改良半紙に細書してある。

先刻相出し候端書大方御らん被下候事と奉存候、小生昨日移轉の際腦痛烈しく起り候處、今朝に至てもやまず、手紙數通認め畢て蟬丸の謠曲一番を無聲にて大喝致候處、稍平癒之氣味あり（尤今日は學校は休み）午餐後手紙出し旁新寓（一町行けば谷中の墓地也）を出て幸田露伴を谷中に訪ふ、閑談三時間餘、胸襟洒落光風霽月の天を現はし腦痛全く癒ゆ。歸れば則竹村兄のおとなひ給ふあり、延て茶室に入り燒芋を喰ふ、兄歸られて後此手紙を認む時に復腦巓昇々たるを覺ゆ

小生露伴を訪ふ事已に二度なり、數日前拙著月の都を袖にして同氏を訪ふ、生曰く僕拙著一卷あり、友人皆出版を勸む僕之に應ぜんと欲す、而して拙著中の趣向君の著述中より偸み來る者多し故に一應君の承諾を經且批評を乞ふ云々、露伴云々の挨拶あり談話二十分餘、傍に客あるを以て談佳與に入らずして歸る、翌日約あり同家を訪ふ在らず、其翌日露伴使を以て拙著を返し來る、且つ一書を添へて多少の評あり、然れども盡さず、生乃ち今日之を訪ふ所以なり、相逢ふて談じ去り談じ來り快窮まつて躍らんと欲す。事半ば小說上なり。………貴兄等之を讀んで何とか想像し給ふ。彼一句吾一句相笑ひ相怒り負けず劣らず口角の沫を鬪

はせしものとや思ひ給ふらん。其實談じ去り談じ來るものは終始彼也、默々又唯々たる者は終始我也。（評曰回也愚）生は多少小說家の骨を得たり（肉は未だし）きと思ふなり、是れ生が曾て聞かんと欲せし處、而して今に於て頓に悟る所あり、是れ生がいつか貴兄等に話せんと欲する所而して筆紙之を盡さず、山河之を阻斷す（今年夏も歸省せんと欲すれども生とInitial を同ふすM君の爲に志を果すを得ざるべし）生十五六歲の時鄉に在り大言して曰く、枳棘は鸞鳳の栖む處に非ず海南は英雄の止まる處に非ずと、而して東京に來て後前言の是なるを知る、然れども今の海南は昔日の海南に非ず、今日の時勢は昔の時勢に非ず貴兄等をおだてるには非ず……近者露伴子と俳諧を鬪はすの約あり、俳況は後便に報ずべし、尤同子も俳諧は左程の黑人に非ず

露伴閑栖　鶯の奥に家あり梅の花

壬辰三月一日夜九時根岸寓居にて　　西子認

虛子兄、靑桐兄

拙著はまづ。世に出る事。なかるべし（以上の一行覺えず俳句の調をなす呵々）

之が子規が根岸に偶居を求めた最初であつた。「昨日移轉」とあるから、明治二十五年二月二十八日、上根岸八十八番地に一戸を借りたのであつた。其の永眠の地である同八十二番地に移轉したのは、其後同年十二月一日新聞「日本」に入社して俸給を得るやうになつてからだつた。「鶯横町」は八十二番地の家が其の中央に位置してゐたのであるから、後の移轉はほんの隣家に移るやうなものだつた。罪なくして配所の月を見るやうな虐遇をうけたとは言へ、さすがに根岸といふ土地に執着を感ずる何物かのあつた事を否み難い。

「脳痛」とあるのは、恐らく主として「月の都」創作の過度の疲勞に原因するのであらう。初期の神經衰弱とも見るべきである。「今日は學校休み」とあるので、此の時まで尙ほ逡巡として退校を決しかねてゐた人知れぬ苦悶を察すべきである。學生としての搖籃から、一歩を世の中へ踏み出さうとしてゐる、子規の人間的一廻轉の時機に於て、聰明な叡智を持つてゐたゞけ、其の體驗は深刻でもあり又たデリケートでもあつたであらう。言葉を强めて言へば、其の痛切な體驗が、其後の子規を大成する基調でもあつたのだ。

露伴訪問も、やがて其の體驗の現著な一つであつた。「小說家の骨を得たり」とは直覺的な

言ひ方ではあるが、對者の一言一語を咀嚼して我が心の糧とする自得の境地は、暗默の間に人を首肯せしめる。蓋し露伴がどのやうな話をしようとも、子規にとつては――人生の行路を新たにしようと多少の焦燥を感じてゐるものにとつては――それは興味のある事實であるよりかかねての希求を現前する新たな世界であつた。私達が子規に褒められて小躍りしたのとは全く別な、子規の「快極つて（窮の字は恐らく誤用）躍らんと欲す」は、對自己關係にも、對社會關係にも、複雜な苦味、辛味、鹹味にも味到した痛切な叫びであつた。

對露伴の會話が、自ら「回也愚」と評してゐるやうであつたのは、子規の想像した通り、私達にも寧ろ奇異な驚きを唆つた。意外な二人對座の光景が眼前に展開した。露伴の書いた「のつそり重兵衞」が建てたといふ五重の塔が、九輪もあざやかに描き出された。野分に搖らぐギー〳〵いふ音も耳の底に鳴つた。私達は眞にあり來つた舞臺の定則を超越した芝居の奇構を見せられるのだつた。一時は呆氣にとられて、其の意味が那邊にあるのかも摑み得なかつたのだつた。

私達の空想をいろ〳〵に唆つたこの二人對座の光景は、私達の間に一層痛切な露伴熱を高め

る因由ともなつた。

「拙著は先づ世に出ることなかるべし」を句の體をなしてゐるなど興がつた餘裕を見せてゐるけれども、其の奥底には絕望的な悲哀の潜むのを看過することは出來ない。言ふまでもなく幾分の自信を持つてゐた創作なのであるから、若し露伴が推稱の勞を惜まなかつたとすれば、子規は之を出版して世に問ふ勇氣を沮喪する所以はなかつたのだ。露伴訪問の結果、其の期待を拋擲せねばならなくなつた、其の當座の哀情は恐らく毒を飮むやうでもあつたであらう。さも事もなげに、手紙の末尾に出版斷念をほのめかしてゐるのは、正直に言へば、子規の負け惜しみであつた。煮えくりかへるやうな腹の中の懊惱を、强て自制した冷やかな言葉であつた。併しながら、輕卒な一時の欲望に驅られて、窮極の自己の價値を暴露すまいとする聰明な判斷にも立脚してゐた。子規の他に對してよりも、自己に對して辛辣な批難攻擊を辭せない、客觀的裁斷の力强さをも物語つてゐるのであつた。子規が悧巧であるよりも、對自己關係に嚴肅である操守の爲めであつた。

「月の都」は其後約二年間篋底深く藏されてゐた。若し新聞「小日本」が「日本」から派生

しなかつたならば、恐らく世に出る機會はなかつたかも知れぬ。「小日本」に發表せられるまでの間に之を一見したものは、私達親しい仲間の者にも恐らくは無つたであらう。

十三　渡し守

小說會の課題「まり唄」で思ひがけない賛辭を浴びせられた私は、四月の課題「渡し守」で、更により以上の成功を收めようと獨り心にほくそ笑んでゐた。實際「まり唄」位のものが、子規を驚かさうとは豫期してゐなかつたのである。子規は「月の都」で氣を吐かうとしてゐる、私も「渡し守」で對抗的に氣を吐かう、そんな相對關係も、私の客氣を唆つて、一向に氣を昂ぶらしてゐた。私は三月から四月にかけて、夜更まで專心「渡し守」の構想と修辭に沒頭した。我ながら警句名文句が頻出して、全編錦として鳴るやうに思つた。何でも判紙十枚餘りの長篇大作を淸書してしまつた時には、子規の驚歎する、あの瞬つた瞳の光りが目の前に閃めくのをさへ見た。之を子規に送る時には、始めて自信のある作を得た、と大びらな自己推薦をさへ憚らなかつた。この「渡し守」を受取つた最初の手紙は五月四日附である。少し長いが、全文は左の通り。

青桐文契、先日一寸麻布まで行候へども池内君御留守にて御手紙受取不申、本日歌原大叔父態〳〵持ち來りくれはじめて拜見仕候○片端より御返事申上べく候○拙句御改刪難有候「行く筏戻る筏や花の中」とはいかにも面白く候へどもこれにては筏が陸上を走る心地致候のみ心足らず候、御再考被成候はゞ、秀句とも相成可申かと愚考致候○「扨花は四國になりて六十里」とは面白き句法なれども解し難し

扨 さ く ら 四 國 ま は れ ば 六 十 里

となされ候はば面白く相成可申と存候○三位一體に付ての御評論は貴兄のより虛子の方一段高しと存候○愚書の短きを御責めに相成叩頭奉謝候、それに付て露伴云々の邪推少しもあたらず。僕露伴をとはざること一月餘に相成候故餘り冷熱の變甚しと存、一昨夜一寸相尋ねて貴兄及虛子の俳句抔聞きたる位也、實を申せば第一に郵便代を惜みし也、第二に近來腦痛に惱まされて何となく精神昏亂の模樣あれば也、而して詮じつめれば此二原因は更に一大原因に歸する也、貴兄こゝに至つて失笑すべし、何故に區々たる○○に屈托するやと疑ふべし、僕も亦た思ひながら猶腦痛を引起し來る、僕乃ち曰くこれ遺傳なり僕の小叔を見よ、僕の從弟

(古白)を見よ、右の結果として僕の心非常に卑屈に陷りたり、然れども此味を解する者は僕と性質を同ふする者に限るべし、貴兄の磊落快豁或は之を一笑に附すべし、若し之を聞て一顰する者あらば、則ち虚子なり、虚子若し之を一笑に附すれば則ち幸なりと雖其實彼れ未だ此位置に進まざる故なるべし

○馬の鈴山めぐり行く櫻哉、酒の香の花にむせたる夕哉の二句まづ面白しと拜見致候

○僕哲學を解せず、又貴兄が所謂理想なる語を十分に解せず、故に明答を呈するを得ずといへども、大體に於てはさしたる異論も無之候（?）併し最後に其論を演繹して、佛教信者をそしるに至ては僕之を解する能はず、然れ共箇樣の問題は到底不可知的にして一歩を推せば則ち懷疑に陷るべし、貴兄の理想論も其土臺を推せば貴兄何と答へらるゝや「僕は僕の理想によりて理想論を立てたり」といふ答は貴兄より外の人を滿足せしむるに足らざるべし

○寫眞理想の區別は判然たる區域あるにあらず、哲學上に於て唯心と唯物と其極致を同くするが如し○俳諧の虚實論甚だ面白し、僕も爲に一眼を開き候、併しこれを以て芭蕉輩の理論に應用するは彼等を OVERRATE する者なることは勿論也○笑ひすます一座〳〵の櫻哉、

これを以て這回の秀逸と相定め申候〇貴著渡し守其外文章世界一冊慥に落掌拜謝候、いづれゆつくり讀んで意見申上ぐべく候、渡し守ははじめの半枚相よみ候が、どうも其文章だけの處では貴兄のいはるゝだけの價値なきが如しと直樣に判斷するは大早計なるべし、いづれ後便之事〇されかうべの御句は露伴も驚き居候ひしが小生も驚き申候これを以て悟りたりと被仰候は如何やと存候得共、此階梯も一度はふむべきの順序也、今一段と進み給はゞ大月皎々萬象透徹せん

五月四日夜　　　　時を得たるほとゝきす拜

碧梧桐さま

よく見れば晝の月あり凧

山吹やをり〳〵はねる水の月

ちる花と胡蝶とつひに別れけり

大名の獨活刈たしとの給ひぬ

陽炎や三千軒の家のあと（神田大火）

櫻より奥に桃さく上野哉
はいつてはくゞつては出ては花の雲
小娘ののぞきこんだる牡丹哉
骸骨となつて木蔭の花見哉　（先日夢中に得たる句）

此句貴句と暗合せり、余夢裡にて名句を得たりと思ひさめて見たればこんな句にて驚きたり、貴兄の句夢に非ざるも亦さむるの時なからんや呵々

三位一體論と言ひ、寫眞理想論と言ひ、俳諧虚實論と言ひ、無論當時一讀した哲學書や俳書の粗雜な翻譯程度のもので、論理も不透明な、結論もドグマに陷つたものであつたであらう。たゞ未來の大文學者を夢みてゐたゞけに、自我のエゴイズムに頓着なく、自ら據て立つ處の論理的地歩を築かうとする勇氣をのみ買ふべきであらう。子規も其のエゴイズムに對しては、少々あしらひかねた、迷惑がつた樣子がありありと見える。

「○○に屈托する」といふのは、恐らく金錢の事であらうが、併し「これ遺傳なり」として

小叔（加藤恆忠、前白耳義公使、前貴族院議員、亡）や古白を例に引くのを見ると、單純な金錢問題ではないらしくもある。虚子を引合ひに出して、這間の消息を解すべしと言ひ、私はたゞ一笑に附すべし、と斷定してゐるのは、益々事體を迷路に誘ふやうである。それは兎に角、子規の私を見ること如斯であつたとすると、私の早熟的な、さうして前後左右を顧慮しない一本調子も隨分思ひきつたものであつたらしく想像される。

この手紙によつて、一面識もなかつた幸田露伴に、手紙や句を送つたりした田舍青年の不作法さを想ひ起すのである。されかうべの句とは、後に揭出する手紙で判明するが、それによつて我が悟入を云々するに至つては稚氣滿幅である。子規の訪問によつて、露伴崇拜熱を高めた無邪氣な感情の發露でもあるが、同時に私自身相當に慢心の鼻を高めてゐた青年に有り勝な自尊心の結果でもあつた。

「渡し守」に就いての第一印象が少々私の意表に出てゐる。外の俳論や句評はいつもの事であるから、私はこの二三行の「渡し守」評を幾度も繰返して讀んだ。全篇を讀了してから、と言つた自尊心の反抗を支持しながら、何だか暴風の襲來するやうな不安を感じてゐた。果して

息をつぐ間もなく暴風は襲來した。

昨夜相出候愚翰御覽被下候や、押かけて今又一書を呈し候は、貴著渡し守をよんで默々に附し能はざるもの有之故に御座候、實は貴兄自身の御推擧も有之候事故小生も待ち設くる處あり、かつ鞠唄の御手並もあればと竊に覺悟せし故なるべし、只今貴著をよんで大に失望せし小生の心の中御察し被下度候、まづ全體の趣向に就ていふに、鬼の如く又人の如く讀者之を讀んで不思議といふ事より外に何等の感じをも起さず、悲しくも勇ましくも嬉しくも面白くも思はざる也、よしそれは讀者の眼の低き故とすべし、全體の文章は如何といふに、葉末集と井筒女之助とを一處にして、其短處ばかりを取りしといふが如きもの也、又一段一文一句に就ていふに趣向と言ひ文章といひ、瑕疵百出ほとんど指摘するに堪へざるなり、余は貴稿十枚中面白き句「三句」を見出したり、此三句の外は多くは瑕疵の變種のみ、故に之を指摘せんと欲するも書中の盡す所に非ず、余覺えず長大息するもの三度、貴翰に曰くことによれば清書して露伴にも見せよと、僕今貴著を讀んで而して後、貴兄の未だ露伴に見せざりしを

喜ぶ也、何ぞや、僕よりいへば露件は他人也貴兄は骨肉の如き感あり、我骨肉が他人の前に愧をさらすは誰も喜ぶものあるまじ。噫危哉

僕會て貴著一葉桐を讀む、これ貴兄が二三年前の作也故に其拙劣なるを怪まず、今や貴兄亦昔日の阿蒙に非る也、僕刮目して待つ事亦尋常少年を待つよりも甚だし、而して今貴著渡守を讀む、讀み畢つて其價値を考ふるに一葉桐に勝る事たゞに一歩なるのみ、貴兄は之を以て天下に誇るに足るとなすか、後世に傳ふべきものと思惟するか、噫危哉

貴兄と同年輩の他人が此の如き小説を綴りしかといはゞ余は之を怪まざるべし、否或は之を劇賞する事もあるべし、然れども僕の信任する貴兄其人に於て此著述を見る、僕豈驚かざるを得んや、僕豈失望せざるを得んや、貴兄は文學を目的とするの一人にあらずや、能くも露伴に見せ給はざりき、僕は之を同國の親友郎小説會の會員に見せる事さへも躊躇する也、何となれば僕は前回に於て貴著鞠歌を賞譽して大に望あるの少年なり、此次の小説如何に進歩すべけんなどゝ言ひちらせし也、而して此回の貴著は故らに愚說を反證するの證據物件を設けたるものゝ如し、僕豈人に對して愧ぢざらんや而して貴兄は文學を目的とするの一人にあ

ちずや、貴著渡守は書流しの草稿かそれならばよし、若し一應の添削をへて而して後に此文をなせしものならば僕は長大息せざるを得ざるものなり、何となれば貴兄は文學を目的とするの一人なれば也、併し僕は保證すべし、これ學課の閑を偷みて作りし咄嗟の產物なる事を僕は一時の感情に堪ず放言罵詈到らざるなし、貴兄山海の量を以て請ふ恕する所あれ、僕は生意氣にも先生顏して貴兄を叱りたるに非ず、僕は兄が弟を責むるの情を以て貴兄を勵ましたるのみ、貴兄腹を立て給ひそ併し最後に一言することあり、貴著は亂作粗暴支離滅裂なり、然ども其支離滅裂の中に一點の光彩燦然として掩ふべからざるものあり、この支離滅裂を來せしこそ貴兄の感情觀念を見るに足る者なれ、貴兄既に此極度に達す、たのもし〳〵、刮目して次回の著作を待たん、（此次の課題は「手習草紙」なり、合作の方は「富士詣」なり）

子規拜

靑桐賢兄

御一讀之上火上

（この手紙も例によつて改良判紙三枚に細字で認めてある、日附は落ちてゐるが、前便五月

九日の手紙に次ぐものである）

かほど迄猛烈な痛棒を食はうとは豫期しなかつた私は、一時失神したやうな戰慄を感じた。得意の絕頂から失意の奈落に蹴落された絕望の息を吐いた。猛烈な痛棒ではあるが、之を書いた子規も、同じやうな戰慄と絕望を感じて、痛切な涙を胸に懷いてゐた、一字一涙的の友情の籠つてゐることを感謝したのは、私の戰慄と絕望が幾分の落着きを見出した後のことだつた。

「渡守」の一篇がどんな文藝價値を持つてゐるものだつたか、其の原稿を失なつたので判定のしようがない。固より私の二十歲の春のアマチュアな作であるから、其の程度は略ぼ想像に難くはない。殊に自己推薦をやるやうな場合は、多く或る調子づいた自己の缺點の暴露に了るものであるから、むしろ一笑に附し去るべきものであつたかも知れぬ。子規が其の全力と言つてもいゝ滿腔の熱情を籠めてそれに對したのは、却つて子規といふ人の眞摯な率直な、言ひたい事の包み切れない眞情の反映とも見るべきである。

其後我々の俳句が段々社會的に弘通して往つた時、よくいろんな事で子規から痛棒を食つたものであるが、其の痛棒とこの痛棒とは全く別な意味を持つてゐた。後の痛棒は殆んど感情を

伴はない理智の判斷に立てゐるやうだつた。熱も涙もない敎訓と叱咤であつた。メスで剞るやうな冷たさであつた。この痛棒のやうに子規の全身が熱砂となつて私を降り埋めるやうな味はもう再度經驗する事が出來なかつた。さういふ經驗を持つ私は幸福な位置に居たと言はねばならない。

「渡守」に失敗して後の私は、再び小說會の課題に筆を染める元氣がなかつた。心窃かに自己の修養への道をたどらねばならなかつた。

青桐子足下、再度の玉書拜讀仕候、小生腦痛に付ていたく御心配相かけ相すまざる義に御座候、小生腦痛とは申ながら朝に晩に痛い〳〵と申方の痛にては無之、只々神經病的の腦痛にて候へども、それも此頃は大によろしく候故御安心被下度候、筏の句虛子の改刪更に一歩を進めて尤妙と存候、併し

漕ぐ筏流るいかだや花の中

のるの字はすの字なる事勿論と存候

貴兄は之を一笑に附すべしとの愚翰中の語は貴兄之を誤解せり。然れども之を辯明するを好まず、何となれば再び貴兄をして呶々千萬言を費さしむるの恐れあればにて候

僕妄りに詩人とならんとの大言を吐く、虛子之を解せざるものゝ如し、而して貴兄一言の下に大悟徹底し了す喝

鹿の角の拙句御添削被下拜謝之至に候、殊に凡句を變じて名句となす靈妙手段感服の至に御座候、晝の月の句御賞讃恐入候、併し此句は或は古人に例句あるやとも存候故、後來馬脚を現はす事なしともいひ難く念の爲に申上置候

古白の句「鶯や新茶のひかる」「春雨や京は町並」の二句は面白しと存候、併し今日貴兄の立てられたる標準とは一寸違ひ可申候（貴兄の標準とて一寸とはいひ難けれども反對（コントラスト）の比較を第一とする貴意及び夜櫻や下駄にころがるといふ證句にて略々相分り居候）

茶 の 花 や 蓬 萊 は 雲 の 月 の 裏

一向に解しがたく候、夜櫻に髑髏の句の同種類に御座候

聲〳〵に夜すみわたる蛙哉、可もなく不可もなくと存候

山吹や枯枝を去年のまゝにして

前同様也、併し山吹を他の植物に改め給はゞ一等を進むべし

すめば都都にすめば蛙かな、御意十分には會得致兼候へども、まづ此中にて尤よろしき様に存候

行春や柳の糸の五六十、小生初めに誤て新春や柳の糸の五六寸と讀んだり○古書を賣り切手にかへて惠み給ひし御厚意、今に始めぬことながら感謝に不堪候

前便貴著渡し守に付て暴言を呈し候處、早速御狀被下しかも御懇篤の言語にて、謝し給ふより外御叱りも無之甚だ恐入候、彼時の愚書は夢として例の猴に御喰はせ被下度重々奉願候、そはとにかく小生の一言位にて失望し給ふことなかれ逡巡し給ふ事なかれ、貴兄には左様の事は無御座と存居候得共、失望逡巡躊躇恐怖抔と申事は甚だよろしからず、或は謹愼といふ事さへも少年には害を與ふるやも計りがたしと存候、猶御勉强之程奉願候、先日の御端書拜見次韻被下奉謝候、且貴詠甚だ面白く御手並見あげ候

五月十六日　子規生拜

青桐大兄虎皮下

時鳥千本卒都婆宵月夜（假名なし）

野は暗く雲雀一羽の夕日哉

板繪馬のごふんはげたり夏木立

渟沌の中に物あり五月富士

一日は都の水やはつ松魚

手の內に螢つめたきひかり哉

松の木をかゝへて見たり衣がへ

御叱正奉願候

これが約一週間を經過した後の、子規の感情も平靜に歸した時の便りであつた。「僕妄りに詩人とならんとの大言を吐く」の一句は、或は子規の心境の一轉を意味するものではないであらうか。小說の述作に向ふ宿志の處女作「月の都」の出板頓挫と、其の藝術的價

値に對する自己反省の痛切な自尊心損傷の爲めに、今後自己をどう善處すべきかの問題は、恐らく子規の世の中への行路に直面した第一の難關であつた。子規の腦痛といふのも、むしろ其の昏迷懊惱の餘病ではなかつたであらうか。小説を斷念して俳句に行く、そこに一活路を見出して子規の心境稍廓然たるものがあつたのではなからうか。子規が俳人としてのみ甘んじてゐたのは、其の身體の自由を奪はれた病氣のせいであるとも解されてゐる。尤も無病な健康體であつたとしたら、政治家、新聞記者、官吏、どこに其の才能を揮つたかは保證の限りでない。けれども、其の俳人的生活に人生の第一歩を踏み入れたモツトーには、かゝる心的痛切味の一難關を通過してゐることを等閑に附し難い。子規は漫然として其の生活の道を踏み出したのではない。藝は身を扶ける底の環境の支配に身を委ねたのでもない。宿痾の爲めに俳人生活を餘儀なく強ひられた外觀の裏面には、曾て小説家として立たうとした心的大打撃の苦惱を人知れず刻みつけられてゐたのであつた。

「渡し守」に對する慰撫の辭は、暴風一過後の靜穩な漣のせゞらぎである。私の享けた打撃も相應に深刻であつた。かやうな慰撫の辭によつて、再び無邪氣な調子づいた昔の私に歸る事

は出來なかつた。私の一生の道も子規の感化に因るのは言ふまでもないことであるが、小說に行かずして俳句に往つた、其の動機の一原因として、この「渡守」の失敗の痛切な經驗も手傳つてゐることを忘れることは出來ないのである。

尙ほ「筏」の句についての改刪及是非の評論は、其の端を「渡守」に關する前二書翰の前に受け取つた手紙に發してゐる。其の全文

菊池便玉章拜見致候○虛子につき三四ヶ月の中に東京の事情に通ずべしやとの御疑問、小生は略々出來可申と存候、小生が東京の利益を感じたるは出京後一ヶ月位の間に有之候ひき○三種の比較御尤なれども上中下の順序は甚だ違ひ候樣覺候、反對と同類の比較とは共に面白きもの也（異類は不可也）貴說の如く反對の比較のみを面白しと云ふは少年の時に多し○貴句月にもるゝといふ語主意はよろしき也句法のあしゝと申候ひし也○謠中々盛なる由、當地餘りはやりもせねど世上一般此頃は多少謠曲の嗜好を現したり、小川天岸二氏草庵をおとづれて時々どなり申候○まり唄は藤野か新海かのもとに在るべし○一昨日は文科の運動會にて狹山所澤などいふ處へ漫遊致し候○氣候今に不順○上野の櫻は滿開に近し、向島は半開とも行

かず、小金井はまだ枯木也○當地先日大火やけ跡もまだしみ〴〵とは見ぬ位也、去年以來各地災多し、先は大略御返事まで匆々不宣

明治二十五年四月十二日　　子規拜

秉五さま　几下

ふつ〳〵と彼岸さくらの蕾哉

こつじきの身ふるひするや朝櫻

ちる花の中におし行く筏かな

政

とある。其の最後の句「ちる花の」に對する私達の隔意のない批評であつたのだ。私の「三種の比較」といふのは、一方俳句中に讀み込まれてゐる季題と材料とを分析的に見た幼稚な解剖論であつたであらう。子規が「少年の時に多し」と輕くあしらつてゐるのでも其の管見の淺さが思ひやられる。「鹿の句」といふのは、どういふのか判然しない。私の悟つたと言つて露伴

に從つたのは、この手紙にあるやうに「夜櫻や下駄にころがるされかうべ」であつた。次ぎに、「渡し守」の結末を報ずる左の書翰がある。

露伴へ御托しの御書狀並に五月十五日附之御書狀拜見致候、「流る筏」と申事に付縷々御申聞被下候へども小生が申す意は「流るゝ筏」といはねば文法にあはずと申事に候○小説家と詩家とを區別致し候に付御高見拜見難有存候。小生の意は二者を別物とせし譯なれども、尤二者とも定義判然ならざる故いゝ加減な事を申しゝものにて論理的のものにては無之候、愚意を平たくいへば卽ち尤コンクリートにいへば

　人間よりは花鳥風月がすき也

といふ位の事に有之候

純良高潔を要すとの御主意はまづよき樣なれども、何だか髑髏を以て純良高潔となし、新茶を以て然らずとなすが如し、珠玉を以て純良高潔となし、糞土を以て然らずとなすが如し、乍失敬大兄一を知て二を押し給はざるにはあらずや

貴著渡守令兄より御返稿之由小生其殘酷なるに驚き候、併し再思すれば令兄も貴兄の名譽を傷けんことを惜まれたるものなるべし、第一の失望は第二の失望を招くもの也決して失望し給ふな

○拙句「野は暗く」をわろしとの御説恐入候、小生始めより御同感也、好句なき爲に假に塡め置たり貴諭「麥を菜を」といふは一向に解せず。「渾沌」とは天地なりやとの質問なれども渾沌は天地未だ剖れざるのさき也、此句御賞讃に與かり候へども、これは燒き直しに候、古人の句に（天地の間に一つふじの山）など申もの有之候

虛子は本科へははいれざりし由小生も少し失望の念なきに非るも、虛子に取て吉か凶かそれは今日より判定しがたし

同子眼病中の由御出會之節よろしく相願ひ候、定めて本人はもどかしがり居らんと存候、貴兄左の言を御傳言被下度候

眼病はもつけの幸也、氣をせかずに一生盲になつた積りにて落つくべし、この病こそ小説家として尤妙なれ、詩人として更に妙なれ、試みに病中靜思せよ、うまくすれば悟りに近

づくべし

と、若し此手紙到着之時病氣已に全快致し候はゞ何にもなり不申候

拙句御高評は小生等とは意見全く異なり

貴句五首中

子規湖の風をまにうけて

といふ御句一番面白しと存候、湖は湖水と改めては如何、夏の月初鰹二句は御再考を煩し度候　匆々不一

五月二十八日　ほとゝぎす花押

碧梧桐様

當地諸俳家の名句

蚊柱や馬の沓解く背戸の月　破蕉　内藤先生事

梅雨晴や凌雲閣の夕日かげ　同

炭賣のそろふて出たる峠かな　明庵

陽炎や眼にゆれる鐵の橋　同

鎌倉や都のあとの閑古鳥　五洲

名月や思ひもよらず猪落し　同

千石を袈裟にした夜や時鳥　非鳳

窓あけて關八州の若ばかな　同

月の出ていよ〳〵重し白牡丹　飄亭

大佛のうしろは暗し五月雨　同

ちる時は一重なりけり八重櫻　古白

鹿の角月にうつして落しけり　同

序に拙句をも附記致し候御叱正奉願候

白牡丹ある夜の月に崩れけり

五月雨晴やけさ天窓の煤の色

世の中をまひ〳〵丸う廻りけり

短夜のあしたにのこる蚊遣哉

岩陰や水にかたよる椎の花

「人間より花鳥風月が好き也」の一句は、當時の私には少々理屈に合はない不満があつた。がこれを今一層コンクリートに言へば「小説より發句が好き也」であらうとも解した。それから「渡し守」は兄鍊卿から私へ返却されたことがこれで明らかにされた。さういふケチのついたものは、私も散逸に任したか鼻でもかんでしまつたものらしい。

「虚子は本科へ」云々は、虚子の高等中學入學の事である。本科云々は子規の思ひ違ひて、當時無試驗では豫科にしか編入されなかつたのである。眼病を慰諭する文中の句「試みに病中靜思せよ」の下に「俳句を得よ其句凡ならざるべし」と書いて消してゐる。内藤先生と斷つてゐるので鳴雪の作が始めて私に傳へられたことがわかる。鳴雪の句作は恐らくこの年に始まるのであらう。「當地諸俳家の名句」は競り吟時代、十二ヶ月時代と違つて、句風の一變

を思はせるものがある。

次いで（封筒裏、附録の御話は御面談の上ならでは委細盡しがたし）

御手紙拜見小生の俗事とは試けんのみにあらざりしが今日ではまづ試驗專間（門の誤か）となり猶更うるさきこと限りなし、殊に此兩三月が多忙の頂上甚だ困り入候得共、一書を出ださゞるべからざる次第に立至り候、そは何ぞ貴兄俳句の大進歩し給ひしこと也、先便の炭賣の句蚊柱の句を拜見して其妙なるに驚きしが、今度の句は盡く極上々吉のしろ物のみにて、貴兄今迄の御什中此の如き者は一句も見當り不申候、小生一兩月前貴兄旣に理想の極點に達し給ひし故、日ならずして上達し給はんとは豫言せしかども、かくまで早からんとは存じ不申き、蓋し其格調整ひし故に然るのみ、虛子の句近頃多く見ざれども、貴兄が御申越の二句は全く貴兄のと同じく秀逸也可賀々々

小生多忙なる時には常に多數の俳句を製造翫弄するが常也、此頃非常に多忙なる爲に、富士十二ケ月、明治新題十二ケ月、及び松山名所名物十二月等でき申候、就中松山名所十二ケ

月は既に七十餘首に及び申候、併しこれ眞に翫弄する者にて、一句として御目にかける物なし、況んや貴句盡く金科玉條なるに於てをや、されども一句も送らざるは餘りと存、十二ケ月中三月の分左に記し申候

西山々内神社

西山の花にだきつく涙哉

太山寺

蒟蒻につゝじの名あれ太山寺

出合

若鮎の二手になりて流れけり

沙島

貝とりのさしまへつゞく汐干哉

市の坪

あれにけりつばなまじりの一の坪

七曲り

永き日や菜種づたひの七曲り

等全く御笑種に御座候

秉　兄　　　　　　　規　　拜

小生歸省之程は今猶未定なり、又歸省しても遲くなるやも不知候

これは封筒に「二十五年六月十七日」發信局「同十九日著信局」の消印が明らかである。前便五月二十八日の書翰に次ぐものと見える。子規の手紙でこれ位亂雜に書流したものは稀れで、如何にも其の多忙さの想像される程一氣呵成に筆を打ちつけてゐる。私達のことをさも自分の事のやうに驚喜してゐる、心の昂ぶりも目に見えるやうである。併し、これは例の渡

し守」で失敗した私に對する慰撫の意味も加味されてゐるのは言はずもがな、子規といふ人の用意は、左樣に單純に感情にのみ驅られてはゐないのである。

十四　三津のイケス

子規「イケスも立派になつたな、フーン、昔は鯛だとかハマチだとかカナガシラだとか、そんな魚を生かしてゐる池があつて、ホンの飯位食ふ汚ない家ぢやつたがな、加藤の叔父に二三度連れられて來たきりぢやけれ……これでは八百松そこのけぢやな、尤もアシも東京の料理屋と言つたつて、八百松の外はどこもまだ知らんのよ、それもお前、ついこないだ誰かの御馳走で往つた最新知識でな……我々を何と思つたか、少々上等の座敷へ通し過ぎたやうぢやな。

非風「そんなことがあるもんか……今な茶を持つて來た女は妙な顔しとつたな、目が針金で釣つたやうになつて、鼻が一しよくたに紙を揉んだやうにくしや／＼になつて、ありやア一體何といふ顔なんだらう……妙な顔もあるもんだ、とつく／＼感心しちやつたなアのぼさん。

子規「さうだつたかな、ちつとも氣がつかなかつたが……。

非風「なアォイきよさんへーさん、ひどい顔だつてお前、はいつて來たときにぎよつとしたぞな、木統に……、それにあの髪の臭さつたら……あいつが飯の給仕にでも來ようもんなら、弱らせるな、一度咽を通つた飯でもゲー〱吐いちまふぞな。

子規「ハツハツ、矢張これで新海が一番東京の女に馴染があるといふことになるのぢやな。

非風「お言ひなよ、けれども何だな、田舍者は大體に洗ひ髪といふものゝ味を知らんやうぢやな、洗ひ髪の櫛卷でお白粉氣なしの素肌に、明石かなんかの着流しと來ると、又たすうつとするからな、ハツハツ。

碧梧桐と虛子は持つて來た風呂敷包みをあけて、紙や筆を整理したり、借りた硯で墨をすつたりしてゐた。夏らしくない小雨がしと〱降りこんで、庭に伸びた南天の細長い枝が、頭を重さうにシナつてゐた。

虛子「何か題を出してもらはんと……。

碧梧「さうよな、のぼさん題を出しておくれや。

非風「もう始めるのかな、野暮の床いそぎぢやな、まアゆつくり別嬪論でもやる位な餘裕を持

たうぢやないか、ハツハツ。

子規「さア何でもそこらにあるものでよかろがな、何でもお出しや。

非風「題を出すつて、いつもの競り吟ぢやらうな、それならアシが出す、田舍者の髮の匂ひ、どうぞな、いかんかな、女の素肌、こりやア一寸よかろがな、いかんな、さうかな、人三化七針金眼に團子鼻はどうぞなハツハツ。

一同「アハヽヽヽヽ。

子規「エヽ加減にしようや、へーさんお前何かお出しや。

碧梧「出してもエヽかな、ぢや蓮の花。

子規「蓮の花、さう〳〵來る道に咲いとつたな、アシら少さい時分、お壕の蓮が一杯ぢやつたがな、南堀端の何とか庄兵衛と言つたお爺さんが、蓮のさかり時分はポン〳〵花のさく音がして、床の中でひとりでに目がぱちりと明き、ポンと來ると又た頭があがり、又たポンと來ると半身が起きて、ひとりでに床の中から起きられる、と言ひよいでたさうな。

非風「ポンと來て蒲團をまくり、ポンと來て雨戸を蹴放し、又たポンで表戸を蹴破り、又たポ

ンと來て堀の中へ飛び込めアわけはないな。山寺の和尙さんが猫を紙袋ぢやあるまいしフ、、、、。

子規「ハ、、、けれどな、蓮の花のさく音で眼が覺めるやうな靜かな氣分はわるくないな、オイ一つ出來たかイ。

蓮の花と題を書いた一枚の紙へ

　咲立つて小池のせまき蓮哉

草書ですら〳〵と書いた。默つて考へてゐた虛子がすぐ筆をとつて、其のあたへ

　ふいと來た胡蝶にさくや蓮の花

と書いた。碧梧桐は十分まとまらなかつたが、大急ぎにまとまりをつけて

　蝶々の散るにはもろき蓮かな

とつゞけた。

非風「こりやア堪らんな、いづれズン〳〵お書きるかイ、串戲ではおツつかなくなつた、一寸お待ちよ、エーと、それ〳〵これはどうかな「舟あるか」と、舟あるか……舟あるか……蓮

の中から……蓮の中に……。

子規「まるで鳴物入りぢやな。

非風「さうお言ひなよ、折角の趣向がどこかへ往つてしまつたがな……仕方がない、まアかう
しよう

　舟あるか蓮の中に立つ蚊遣

子規「うまいな始めて句らしいものが出來たな、大器晩成ぢやな。

非風「そんなにおだてると一齊射擊式になんぼでも書くぞな、それ

　不忍の蓮から明る大江戸哉

おえどかなは窮したな

　蓮の花に佛の顔の香ふ哉

こりやアお前、さつきの髮の臭ひとは雲泥の差ぞな

　ねむき朝を隣の蓮の香り哉

ボンと來て雨戸を蹴破る式に奇抜にやらうと思つたが、いかんな、エーツと

蓮池や誰がほりすてし馬のくつ

なんぼやつてもダメぢやな、二束三文の通りぬけも洒落にはなるまいなハッハッ。
非風のはしやいだあとへ、虚子が二句、子規が四句書いて一段落となつた。次ぎには「泳ぎ」
といふ題が出た。

非風「泳ぎ、泳ぎ、今度は人後におちんやうにやるさ、

萍の花くゞり行くおよぎかな

どうかな。

碧梧桐が次ぎに筆を執つた。

あまの子の女まじりに泳ぎかな

子規「おとなしく出ておいでるな。

非風「オーイへーさん負けずにおやりよ、それ

酒樽を枕におよぐおやぢかな

酒樽かな、瓢箪かな、瓢箪をでもいゝな、それ早くあとをおやり。

子規「アハヽヽ、まアアシにも書かせておくれ、大器晩成ともいかんかな。
　ともづなにあまの子ならぶ泳ぎ哉
非風「こりやアのばさんにも似合はん、あまの子の女交りの焼き直しぢやな。
子規「イエ、少々弱つたのよ。
碧梧「でも遠つとるけれよかろがな、ナアきよさん。
虚子「さうよなア、焼き直しとは言へまいな。
子規「救け船〳〵、餘り責めつけられては氣が氣ぢやないけれな。
其の間に碧梧桐が書く。
　澄きつた水におよぎの心哉
子規「心哉、例のむつかしいのが出たな、時々エタイの知れない天馬空を行くやつで閉口させられる……。
虚子が其の間に筆を執つた。
　ふいと出た坊主頭や花の中

非風「へヽツ、これで泳ぎをおきかせるのか、きよさんにしちやア古い〳〵、かうこぢれて來ると、たゞぢやおさまらんな、これはどうぞな。

ふじつくば左右につかむぬき手哉

子規「アハヽヽ、天馬空を泳ぐな。

非風「ぬき手がよかろがな、エー、これ位ズバぬけりやア、もうあとは出られまいハッハッ

碧梧桐は默々として、あとへ左の二句をかきつゞけた。

藻に足をとられながらのおよぎ哉

緋鯉黑鯉せな腹を行くおよぎ哉

非風「面あて氣味におやりたな、緋鯉と黑鯉が背中と腹を行く、まるで合せ鏡見たいだな、上から見ると赤かつたり、下から見ると黑うかつたり、もう一息で人魚になりさうぢやな。

子規「愚圖々々してゐるとおいてきぼりされる……一寸お待ちよ、何とか仲間入りを……まアこれで、怺へておくれ。

ぬれ髮を木蔭にさばくおよき哉

（と書きながら）アハヽヽ弱つた〳〵、矢張なんぢやな、自分で泳ぎを知らんと出んもんぢやな、そこへ行くと、お閑池のぬしのへーさんには敵はんぞな。

隣の部屋で、他の客の來たらしい物音がしてゐたが、女の嬌音と共にピン〳〵三味線が鳴り出した。この雨では別に客もあるまいと多寡をくゝつてゐた豫想を裏ぎられた皆が、目と目をつき合せた。

非風「生意氣に晝間から散財をやるんだな、いつか古白が、松山の藝者は三味線を彈くのぢやない、ありやア叩くんだ、と言つたが、この三津の藝者ぢや、尙更ら叩くのぢやらうな、叩き藝者なんて、大工の親類見たいで隨分振つとるな。

皆が笑ひを忍んでゐる中に、子規は次ぎの題を沖膾ときめて、すぐに一句をかきつけた。

はね鯛をとつておさへて沖膾

子規「今度はおくれをとらんぞな。

非風「題をお出したのが先きか、句が出來たのが先きか、少々曖昧だつたな。かういふ題は、ナアォイ我々でストライキと出かけやうぢやないか、のぼさん一人に任せとこや。

碧梧桐が筆を執つてつゞく。

　齒に生きた答へいさまし沖なます

　沖鱠金のまき繪のひら鉢に

非風「これやアいかん、妥協しておしまひりやア多勢に無勢ぢやな。

子規が書く。

　涼しさや酢にもよごれぬ沖鱠

非風「何だか酢でごま化しておしまひるな……と言つてさう〳〵負けてはをらんぞな。」

　碇にもたれて月を相手や沖鱠

　藻の花も皿に咲きけり沖鱠

チト宗匠臭いかな、まアおこらへや。

　夕立のたまるも淸しおきなます

　大名の御手料理もやおきなます

　船頭は此名も知らず沖なます

笘に來てからす鳴く也おき鱠

腰簔の雫も涼し沖鱠

一氣に五句書きつゞけてニタ〱笑つてゐる子規は、どうやら俳境に身を浸したやうなおちつきと満足に、其の額の廣い白々とした顔が輝いてゐた。横に切れた目尻に愛嬌の皺をよせて、ぢつと虚子を見た。

子規「きよさん、お前おされておしまひたのか。

虚子「どうも出來んな、沖鱠といふものを知らんけれな。

非風「マアお前、さし身を食ふ氣でやるのよ。こゝで食やア、大抵の魚は生きとらい、こゝの朝市でもお前、はね鯛を取つて押さへようがな……成程な、こゝの藝者は三味線を叩くな。

子規「アハヽヽ、やつぱり氣になると見えるな。

非風「凡夫のあさましさてな、オイもう競り吟なんかやめようや。

碧梧「まアこれからといふ處ぢやがな、まアお待ちや。

非風「そんならアシが題を出す、エート、霍亂、かくらん、譯して言やアコレラよ。どいつも

こいつもコレラでくたばつちまうぢやないか。

子規「猛烈なのはいゝが、霍亂とは難題ぢやな。

非風「沖繪なんかよりいゝさ、それがいけなけりやアもうおやめ。

子規「出來たぞな。

霍亂ややけ砂はしる赤はだし

かくらんの厠にこもる暑さかな

はどうぞな。

非風「こいつは暑さうぢやな、ヂリ〳〵背中から腰を燒きつけられるな。ヒ、ヒ。

其のあとへ虛、規、碧と三人で代る〳〵書きつゞける。子規が「ォイ〳〵出題者はどうしたんぞな」とからかひ始める。非風は仰山らしく「絶體絶命！」と叫んで、「精神錯亂も乳臭い酒落かな、さう皆でアシばかりおねめつけなよ」外の三人がくすくす笑つてゐる中に

霍亂や馬の小便の耳につく

と書いて、「到頭小便しちやつた」で一同でどつと笑ひくづれた。

十五　松山競吟集

三津イケスの四人の會合は、明治廿五年八月五日の午後であつた。子規はこの年の七月に歸省して八月半ば過ぎまで滯在してゐた。小說「月の都」創作の後ではあり、又た小說會で私の「渡し守」の一件もあつた今までにない複雜な想ひ出のからんでゐた年であつたから、少くも私の子規を迎へる心持は、熱した昂奮と痛切な親しみと、さうして何處かに壓迫されるやうな苦い悲しさを味つてゐた。今迄のやうに、たゞ懷かしい人、愛してくれる兄を迎へるやうな單純な氣持ではなかつた。さう言へば、子規自身も、それと明らさまに告白しない、自己一身上のいろ／＼の問題の未解決な重荷を負うてゐたやうだつた。併し、子規が其の胸中に欝積した磊塊を吐くには私達はまだ若かつた。私達がどれほど想像を逞しうしても、其の入り口にも味到し得ない世界を子規は持つてゐた。で、子規は成るべくさういふ話を避けようとしてゐた。それに觸れかけても、努めて大雜把に磊落に片づけてしまつた傾きがあつた。

七月何日に歸つたのかは判然しないが、當時の私の手控――會合の競り吟を淸書して一冊に綴ぢ、それにあとから子規が墨や朱で批點を打つてゐる――の「松山競吟集」といふものによると、第一の會合を高濱――當時三津ケ濱に對抗して汽船の發着所をつくり、輕便鐵道もそこまで伸びてゐた――の延齡館といふのに、規、虛と私の三人で催してゐる。第二回は七月十九日三津イケス――潑々園とも言つた――で、伊藤可南も加つた四人、第三回は七月廿四日夜虛子の宅、第四回も同じ虛子の宅で七月卅一日に催してゐる。此時は遲れて歸省した非風、明庵も加つた五人。第五回が前記の三津イケスの四人、第六回は發句大會といふ振れ出しで、八月十六日矢張三津イケスに子規、非風、明庵、可全、虛子、碧梧桐の六人が會合した。それがこの夏の雅會の終りであつた。

かやうに一週に一度位會合する外には、時間の許す限り、子規を訪問してをり、又た私は同行しなかつたが、子規非風の主催で、小舟で北條の鹿島に遊んだやうな句を離れた淸興もあつたりした。

かくて又たいつもの夏休みのやうに、無邪氣に句を闘はす、蟠りのない出會ひになつて往つ

た。恐らく子規も私達と往來してゐる間、其の負うてゐた重荷を他に紛らすことが出來たかも知れない。子規全集によると、この前年の木曾旅行の紀行「かけはしの記」が新聞「日本」に掲載されたのは、この廿五年の五月であつた。それらの緣故で、子規が「日本」に入社する前提として、其の文苑欄中に俳句を載せ始めたのも、この夏の歸鄕から、再び東京の人となつた間もない後のことであつた。子規の「寒山落木」の自筆、明治廿五年の條に「……夏歸省ス九月上京十一月家族迎ヘノタメ神戸ニ行ク京都ヲ見物シテ上京○此年夏ヨリ日本紙上ニ投句十二月ヨリ入社」とあるのを見ると、子規が自活をしなければならないやうな運命に置かれて、何處に其の活路を開くべきかの相應に重大な問題は、さまで長い苦痛を伴なはない、案外易々たる解決を告げたやうである。

この時分の會合の席上句はいつも競り吟であつた。題が出るのと同時に、成るべく拙速を尊ぶ句作法で、其の題にヒントを得た境地を味ひながら少し苦吟してゐたりすると、落伍者になつてしまふ。一題の句は十乃至二十位になつて、一寸出かたが澁ると、他の題を課して氣分を新たにした。大抵一會合に十題位片づけてゐた。別に執筆といふ者もなし、宗匠といふ者もな

い平等な位置で、自分の句は自分で書く例だつた。非風のやうに、口まめな人が一人加はると句作の相の手の輕口洒落なども交つて、遊戲氣分を一層濃厚にする、賑やかな會合になるのだつた。競り吟にも飽いて來ると、或る題に他の條件をつけた餘興的な遊びもやつた。さうして即席のウキツトに罪もなく笑ひ興じたりした。さういふ席で聯句をやつた例は甚だ稀れであつた。「寒山落木」の二十五年の條下に「一月燈火十二ヶ月ヲ作ル其後何々十二月ト稱スルコト絕エズ」と書いてゐる一種の句作練習法も、時には行はれた。八月十六日の大會には、かねて兼題として課せられてゐた「命十二ヶ月」といふ「命」の字讀み込みが、子規、明庵、可全、虛子、碧梧桐の五人で試みられたりしてゐる。左にこの夏の會合で評判のよかつた句の一端を擧げて見る。

梅干や庵のぐるりは日のさかり　碧梧桐
梅干や金屏春正に闌なり　虛子
雨乞にまた出て來たり雲の峰　同
打水にくづれし月の若葉かな　碧梧桐

うち水のあとを夕立の走り哉　虚子
並松のみさき廻りて風薫る　同
晝顔ばは蝶の遊ばぬさかり哉　子規
打あげた水風蘭にとゞきけり　同
我先きに穂に出て田草ぬかれけり　同
蟲干や花見月見の衣の數　同
ぬけ出てあと見かへるや蟬のから　虚子
水無月やぬれ色見するまくはうり　碧梧桐
雨にくれ雨にあけたる行々子　虚子
夕顏の花白し瓜の花白し　碧梧桐
山門になまくさ味あり栗の花　明庵
行水のうしろに咲くや蓮の花　虚子
行水をすてゝ湖水のさゝにごり　碧梧桐

見かへりてあと蘭の花に道もなし　虚子

夏やせや團扇の骨の恐ろしき　非風

蜘の子や親の袋をかんで出る　碧梧桐

袋蜘蛛窓掃く中にくづれけり　虚子

涅槃會や命をもたぬものもなし　碧梧桐

しばらくの命うつくし櫻鯛　虚子

啞蟬の何を命に秋の風　可全

掬め手は通る人なし桐一葉　同

蜑の家は門の外なる燈籠哉　碧梧桐

燈籠の草にかげする夕かな　可全

十六　一家二十句

子規、非風、明庵等を迎へた明治廿五年の七、八月の歡樂は、朝夕肌寒い秋風の吹き初めるにつれて、あとに淋しい私一人を見出さねばならない夢となつた。子規非風は八月の末に東京に去り、九月に入つて中學を終へた虚子も、亦た京都の三高入學の爲め故鄕を出發したからである。お互ひに心の底を打割つて話す友を失なつた私は、其の孤獨の寂寞さを堪へ得る爲め、當然の歸結として、句作に精進しなければならなくなつた。私は殆んど每夜のやうに、父や母を始め家人の寢靜まる頃まで、學校の已むを得ない宿題の復習の外は、句作に沒頭してゐた。其頃の私の句稿「一葉集」といふのを見ると、九月五日から十四日まで、日記のかはりに、多い時は數十句が書き列ねてある。其後は飛び〳〵になつてゐるが、翌廿六年三月まで撓まずつゞいてゐる。私の句作は、もう一時の座興や、餘技の遊びでなくて、私の生活の中心に食ひ入つた、私には無くてならない糧の一つであつた。「一葉集」の卷頭に、拙ない左のはしがきを書

いてゐる。

明治廿五年八月正岡子規、新海非風二氏歸鄕頻に發句を催す、因て少しく得るところあり、同廿六日二子歸京、虛子亦九月四日西京に赴く、殘るもの吾一人、唯だ子規子撰の一家二十句を朝夕の伴侶として樂む、又た味なきにあらず、頻に玩味して又少しく得る處あり、依て後日の爲め近作の句及び今後の句をまとめて一冊となさん爲めこの一葉集を作る　九月六日

暗中の模索から一道の光明を認めて、私だけの俳句の世界を啓發した消息は右の文中にほのめいてゐる。其の自得の境地を開いたヒントを與へたものが、子規選の「一家二十句」であつたのだ。

私達のやうに始終子規と行住坐臥を共にしてゐた者でも、其の終生の事業の一つとしてゐた「俳句分類」がいつ頃から始められたものか、又たどの程度に進捗してゐたものか、甚だ迂濶に過ぎてゐた。俳句分類といふのは、昔からの俳書に現はれた句を、同一の題下に網羅して、誰がどういふ句を作つてゐるかを一目瞭然たらしめ、それによつて一面には歷史の研究、句作の參考資料とし、他面には剽竊を戒め、類句を硏めようとした廣大な企であつた。言ふ迄もな

く、上は宗祇に始まり、中期の芭蕉、蕪村、末期の梅室蒼虬にも及んで、總ての俳書を渉獵しようとしたのであつた。併し、多少とも俳書に眼を通した者は、單に一時代を劃する檀林派の出現に至るまでの上古時代の俳書だけでも、其の數幾百卷に上るか、其の餘りに多數であるのに一驚を喫しなければならない。まして元祿の芭蕉中心時代、安永天明の三都の勃興時代を經て、文化文政の末期に入つては、其の數殆んど計數の外にある。恐らくは誰でも手のつけやうの無いのに呆然たる許りであらうが、子規は千里の道も一歩より始まる底の勇猛心を起して、俳書の大堂塔の解體に、ひとりコツ〳〵と從事したのだ。尤も其の最初の動機は、何の書にこんな句があつたといふ記憶の參考にしたい位の、手近かな便利に萌したのであらうが、其の編纂に從事して行く慾望が、遂に終生の大事業、子規がよし百歲の壽を保つても、成し遂げられさうにない廣大味を滯びて往つたのであつた。「俳句分類」といふ名に到達するまでにはいろ〳〵の名がつけ變へられたと同時に、一題の句數が、餘り澤山になるにつれて、其の分類方法も種々に工夫された。晩年其の分類方法を說明して、誰か自分の事業を次ぐ者もあらうかとの果敢ない望みを述べた時も、其の複雜な漢字の字書を引くやうな分類法は、容易く私達の頭には入

らなかつた。現に存する共の遺著出版の事が――よし不完全なものでも、子規の事業を世に紹介する意味に於て――屢々談議に上つても、共の分類方法を誰にでも分り易く說明する「俳句分類の解說」を書く者がなくて中止されてゐる位である。若し共の解說が當を得なかつたなら、折角の子規の苦心も、たゞ雜然たる俳書の堆積に等しいのである。

時々子規が共の分類に從事してゐる場合に訪問することがあつた。この頃分類した何の俳書にかういふ句があつた、と共の記憶をたどつて、傾向の相違や、創意の前後や、共の他句法用語等に渡る共の發明を諄々と說く例であつた。それが如何にも愉快さうであり、又た滿足らしくもあつた。無味索然たる事業の僅かな收穫であるといふ誇りも含まれてゐた。時には又た、こんな月並臭い本の分類には馬鹿に時間がかゝるが、何々金玉の我らの憧憬する俳書は、瞬く間に濟んでしまふ、などゝ破顏微笑する事もあつた。若し私達の仲間に共の事業に興味を持つて、共の志を繼ぐ事を誓約する誰かゞあつたとしたら、子規は少くも共の未完成の事業に向つての多少の安心を得て、共の死後に對する懊惱の幾分を輕減し得たであらう。でなくとも、若し分類に一臂の勞を惜まない秘書役を勤める者があつたとしても、恐らく心からの悅びをもつ

て迎へたてあらう。其後子規の門に出入した老青年は日に〱殖えて往つたが、さういふ事務的に子規を悦ばした人は一人も出なかつた。子規も亦たさういふ意味で、其の新らしい門下を試みやうともしなかつた。又た一人の同志を得ない事實に愚痴らしい一言をも漏らしたことが無つた。左樣な事務的の仕事は、たゞ自己一人の興味であるとも斷念してゐたやうだつた。併しながら、「俳句分類」を未完成のまゝに投げ捨てゝ置くことは堪へざる苦痛であるよりも、恐らく病中の忍び難い淋しさてあつたてあらう。

「俳句分類」によつて、俳書の句々を料理して行く本筋の仕事の外に、先づ其の俳書の刊行年代を知る便りがあるので、「俳句分類」と同時に「俳書年表」といふ一書が生れた。それと同時に、澤山な俳書から或る個人の作を集め得る機會も出て來るので、其處に「俳家全集」と題するものも編まれた。其の外色彩に關する句、音響に關するもの、新事物新語詠み込みもの等、句として特殊味を持つてゐるものを、他の研究史料として擧げようともした。「俳句分類」の乙號がそれであつた。「俳句分類」は單なる分類でなくて、それから種々な事業を派生したのであつた。自然或る一句に逢著した時、それを「俳家全集」にも「俳句分類」乙號にも、尙ほ其他

の研究史料にも書き込まねばならない根氣と興味を持つてゐた。子規が俳句の分類を始めた時の坐右には、改良判紙を綴ぢ込んだ其の著作の稿本が雜然と散亂してゐたのも其の爲めであつた。時には其の机も、子規のからだも、山と積まれた稿本で埋まる事もあつた。

「俳句分類」の稿本の一冊は、大抵改良判紙百枚以上三百枚位に達してゐた。分類法として、或る一種類の題は判紙一枚、卽ち一頁十行罫の二十句に限られてゐたから、それが二十句以上に達した時は、其の一種類を二種に分けて、紙を一枚增さねばならなかつた。で、二百枚も綴ぢた稿本の中へ、新たな紙を綴ぢ足す場合が頻々と起つた。子規は其の爲、稿本の綴ぢ方を工夫し、新たに一枚を綴ぢ足す便利なども發明した。今日のやうに、萬年筆や、洋紙の原稿紙などのない時であつたから、それほどの大部な稿本も、一々墨と筆を使つてゐた。嘸ぞ筆にも硯にも相應の贅澤を言つたであらうとも思はれるが、硯も學校用の安物で一向平氣であつた。墨は精々香花墨位、筆は支那製の十本十錢位の「小全毫」に限られてゐた。いつかからだの自由を失なつてからの病中に侍した時、硯の中の錐を不圖見つけて、この錐を錆びさしたことは以前は無つた、よく光つてゐた。が、もう尖きまで眞赤に錆びてしまつた、と感慨無量の態でひと

り言など言つたこともあつた。又たいつか分類のお手傳ひをしようか、と二三枚の清書を手傳つた時、如何にも氣の毒さうに「やつておくれるか」といつになく滿面に笑みを湛へた其の時の顏も、今ではうら淋しい想ひ出の一つである。「俳句分類」の中に、子規の筆でないもの丶往々にして交るのは、虛子と私がほんの一寸觸れる位のお手傳ひをした名殘であつた。

「俳家全集」も同樣、改良半紙二百枚綴ぢの部厚な稿本であつた。大體元祿以前、元祿、享保、天明、寬政と言つた時代分けにしたのが五六册あつた。其の外に沒年月の判らない俳人の「俳家全集別册」といふのもあつた。これも「俳句分類」と同じ未完成のものであつたが、若し其の遺志を次いで、子規のまだ目を通さない俳書を補つて往かうとすれば、此の稿本の方は甚だ容易に運ぶやうに出來てゐた。明治廿七八年頃、東京でぶら〱してゐた私は、子規の血と汗との結晶である、この「俳家全集」を手寫することを日々の仕事としてゐた時もあつた。當時私が一册か二册でもよい、子規未見の俳書をあさつて、子規の事業の廣大なピラミッドに一片の石でも積み得たことなら、どれほど子規を嬉しがらせたことだつたらう。が、そんな事に無關心であつた私は、師兄の榮苦を偸む不弟の所行をさへ、少々荷厄介にしてゐた。其の時分の

ことは追ひ〳〵書く事にするが、當初自分の片腕とも思つて信賴してゐた私を、間もなく殆んど捨てたもの同樣に考へてゐたのも無理はなかつたのだ。

「俳家全集」を編むことから一步を轉じて、各俳家の特色傾向等を一讀明瞭ならしめるやうな代表句を擧げたい他の慾望を唆つた。全集を編むことは、純然たる事務的の仕事であるが、其の純事務に落着いてをれなかつた、他の詩人的本能が、其の事務を土臺にした批判的意思を動かしたのだ。つまり古今俳人の品隲を其の創作によつて定めて見たかつたのだ。公平に眞正に明確に各俳家の特色個人性を洞察しようとした硏究の所產でもあつた。今までの俳人が誰一人試みなかつた、純藝術的批判に立たうとする十分な自信と、又た自分が始めてそれを試むのだといふ半ば好奇心も手傳つてゐた。子規は各個人を代表する句數を二十句と限つて、それ以上一句も增減しなかつた。二十句以上では、澤山な俳人を知る上に却つて不便であり、二十句以下では、又た其の特色を知るに困難だと考へてゐた。二十句の中には、昔から人口に膾炙してゐて、其の作者と切り放せないもの、或る時代の風潮の源泉となつたもの、其の作者の心機一轉を象徵するものなど、多くの歷史的意義をも加味した上に、子規個人の純藝術的の批判に立

脚した、其の個人的藝術の代表作を含んでゐた。名づけて「一家二十句」と言つた。尤も子規の藝術的批判の標準は一處に膠着してはゐなかつた。「一家二十句」も、其の新たな批判と材料によつて、其の後幾度改刪されたてあららか。恐らく今日遺つてゐるものは、當時私が借讀したものと、內容の同一のものではないであらう。

「一家二十句」の話が、あらぬ方に反れて往つた。たゞ私が意外に思つたことは、明治廿五年の私らの俳句發祥時代に、既に「俳句分類」から派生した「俳家全集」をモデイフワイしたともいふべき「一家二十句」の稿本の出來てゐた事實であつた。子規の句作は、明治十八年頃に始まつてゐるやうである。けれども宗匠の手を離れて、自家の見地を開いたのはそれより少くも四五年の後であつた。俳書の渉獵に興味を見出したのも、亦た其の頃でなければならない。子規が詩に目覺めて、貞德宗因を排し、芭蕉の猿蓑に其の眞髓を自得するのと同時に、早く「俳句分類」の事業に着眼したのでなければ、當時「一家二十句」などの稿本の作られてゐる所以はない。子規がよく夜なべをして、往々鷄鳴に達すると言つたのも、恐らく大部分は「俳句分類」の仕事に携つてゐた爲めであらうと想像される。座右に書籍稿本を散亂せしめて「獺祭書

屋」と言つたのも、分類に從事する都合上已むを得なかつたのかも知れない。朝寢坊のだらしなさも、子規にとつては大きな意義のあることであつたのだ。殊に其の青年期に喀血をした、肉體的に重大な傷手を負うた、或る局限せられた運命を豫感してゐた子規が、到底跋渉し盡せないとも考へられる無盡藏な俳書の山岳帶に一歩々々突進して往つた、勇猛とも大膽とも、遠大な意圖ともいふべき緊張した心事は、正さに人知れぬ悲壯の極みであつた。子規は大方自分の爲めに泣いてくれる一人の知己もないであらう强い豫斷の下に、たゞ仕事に精進する自己鞭韃に生きてゐたのであらう。さうして、其の悲壯な心事の自己を容觀する餘裕を見出した時、たゞ一人自ら自分の爲めに泣かねばならなかつたであらう。

八月廿五日に松山を立つた其後の子規の消息は、左の手紙に明らかである。

拜啓小生歸鄕中は種々御厚情に預り又出立の節もわざ〳〵御見送り被下難有奉拜謝候、出發後大阪京都靜岡に泊り前月晦日着京仕候、神戶より下痢を催して途中相困り候が、此頃やう〳〵直りかけ中候、歸京後は雅俗の事務にて奔走訪問等盛にして寸暇を得ず、爲に御音信を

も相怠り候

拙著俳諧系統一面も御手許に残り居候や、若し有之候はゞ一家二十句と共に御序に御送り被下度候、又切抜の俳話も御用濟に相成候はゞ可成早く御送り被下間敷や乍失敬右奉願上候

一昨日は南塘先生來庵競吟四五十句、昨日は非風瓢亭二子來庵、午後競吟百七八十句、瓢亭歸營後非風と二人にて一題百句のせり吟興行仕候（時間ニ時間許り尤中にて飯などくひ申候）

其題は鹿也、試みに數句をあぐれば

手水鉢に鹿の水のむ夕哉　　非風

山寺に聲集りし小鹿哉

鹿よべば萩を廻つて來りけり

山賤も鹿も眠るや神の前

灯をけせば戸口に鳴や鹿の聲

萩ゆれて鹿の出けり山の庵

鹿の聲細谷川を飛びにけり

けさ見れば鹿の糞あり神の庭
岩角にのびあがりけり月の鹿
戸を押せばふりむいて行小鹿哉
月にふし仰ぎつ鹿の姿哉
宮島の神殿はしる小鹿哉
町へ來て紅葉ふるふやならの鹿
爐にくべて紅葉を焚けば鹿の聲
月代や鹿のふしどは松の影
鹿の尾のうしろを見れば闇夜哉
名月や眞向に立ちし鹿の形
神さびて鹿なく奈良の都哉
鹿老て猿の聲にも似たる哉
萩に寢て月見あげたる小鹿哉

子規

等に御座候　匆々不宜

九月五日　　　　　　　　　　　　　規　拝

靑桐兄几下

午後筆尊大人樣へ宜敷御傳被下度候

竹村尊兄には度々御會ひ申候、御きげんに御座候、近日或は御赴任にナルヤモ知れぬやうな御樣子可賀

高濱は最早出立後と存候故手紙不差出候

右の文中にある「俳諧系統」は俳人の系統を調べたもので、判紙幾枚かを繼いだ約四尺四方位のものであつた。「切り抜きの俳話」は、當時新聞日本に揭載し始めた「獺祭書屋俳話」の切拔帳であらう。「南塘先生」は鳴雪のことて、以前漢詩を作つた時代の雅號である。俳句には俳號でないとふさはしくないといふので、始め「破蕉」と言つてゐた。が、間もなく「鳴雪」になつた。非風飄亭の二先輩も當時最も油の乘つた時代であつたらしい。一題百句を作るなどゝ

いふ事は夢想もしてゐなかつたので、當時これらの作例に心からの驚きを感じたものだつた。

子規からの手紙は、尙ほ追ひかけて來た。

御手紙拜誦並に玉句拜誦句々金玉貴兄の御手際相見ざる半月の間にかくまでやと驚入候、一家二十句が左程まで御用に立ち候とは難有仕合に御座候、俳家系統及び俳話憶に受取申候、一家二十句も御用濟に相成候はゞ、好便次第可成早く御送致被下間敷や奉願上候

高濱は一度端書をくれ候位にて何の報知もなし、新旅行といひ新入學故、定めていそがしき事と存居候、小生歸京後取あえず病氣に相かゝり候處、今はまづ本復の體也、ことによれば本月末か來月始頃轉地療養に出掛るかもしれず、尤轉地と申ても七日か十日位也、貧も亦苦哉

竹村尊兄御赴任之赴可賀、赴任前一寸御歸國の御樣子也、尊大人の御喜悅可知

當地俳況不相變隆盛也、一題百句其後益盛にして鹿、露、蕃椒、笠(秋季)の四題にて都合四百句は已に出來上り、今は乞食(秋季)の宿題中也(尤百句)。併し百句とは固より無理なれば

過半は凡調のみ。拙句數十首を記さんに

露

白露やよごれて古き角櫓

凪吹て京も露けき夜也けり

露夜毎殺生石を洗ひけり

猪や一ふりふるふ朝の露

白露の中に泣きけり祇王祇女

ふじは雲露にあけゆく裾野哉

白露のうつくし過てちりにけり

露いくつ絲瓜の尻に出あひけり

夜の露もえて音あり大文字

白露や葎は世に長きもの

唐辛子

唐からし心ありける浮世哉

蕃椒やゝひんまがつて猶からし

東髪の人にくはせん唐辛子

唐辛子日に〳〵秋の恐ろしき

唐辛子殘る暑さをほのめかす

盆栽の數になりけりたうがらし

はらわたに通りて赤し蕃椒

雨風にます〳〵赤し唐辛子

行秋やつられてさがる唐辛子

添竹を殘して赤し唐がらし

笠（秋季）

萩薄小町が笠は破れけり

はり〳〵と木の實ふる也檜木笠

笠一つ動いて行くや木賊刈

芭蕉翁笠塚

笠塚の笠を根にしてばせを哉

薄賣去年の笠をかぶりけり

乞食（秋季）

秋の蝶長柄の傘にとまりけり
笠を手にいそぐ夕や河鹿鳴く
菅笠に螽わけゆく野道哉
傘張の願ひも同じけふの月
傘をすぼめて通る花野哉
缺椀を叩く乞食の月見哉
こつじきや揃ふて出たるけさの秋
乞食の吹きまくらるゝ野分哉
名月や京の乞食は歌よまん
乞食の臍に鳴きけりきり〴〵す
女郎花乞食の中の女かな
乞食の夢に案山子と成にけり
ある月夜路通惟然に語るらく

御叱正奉願候

可全　大兄

青桐　大兄

子規　花押

（この手紙に日限はないが消印に九月十七日とある。當時私の草稿に子規非風飄亭虚子らの批點を加へたものも添へてあつた。）

「竹村尊兄御赴任」云々は、私の兄の大學專科を卒業して、最初に神戶の師範學校に奉職したことを指すのであらう。兄は奉職した翌年歸鄉して妻帶した。母と新妻を連れて上神した時、私も隨行した記憶がある。

次で十月二日左の端書が來た。

爾後御無音御起居如何、竹村兄最早御赴任被成候や如何

「一家二十句」甚だ申兼候へども近日に幸便なく候はゞ郵便にて御途り被下間敷や（開封にてくるべし）奉願上候

霧はれて稲のおしあふ旭哉

次で十月十八日附の端書二通封書一通がある。端書の一つには「大磯」とあり、いづれを先きに出したものか不明である。

玉書拝見一家二十句御送被下候由難有存候、小生両三日前行脚に出掛、又々當地へ歸り、今明日中に歸宅可致候．此度の旅行は箱根をこえ、三島驛より修善寺に行きて蒲公の跡をとひ、それより熱海に出で伊豆の東岸に傍ふて歸り申候、道々の句二三百、

ひらりしやらり一ツ葉ゆれてうそ寒し

箱根
檜たてた人も通らず花薄
箱根山薄八里と申さばや

大磯宛玉書二通及一家二十句慥に落掌仕候．殊に一家二十句に付ては御配慮相かけ恐入候、何だか近來は世人に俳諧師視せらるゝ爲、箇様の道具が座右に無き時は、萬事心細く候まゝ、御催促申上候ひし次第に御座候、かく相成候ひては文學も俗學も同じきことに御座候呵々

小生方向上に就き而は縷々御忠告被下、今にはじめぬことながら、御厚情之程そゞろに感涙にむせび申候、委細御返事申上度候得共、萬事御推察の上なれば今更不申上候、いはぬ丈が千萬無量と御推もじ奉願上候

「死を決せざるか」の一言に至りて胸間に針をさゝるゝの思ひあり、さりとは小生それ迄に思ひ切たる志のあるにもあらず、否寧ろ死を決せざる也、死を決せざればこそ……今の次第なれ、咄吾自ら吾を知らず

○貴書中新聞社へ日勤とか、專門學校へ入込とかいふこと、皆虛報なれば御取消被下度候、殊に後報は全く無根の事にて或は早稻田文學の誤傳ならんか

○拙句御批評難有存候竹村尊兄御赴任之趣御手紙頂戴仕候

○小生本月三日より大磯に留連、其中にて行脚に行く積りなりしも、連日雨天に凝り〳〵（懲り〳〵の誤か）最早歸京と支度にとりかゝりたる十三日、やゝ晴天の氣味合なれば、終に前便申上候如く行脚致候首途の句

旅の旅又その旅の秋の風

行先のはつきり遠し秋の山

御一笑可被下候

○玉稿拜見近比の御手際一々驚入候、駄句は吐かぬとの御誓言實に空しからず感服之外無之候、併し總體よりいへば前便拜見致候物よりは大分屑多きかと存候失敬

玉稿も御返稿申上度拙稿旅の旅（今度の紀行）も抄錄して御目にかけ度は候へども、何分にも只今大磯より歸りしばかり、新聞雜誌手紙の机上に山をつきしを見てさへ吃驚する次第、手紙さへまだ皆迄は讀み兼る處故、今度は先づこれ迄にして、他日頭ののぼせぬ時にゆる〳〵可申上候　匆々頓首

十月十七日夜　子規

女月詞兄　侍史

この手紙を見ても、當時子規の大學退學一件が想像される。長者に向ても無遠慮な意見を吐いた私の若さは、むしろ苦笑の種である。けれども子規が其の無遠慮な若さに對しても、そを

一笑に附せず「咄吾れ吾を知らず」と自己を反省してゐるのは、自ら我を責め且つ咎めてゐる心の苦痛を告白してゐるのである。私の無遠慮さは子規の弱點に適中したのである。尚ほこの伊豆記行は「旅の旅の旅」と題して、「かけはしの」記に次いで新聞「日本」に掲載された。

端書の二

玉句二首とも古人の句にありやなしや覺え無之候、いづれ見當り申候はゞ可申上候

月に押せば萩にさゝへての御句奇拔にして幽趣あり感服、貴兄松尾桃青なる一篇を御草し被成候由何とか見度ものに候

思ふ事風に成たるはせを哉

この端書は前後の手紙と全く切り放されてゐる。私の質問を思ひ出して筆ついでに書きすてたものか。松尾桃青など、いふ芭蕉に關するものを草した記憶は私にはない。一家二十句などのヒントによつて何か書きたいとでも言つたことでもあるのであらう。

十七　一家移束

子規が確實に新聞「日本」の社員の椅子を與へられて、月給十八圓かを支給されたのは、この明治廿五年の暮れのことであつたが、つまりそれまでに略ぼ試驗の意味で投書してゐた「獺祭書屋俳話」や「かけはしの記」や「旅の旅の旅」などが、其の試驗に及第したことを意味してゐた。どうして又たさういふ投書をするやうになつたかに溯ると、當時「日本」を主宰してゐた陸羯南と子規が「加藤の叔父」といふ加藤拓川が同期の學友であつた關係に胚胎してゐる。子規が學生生活から自活生活に入る、人生行路の一起伏に際會して其の行くべき方向を兎も角決しなければならなかつた、峠の頂上に立つやうな彼の意思を支配したのが、叔父と新聞社長が知己であつたといふ偶然の機縁であつたのだ。或は拓川と子規の血をわけた血緣關係や、羯南と拓川の同じ寄宿舍の飯を食つた友人關係などから、それ〳〵の人々の持つてゐる運命のつながりは、ひよつこり無から有を生じたものでなくて、當然左樣につながつて行くべき必然性

を藏してゐたのかも知れない。誰でもが、途方にくれたり、所置に困つた時に採る第一の道は、大抵先づ自己に近い、それまでの習慣に餘り背反せぬ比較的樂な方面であることは、やがてそれが偶然の機緣に支配されるのでなくて、自然に然かあるべき必然の運命に歸順することを意味してゐるやうに、子規の場合も亦た、自己に近い、それまでの習慣に餘り背反せぬ樂な方向を採つたものとも解される。若し中間に加藤拓川といふ人物が介在してゐなかつたとすれば、子規と新聞「日本」とのつながりも生れずに了つたか知れないことになる。子規の運命も亦た他の方向に開かれねばならなかつたであらう。子規も知らず、拓川羯南も亦た心づかなかつた大きな支配、かくれた力が潜行的に動いてゐたと解すべきが至當であるかも知れない。

併しながら、拓川が子規を推擧したのは、遺孤を托するやうな意味で、羯南の生活圈内に活かしめやうとしたのでは無つた。子規の文才を認めてゐた拓川は、試みに羯南淘冶の下に、其の文才の活用如何を見るのに過ぎなかつた。羯南に落第すれば、他に又た方法を講ずる程度の第一關門とも思つてゐた。つまり子規に高等文官試驗か、外交官試驗でも受けさせる意味に外ならなかつた。さういふ試驗らしい試驗は受けようとも言はなかつたであらうが、又た受けて

も落第するにきまつてゐたから、試驗らしくない試驗の新聞試驗を奬めたのであつた。子規も亦た其の自由な自己の力を一杯に擴充し得る試驗の前に快よく立ち得たであらう。尤も試驗らしい試驗場に臨むよりも、どれほど心からの戰慄を感じてゐたか、又たどれほど美しい心のゆとりを持つて其の答案を書いてゐたか、恐らく當時の子規は從順な無我な小さい羊の春の麗かな陽に照らされてゐるやうに、淸く澄んだ雰圍氣に包まれてゐたであらう。さうして其の運命の必然性には想到することもなしに、偶然の機緣をのみほゝ笑んでゐたであらう。

この偶然の機緣は、子規の一生を支配する動機となり、又た子規の生活圈内に抱擁せられた私達の運命をも決定してしまつた。若し子規が新聞「日本」といふ知己を得ないで、其の藝術的主張の收穫を左樣に早く摑むことが出來なかつたとしたら、子規は第二の機緣を何處に求めて往つたであらうか。地に埋沒せられた球根は、春の地熱に咬られて、芽生し成長せずにはおかないとしても、尙ほより多くの惡い情態の下にもがき苦しみ、生れ出づる惱みを體驗せしめたかつた、といふやうな冷やかな閑是非も時には想ひ浮ぶ。尤もさういふ懊惱痛苦を永い間體驗せしめたからと言つて、子規といふ人格が破壞されたり、信仰を詐はつたり、其の生命力を

錯磨したりする患ひは比較的少なかつた。それほど確實に自己の哲學を樹立してをつたとは言へ、子規の運命は寧ろ安全平滑で、崎嶇重疊する數奇な苦味は甚だ稀有であつた。否、所謂人生の難行路には終に其の船を進めずに了つた。私のやうに、物心を覺えてから子規の愛撫の下に人となつた者は、子規の總ての言動を肯定するに馴らされて、總てが同情と訓誨と激勵を意味する聰明そのものゝやうに享け容れ得たのであつたが、晩年往々にして子規の狹量と偏頗と冷酷を云爲する人達の現はれたのも、顧ふに子規が餘りに順調な境遇に棹さした運命の爲めではなかつたであらうか。錯雜混淆した社會現象を純一單調な體驗で律しようとした嫌ひはなかつたであらうか。子規をより大きくする意味に於て、第一の機緣も第二第三の機緣も摑むことなしに、もつと野放しにして置きたかつたといふのも、必ずしも子規を傷ける冷かな客觀評ではあり得ないであらう。

當時の「日本」には、陸羯南を中心にして、福本日南、三宅雪嶺、古島古洲、末永鐵巖、仙田重邦などいふ人達が在り、文苑欄には國分青崖、本田種竹、小中村義象などが携はつてゐた。在野の論客詩人歌人の梁山泊と言つた形であつた。若し今日から嚴密に批判すると、其の梁山

但は、思想的にも藝術的にも可成り濃厚にクラシック味を帶びてゐた。殊に其の文苑欄は、質よりも名に重きを置いた事大臭味が匂つてゐた。白面の一書生であつた子規に床屋俳諧と一圖に卑しめられてゐた俳句の講座を開かしめることは、聊か其の尊嚴を傷けるものとも考へられてゐた。又た水に油を落すやうな氣味合でもあつた。早く謂へば、新聞として一種の慣習打破であつた。羯南の一つの信條として、日々新たなるべき新聞は、常に新人を迎へて新らしい仕事を與へねばならないと口癖のやうに言つてゐた。それは子規の場合に、殊に語調を强めて語られるのであつた。聞きやうによつては、子規を拾つたのは我輩であると暗に誇つてゐるやうでもあつた。羯南と子規の人格の相許す然諾の吸引力が、やがて新聞の慣習打破の基因ともなつたと見なければならない、そこには人間としてお互ひに尊いものゝ働いてゐることを等閑に見過ごすことは出來ない。

印刷業は固より新聞にはウブ素人であつた子規も、始めて生きた仕事に携はる興味からではなく、羯南の然諾に酬いる人間の共鳴感から、ありたけの努力を惜まなかつたやうである。もと〳〵知識慾と研究慾を多分に持つてゐた子規は、所謂天才的な狂的な詩人肌ではなかつたか

ら、新聞を作る一つの事業にも寧ろ適應する素質を具へてゐた。子規を一俳人、たゞ俳句の講義をする先生とのみ見てゐた者は、其の多藝多能、どの仕事にも煥發する敏感性と適應性を驚愕の目をもつて迎へねばならなかつたであらう。若し言ひ得べくんば、子規は個人としても公人としても、詩人としても事業家としても、何處にも意義ある生活を築き得た常識的天才であつたであらう。現に子規が一年間「日本」で働いた手腕が認められて、明治廿七年二月に「日本」を通俗化した「小日本」の發刊を任せられるやうな地位にさへ進んだ。蓋し新聞記者として、異數の成功を意味するものであつた。——尤もこの「小日本」は日清戰爭の始まる頃に廢刊の已むなきに至つた。序でに中村不折も、この「小日本」時代に始めて子規らと仕事を共にした一人であつた。羯南によると、不折も亦た子規と同じく其の眼識で拾つた一人であつた。

現に角明治廿五年十二月に「日本」入社の內談がきまつたので、子規は其の前月から、それまでの學生生活の總じまひをする、各方面の準備に忙殺せられてゐた。下宿屋から家庭へ、書生から社會人へ、空想から實現へ、孤獨から群集へ、夢遊病から覺醒者へ、天上から大地へ……の引越しをせなければならなかつた。荷車一臺に積めるだけの荷物でも、いざ引越しとなると、

ガラクタの整理や、行李や革包の詰め具合などにそれ相應の手間を食ふものだ。子規のこの場合の引越しは、食ひ物がまづいとか、主婦の顏が氣にくはんとか言つて、其日に思ひ立つ間借りの引越しとは別な世界の出來事だつた。いくら前後を商量し、輕重を考察する、萬遺漏のない注意周到な子規でも、この引越しに對して、相當心の動搖を、所謂胸騷ぎを感じてゐたに違ひない。神ならぬ身の、引越して往つたさきが、果して安住の地であるや否やを知らうやうはなかつたにも關らず、子規は背水の陣と言つた、十分な決心を持つてかゝつてゐた。

家族――と言つても母堂と令妹の二人――を國から呼びよせて同棲することは、形の上から言つても至極平凡な、僅かに一家の經濟問題に觸れる價値のあるかないかさへ不判明な一些事に過ぎないのであるが、子規の當時の境遇から言つて、それは可なり重い、物質よりも心の負擔であつた。さういへば、子規は、寧ろ書生としては有福な懷ろを持つてゐた。着る物は兎も角、食ふものは先づ贅澤の部に入るべき生活だつた。夜は車を曳いて苦學してゐるやうな、消費者であり同時に生產者である自費書生に比べれば、親の金よりも多く他人の金を貰つてゐた純然たる消費者又た他費書生であつた。家族との關係は當時子規が同棲しなければ家族が餓ゑ

るといふのでもなく、どちらかに看護しなければならない病人があるといふのでもなかつた。今すぐに正岡の家族が常府——昔の江戸住居——になるといふのはお國の人々には、少し事情が突飛でもあつたのだ。それを火急に迎へようとした子規の心事は、水鳥の足掻きの何とやらで、形の平板無事なだけに、深く思ひ込んだ力強いものがあつた、と想像しなければならない。ひつくるめて言へば、大學を中途で退學して、月給とりになつて自活する、生活全體の引越しの始末を、たゞうはの空に見過さないで、其の境遇の變化の意義を徹底的に理解してゐたのだ。さうして其の理解下に善處したのだ。子規の一生は餘りに順潮に過ぎたと前に言つたが、其の順潮さは偶然に棚から落ちたものでなくて、立派な航海者が無事に航海を終るやうに、子規の生活の出帆當時から、既に注意周到な準備と用意と警戒が加へられてゐたものと觀なければならなくなる。言はゞ、子規の種の蒔き方が、未來の成熟を裏書きしてゐるものだつたのだ。

當時の私はそんな事にはまるで無頓着だつた。松山へ一人でとり殘された淋しさをもつと慰めてくれてもよささうなものだ位にも、自己本位の恨みを持つてゐた。のぼさんと話しかけるやうな調子で、長い手紙を幾本もかいた。私の饒舌でない饒筆を極度に擴充した。が、子規よ

りは、例になく全く返書の跡を絕つた。十一月になつて、始めて左の端書が來たのみだつた。

幾度の芳牘拜見ゆる〳〵御返事可申上候へども、多忙にてめんぐりまひ候故、いづれ落付ての上可申上候、此度小家擧つて當地に引越候手筈にて、來る十三日出發と申候へば、何にても御用あらば小家迄御仰遣被下度候、竹村兄への御依托物あらば右同斷

隨分字も走りがきて、めんぐり舞うてゐる多忙さが目に見えるやうだ。私は何で多忙なのかを明らかにしないので、却つて濟まなかつたと自分の心なさを責めたりもした。併し、子規は其生産的自費生活の首途を祝する爲めなのか、又は心の動搖を强て紛らす爲めなのか、それとも胸中に閑日月のある餘裕を示したのか、十月の末に、鳴雪と日光の觀楓に出かけたり、十一月の五日には、大學文科の遠足會のお名殘りに妙義に登つたりしてゐる。私の中兄宛の手紙には、日光觀楓を報じてゐる、と同時に一家移束のことを報じてゐる。其の全文

玉章拜見其後須磨舞子近傍御漫遊被成候由健羨之至に候

小生も互相漫遊之後亦好機會を得て先日南塘先生に具して日光の觀楓に出掛，其絕勝に驚入候，先生と僕と合せて數百の俳句ありといへども，一句として此風光に副ふ者無之候

又來る五日は文科之遠足會にて妙義へと趣き申候，又ことによれば京洛の紅葉をも賞し度左スレバ其節拜眉を得ること〻存居候，箇樣に申候へば如何にも贅澤に聞へ候へども其實此度小家移轉之企圖有之候に付，ことによれば神戶まで出迎へに參り可申積りに有之候，假令小生は參らずとも一度は神戶を經過し來り候ものの故，其節は定めて御厄介に相成候事も多かるべく，乍失敬萬事御賴申上候，尤出發日附は未定にて候

御地高價にて御困り被成候由御察申上候，併し大兄平素の御技倆こ〻に候へば定めて相當の經濟法を發明してうまく御處事被成候こと〻奉存候

本日は愛媛學生親睦會に出掛候此頃は何かと多忙にて御無音申上候先は大略匆々不乙

十一月二日　　　　　　　　　　規　　拜

鍛　　樣

東照宮にて

杉の木や三百年の蔦もみぢ

日光山上にて紅葉一枝を折り、都への土産と存候まゝ日光停車場へ來り候處、一隊の紅裙相携へ來りて各紅葉一枝を乞ひ、之を鬢に相さし候を見て南塘翁は一枝は美人に贈る紅華哉　とうたはれ小生も

草鞋孤杖度嶙峋、三日風流吟意新

紅葉一枝半肩重、分將秋色付美人

俳句

薄紅葉紅にそめよと與へけり

御一笑可被下候

とある。子規と一隊の紅裙の對照は、咄嗟の出來事である興味本位の微笑に堪へざらしめる。子規自身も亦た其の興味を興じて上手でもない詩や句にまとめてゐる。平たく言へば、少々嬉

しがつてゐるところもある。さは言へ、この手紙を見ても生活激變に直面してゐる心の昂ぶりは毛ほども匂つてゐない。私の兄が、生來つましく無駄づかひをしない男であつたといふので神戸は物價が高からうが、大兄平生の技倆を振ふべき時節到來ではないかなどゝ自分の事を棚に上げた輕い皮肉などを言つてゐる。子規といふ人は、總てを自分で決濟する人だつた。自己の運命に關する重大事となればなるほど深く韜晦する人だつた。猜忌の眼をもつて見ると、惡人的な陰險味もあつた。自己の弱點を暴露したくない粉飾心にも充ちてゐた。

併し「日本」入社後、翌二十六年一月の末に來た私宛の手紙は、うちつけに其の窮狀を訴へてゐる。

御舍兄へ御頼の玉章昨夜拜見仕候、何はともあれ益々御健勝大賀々々、小生此兩三日は附錄にて多忙の極に達し、一刻千金と惜居候處なれ共御手紙拜見仕不堪默止一筆差上申候

藤野便の事は端書にて申上候如く全くの失念にて、其責は十分に負ひ可申候へども今更無致方候（武市への包は武市勇氏之遺稿を返附せし迄也）併し思ひ出した處でお恥かしき事なが

ら當時は甚だ不如意至極之時にて、迚も大兄に御滿足を與へ候事は思ひもよらず候、寫眞の事は忘れたるにては無之、小生も撮影致度とはいつからか思ひ居候得共、今に志を果さず候次第御賢察奉願候、殊に此前一週間の苦痛といふものは、小生命あつて以來の極點に達し候、竹邨尊兄御在京之節は、常に御厄介に相成候得共今は談ずるに人なく獨り困却致候

去年秋旅中にて撮影致候節、一葉を高濱に贈り申候、是は已に一葉は前年大兄之御手許へ差上、高濱へは未だしと存候處、左樣にもなく候赴失禮仕候

○本月雅俗の集會合して七八度も候ひしが、金のいる會は二度ながら缺席をかしき事に候、發句會は四五度に及び、中にも二會程は十三人の多勢集會運座を試み申候、此中には月並連中も多く候故、箇樣にして勝敗を決し候抔は小生餘り好み不申候へども、板挾みの姿にて無致方候、大兄及旭溪子の俳句皆々面白く感服仕候、第一俗氣の無きに驚き候、これは此頃の樣に俳句之競爭抔盛に相成候ひては、東京諸友の句皆々多少の俗氣をまじへ、自然又は故にあてこみ抔をやりいやな事に候

俳況は餘り多くて怱卒の際に述べ盡し難ければ次便に讓る

謠曲御盛の由、當地も皆々（勝田迄）寶生之直門にはいり候羨敷事に御座候、併し松山人には餘地のある者多きと感心仕候
新海半快復昨今轉地療養也
先は大略早々

十一月三十一日　　　　　　規　拜

青桐大兄　硯北

昨日鳴雪翁宅大會席上運座各人の句中高點を得しもの一句づゝ

蛇籠から四五本出たり土筆　　桃雨
初花や明星寒き梢より　　得中
峠から牛迯しけり桃の花　　明庵
涅槃會や一歳ぶりの鐘の音　　桂山
遠蛙雨に音なき夜なりけり　　松宇
水の月草を出て鳴く蛙哉　　五洲

梅か香の雫含みて蕗の薹　　藪鶯

足よりも重き心の繪踏哉　　猿男

初鮒に酢のきゝ過し鱠かな　　鳥雪

やどかりの宿を明たる日和哉　　瓢亭

瀧かれて三千丈のつらゝ哉　　古白

大佛に雪のなだるゝ朝日かな　　鳴雪

一村は谷の底也雉の聲　　子規

愚考にては諸氏之句中右之よりはよき者澤山有之候へども大方は評判わるく候あなかしこ

この手紙の日附に「十一月」とあるが、消印には「一月三十一日」とあり、「附錄」云々は「日本」の發行記念日「二月十一日」の紀元節の附錄の事を意味してをり、又た會合の句が總て春季になつてゐる點などから「十一月」の「十一」は「壹」の略字を書き損つたのではないかと思はれる。私に對するいろ〳〵の辯明はそれがどういふ事件であつたかを記憶しない。た

だ「小生命あつて以來の窮乏」などは少し仰山に聞えはするが、自活の第一年を迎へての窮乏はこれによつて略ぼ想像される。併し窮乏の極と言つても、結局小遣錢に困つた位の問題であつた。社で前借をするやうな智惠を知らなかつたウブな若さであつた。子規の本統の苦痛と危惧は恐らく尙ほ他の問題の上にこびりついてゐたであらう。

十八　運座月並

前掲二十六年一月の手紙に「此中には月並連中も多く候故」とあり「鳴雪翁宅大會席上運座」ともある。さうして「桃雨、得中、松宇、猿男」などいふ意外な人の句が列記してある。句會席上の句作及批判の手段として今日一般的に行はれてゐる「運座」といふものが、私達の仲間に採用されたのはこの時分であり、月並といふ言葉が原語の意味から遊離した他の意味を持つやうになつたのも、亦た此の時代のことであつた。

二十五年の夏歸省した時の「松山競吟集」にもあるやうに、當時子規はまだ句會席上の句作方法について適當な作法のある事を知らなかつた。松山から歸京した後も、非風、飄亭らと會合して、競り吟を一層切り詰めたともいふべき一題百句、讀込み百句などをやつてゐた。子規が「運座」といふものを覺えたのは、其の後間もないことであつて、判然とした時日はわからないが、恐らく二十五年十一、二月のことであつた。子規の「日本」に「獺祭書屋俳話」を掲

載してゐた一種の反響ともいふべきもので、當時の「椎の友」と名づけられてゐた一派の人々と會合する機緣を得、始めて「運座」の方法を敎へられたのであつた。桃雨、得中、松宇などいふ人々は其の椎の友の一派であつたのだ。會社銀行員、官吏、敎師など、皆それ〴〵の職業を持つた、總て子規よりは年長の人達の寄合であつた。私達を相手にしての會合とは、自ら席上の空氣も違つてゐた、それに今までの內證の句作とは別な公開的な意味もあつた。何でも一夜の中に二回三回と運座を重ねて、遂に徹夜したこともあつたといふ。二十六年の一月鳴雪宅で十三人の大會を開くまでには、鳴雪も子規の誘ふまゝに其の席に列して、既に椎の友連に馴染であつたことがわかる。鳴雪の述懷談をきくと、子規が來て、運座といふ大變面白い方法を知つたが、ゆふべも徹夜で句作したほどだつた、却々愉快だから一度臨席してはどうかといふので連れられて往つたが、一回濟むとあとを追つかけてやるので、誰が高點だ、イヤ勝つたの負けたのと終夜賑やかなものであつたとのことだ。少くも新らしい興味ではあつたであらうがそれがどれほどの刺戟になつたであらうかは、前掲の手紙の中に「此中には月並連中も多く候故箇樣にして勝敗を決し候抔は小生餘り好み不申候へども板挾みの姿にて無致方候」と言ひ「此

頃の様に俳句の競爭抔盛に相成候ひては東京諸友の句皆々多少の俗氣を交へ自然又は故意にあてこみ抔をやりいやな事に候」と言ひ「愚考にては諸氏の句中右のよりはよき者澤山有之候へども大方は評判わるく候」と言ひ、私達少年の作を評して「大兄及旭溪子の俳句皆々面白く感服仕候第一俗氣の無きに驚き候」といろ〳〵に繰返して言つてをるので略ぼ其の程度が知れるのみならず、此の時分子規には既に誘惑にも打ち勝ち、又た徒らに雷同もしない、自己の地歩を確然と占めて行く、其の詩的境地のあつた事も推斷し得られるのである。

さういふ立場の相違もあつたのか、椎の友連中との會合は、餘り長くはつゞかなかつた。私達が東京に住むやうになつた二十七年から二十八年にかけての句會にも——尤も子規は日清戰爭に從軍して姑らく不在であつた——同席する機會は殆んど無つたと記憶する。

「月並」といふ言葉が、今日のやうに一般的に成語としての社會的意味を持つやうになつてから、最早約二十年を經過するであらうから、今日三十歳前後までの青年は、恐らく其の語源に就いて何らの解釋を持たないであらう。「月並」といふ文字が最初或る意味を傳へたその起源に溯ると、それは恐らく古來の俳書以外に見當らないであらう。「月並會」「月並連中」など、

主として元祿以後の俳書に散見する。其の意味は「月々に開く會」「月々に開く會に列席する連中」といふのに外ならない。それは無論、延喜式や公事根源などに書かれてゐる「月次の祭り」の「つきなみ」に由來してゐる。「月次」と書くべきを「月並」とした、それは文字に對する知識と理解の時代的な、又た或る階級的な變化と推移の爲めである。古代の文字の使用例に拘泥する人は、或は之を俳人の無學に歸するであらう。私達の仲間で、私達の信ずる詩の領域以外にある遊戯三昧の俳句及び詩を理解しない職業的俳人を「月並の俳句」「月並の俳人」として暗に輕蔑して來た、たゞ私達仲間だけの言語省略、文字省略の習慣が、「月次」の意味の「月並」を其の原語から全く別な「下劣」「卑俗」「遊戯」「鼻持のならないもの」「勘定づくのもの」など幾多の複雜な意味を象徴する言葉として享けとるやうにしてしまつた。つまり「月並」といふ簡單な言葉が、私達の複雜な意思を傳へる符牒としての利便に當て嵌つたのだ。私達もそれをいつ頃から言ひ馴れ、又書き馴れたかの記憶は漠然としてゐたのであつたが、二十六年一月の手紙に、別に新たな用語例ともなく殆んど無意識に使はれてゐるのを見ると、もう可なり私達の間には使ひ古された熟語であつたことがわかる。この言葉が、其後子規の俳句に歸依する

人々の間に傳播し、更に社會一般に押しひろげられて、明治の新語として迎へられる確定的のものとなつた。たゞ一語の「月並」ではある、が、其の傳播性はやがて子規の人格藝術、言ひかへれば子規宗そのもの、社會への浸潤性を標識するものと言つてもいゝのだ。「月並」といふ言葉の由來を知らない人も多からう、併し子規宗がどれほど隱れた力を明治文學の根柢に植ゑつけてゐるかを知らない人は更に多いことであらう。

十九　煙草の畑

明治二十五年十一月の事であつた。當時上級の五年生であつた私の、中學の全校生徒が、修學旅行として四五泊の旅行に出た。さうして宇和島まで行つた。この旅行は學校生徒の修學旅行でなくて、私一人にとつて最も記念すべき人生への第一歩の旅行であつた。私は始めて女性といふものゝ美しさを知つた。異性に對する憧憬に目ざめた。言はゞ、戀の發芽を體驗したのだつた。尤も僅かに二日間の滯在中、煙草屋の店さきで見初めたといふだけで、相手の意思などを突きとめる機會なども無つた、淡い呆氣ないローマンスではあつたが、私の印象は、外觀が平板なだけに內潜的な深みを持つてゐた。私はそれ以來物忘れしたかの樣なボンヤリした日を送る樣になつた。と同時に、總ての異性に對する感觸が一變した。植物の花の美しさを見るやうな女性の美しさの世界が眼前に展開した。私は其驚異に有頂天になつた。性の享樂がそれに伴なつてすぐには起らなかつた處女性の戀、詩的のラブ、さういふウブな恍惚と憧憬は、私

の初戀の生命だつた。けれどもそれはやがて性に荒む淫蕩の素地となつた。其の年十二月十九日の消印で、子規から左の手紙をうけとつた。

世の中とかくいそがしくて、うとくも送りぬるものかな、此頃は何とかしてくらし給ふらんと思ふものから、煙草屋の煙おぼろげにあとをとゞめて、つくり物語などものし給ふとやら聞え侍りしにいとうれしくなん、たゞ書きをはり給ふ日こそひたすらまたるゝ心地すれ、これにつきて思ひ出したる事侍り、さきつ頃大磯にいたつきを養ひゐたる頃しも、行李の底より大人だちのものし給ひし何とやらいふ詩文集を讀むがうちに、大人の石鐵詣となんいへる文を見て、こよなく其たくみなるに驚き侍り、此ちから此はたらきにてものし給はゞ、千言萬語もたちどころに成るべしと思ひしを、今まではことに紛れて打忘れ侍りしを、宇和島にての御話につきて思ひ出したれば、ついでに書きつくる也

ふぢの一家歸りしにつきては、うたひの道にはこよなきことなるべし、都にてもうたひやう〳〵にはやりもてゆきたらんやうに覺ゆ、小川長尾天岸はいふに及ばず、勝田も少しこゝろ

み侍るなり、小川等は寶生へ折々出かけんとて喜び侍り、又ふぢの〻歸る時には、よき便りなれば、わづかのものなりともおくりまつらんと、かねてより思ひしに、その折にはとりまぎれて打ち忘れたるは、我ながらあさましと思ふ許りなるを何とかわび侍らん、たゞ心のおくり物にて許し給ひてよ、發句の會はさきつ頃飄亭のもよほしにて、青山の龍岩寺に開きたり、其前のよはさる人に招かれて、本所の發句會に一夜をあかせしなど、いと盛なる事とぞ覺へ侍る、非風の發句集はほゞ出來上りて淸書にぞか〻りける
虛子は宿かへしよしいひこせしが、其文にはいづことも番地認めあらねば、こなたより文さしいださんよすがも侍らず、京都への文書き給ふついでにそのよしつたへ給はれかし
おのれ身の上につきては、をかしきこと少からず、聞かせまほしきこと多かれど、半は世の俗事なるがうるさければ省きつ。發句も此頃は足利時代のみしらべぬるもの故に、みづからつくるわざはおこたりつ。さればこれ見給へとて書いつくる句も侍らず。本意なき事にこそ

のぼるより

十二月十九日

碧梧桐詞伯へまゐる

月花にはげた頭や古頭巾

送別　この寒さ君に別るゝあしたより

（此の手紙は事實の史料になることが多い。「青山の龍岩寺」の會は、飄亭が徴兵適齢で入營した翌年の會で、同じブラ兵仲間の佐藤肋骨や仙田木同抔を語らつて開いた會だ。「さきつ頃」とあるから十一月の末か十二月の始めである。「其の前の夜はさる人に招かれて本所の發句會に一夜をあかせし」とあるのが、前に言つた椎の友の連中との初會で、本所の家は恐らく伊藤松宇方を指す。非風の句集といふのは、どういふ手違ひでか、現に私の所持してゐる當時のいろんな句會草稿などの中に交つて「寀山子集」と標題を置いた綴ぢ本がある、それを言ふのであらう。寀山子集は四季に分けられてゐるが、私の處には春夏秋の三册しか見出されない。季題分けにしたもので、當時の私ら仲間の句許りが蒐めてある。子規選の句集では、其後に國民新聞社から出た「新俳句」が最も古いものであるが、其前に既に句集發刊の計劃もあつたらしい。併し、この「寀山子集」は遂に出版されなかつた。それは前揭二十六年一月の手紙に「新海牛快復。昨今轉地療養也」とある通り、非風は當時肺を犯された重病に罹

つた爲め、計劃挫折したのかも知れない。

「おのれ身の上につきては」云々は、何とも考へられない。或は「日本」入社一件などであらう。」

この手紙を雅文體にしてゐるのは、前後に例のないことである。それとなく私の戀話をひやかして、心の中であざ笑つてゐる意味がほのめいてゐる。でなくば、私を一つの小說の主人公として見るやうな興味に唆られてゐる。尤も二十歲の冬に始めて異性の美に打たれた私の性的な目覺めは、雪國の花木が一時に迸發するやうな爆發性を帶びてゐたから、其の內在的な痛切味は、恐らく私以外の誰にも感銘し得られなかつたであらう。子規が興味を以て迎へ、心に冷笑してゐたのは、寧ろ第三者として當然の見方であつた。又た子規といふ人は、總ての戀愛に向つて、さういふ見方をする人でもあつた。この一事を以て歸納することは出來ないかも知れないが、子規の戀愛觀といふより異性觀と言つた方がいゝかも知れない對女性哲學は、多く在來の東洋的習慣に釀された信條を出てなかつたやうだ。在來の東洋的習慣といふのは、女性を

劣等視する、酷に言へば奴隷視する、一人格として認めない、そこに立脚する思想であつた。過度な勉强をして、不治の病を得ることは立派な名譽であつたが、女に惑溺して生業を失することは許すべからざる罪惡であつた。子規の聰明さは、さういふ東洋道德に囚れる事なしに、もつと人生の機微を洞察してゐたであらうが、私の經驗する處によると、女の問題に關しては常により冷かに見下す傾きをもつてゐた。當事者の心情を酌むよりも、先づ第三者として斷定を與へる心持が强かつた。櫻餠屋のお六に對する子規の初戀を、其後おくびに出さうともしなかつたのは、それを恥るよりも、むしろ自己を傷ける醜事として、跡方もなかつたものゝやうに抹殺してしまひたかつたのだ。古白が其の生命を賭した初戀の爲めに、手紙を書く字を習ひ始めた、といふ事實は、或る感激をもつて私達に話した事もあつたが、非風が永く情交を通じた玄人の女と家庭を持つやうになつた境遇に就いては、話すことすら喜んではゐなかつた。子規が異性を劣等視するから、子規に對異性の體驗が稀れであつたのか、それとも異性に對する體驗が稀れであつたから、自然冷酷に見くびつたのか、そは兎も角子規といふ人格に、或る情味に缺けた冷たい影の伴隨するのは、この對異性觀の一面が深く子規の心裡に根ざしてゐた爲

めでないかと思ふ。

拜啓其後御無沙汰、近頃日本新聞紙上文苑欄内に發句加入仕候處、我々仲間のもの近來秀句無之相困り候、大兄何卒御投寄奉願候、旭溪子へも御賴み被下度候

これは明治二十六年三月十八日の消印で來た端書である。子規派、日本派と言はれた俳句の發祥はこの時分のことであつた。(前にも旭溪子とあるが、之は私の中學友達で、遠山景澄と言つた。)

度々芳翰を辱うし拜誦仕候、先日中は神戸迄御出掛之由御愉快と存候、高濱は春休みにとて出京致し候、東海道をせらるゝ筈の貴兄は來られずして、思ひ掛なき虚子が來り候、これも春風の景物と存候、虚子の話にては、貴兄は去年の煙草の烟まだ消えやらで、折々恍惚と天人の姿拜ませ給ふよし、それに付て勇氣を失し勉強をやめ給ひしとか、果して然るや否や、

海山千里を隔てての噂なれば保證はできず候、兎に角御用心〱
竹村尊兄御結婚之由目出度候、其節小生の贈りたる句

島臺に梅も殘りて初櫻

貴兄は定めて名句を得られしならん
貴兄先日來度々芳吟御惠投被下難有候、が一向に振ひ不申候は如何

我宿は粥の薄きを鶯を
網代守時雨にうとく老にけり
卒爾にも死ぬる覺悟か雉の聲
居殘りて獨り火鉢に時雨ける
五つ子を酒の片荷や山櫻
繭の花や兎角花にはなりかねて
苗代と共にそだつる螢哉

等の名句實に貴兄獨得の長所として他に比なしとて、小生常に俳友に向つて誇稱せし所なる

に、近頃拜見の句は、一句として右等の句の片腕に足る者とても無之、甚だ失望致し候、先日虚子滯在中一會相催候ひしが、虚子中々にふるひ申候

猫の戀落花の雪に迷ひけり

菅笠の花ちる中を上り行

京女花に狂はぬ罪深し

等に御座候取りいそぎ候まゝあら〳〵かしく

四月十四日午前一時過　　子規

秉詞兄 几下

紅梅や萬歳ばかり烏帽子にて

燒跡の道になつたる柳哉

花咲て王子の森の黑さ哉

春日野の女くさゝよ花菫

よく見れば薄紫の蜆哉

面白や馬刀の居る穴居らぬ穴
春の日や蔵のひもの幾ゆるみ
春もはや蛙なく也手水鉢

御叱正可被下候

次で四月十四日の消印で來た手紙である。子規が私の不勉強を案ずる督勵的の師兄としての衷情は言外に滲み出てゐる。私はこの手紙に接して、これではならない、と人知れず昂奮的な悔恨を感じた事を覺えてゐる。異性の爲めに私の生活の大事なものが滅茶々々に破壞される戰慄に襲はれた事を忘れる事は出來ない。併しながら、今日第三者として見る時、不可抗とも言ふべき性的變革を來した私といふ者に對して、深く洞察しようとする明敏な透徹さを缺いてはならないだらうか。少年の當然ブツかるべき人生行路の第一の難關に思ひを潜める情味の抱擁的暖かさはどの文字からも響いて來ない。寧ろ子規は嘗て自分が試みたやうに、なぜ異性に對する雜念を早く振ひ落さないかを責めてゐるのだ。我々の究極の目的に到達する途中の障害は

事相の如何に關らず、總てを排除しようとするのだ。子規のやうに理性に勝つて、早く前途を見透して、大きな理想を抱いて、しかも尙ほ或る成果を握らうとする野心、それは人間として一番正しい、純潔無垢な、集中した精力の旺盛な寧ろ殉敎的と言つてもいゝ野心に向つて急いでゐる人の、當然採るべき批評的立場でもあつたのだ。

二十　果て知らずの記の旅

明治二十六年六月の半ば頃、子規は痼を病んで、しばらく病床の人となつた。痼がやつと落ちた時分に氣管支炎でも起しさうに咽を患つた。自分の肉體の缺陷、一度血を吐いた不治の病痾、それは忘れようとしても忘れることの出來ない刻みつけられた印象に惱んでゐた子規は、「かういふ時にどこかへ靜養に」といふ旅行癖を一層力強く主張し、ぢつとしてをれない者のやうに強調した。時間と金の有無は第二段の事として個々に持つてゐる生存慾を赤裸々にさらけ出すことが、子規にとつて正當な權利でもあり、又た心から愉快な衝動でもあつた。

よく治り次第、何處かへ行かう、今度は少し遠方へ行かう、松島邊まで行つて見たい、あれから芭蕉のあとを追つて奧州へ出るのもいゝ、仙臺にはAがゐる、あいつを驚かして鳴子溫泉あたりの山の溫泉にゆつくり浸らう、さぞ時鳥や鶯がやかましい位鳴くことだらう……、こんな空想を描いて、一人で旅行氣分を喫つた事も幾度だつたであらうか。

併しこれから暑中に向ふ際であり、病後ではあり、書生時代の強行軍は聊か謹むべきであらう、と言つて觀光團のやうな松島見物をするのも悧腹だ。變つた思ひつきで、人をあつと言はせなくとも、成程と首肯させるやうな方法はないものか、いつも同じことを繰り返す惰性に興味を持たない、さうして新らしい考案を生み出す理智に富んだ子規は、この旅行をどう仕生かすかに沒頭するのであつた。

新聞社の方でも旅費を補給することになつて、いよ〳〵堂々と旅行に出たのは七月十九日の朝であつた。子規の選んだ旅行の方法は、各地方に散在してゐる比較的有力な宗匠を訪問して、一つは俳句上の風交を求め、他は斯道の閑談に耽つて、旅行のつれ〴〵を慰めようといふのであつた。山水風雨を伴侶としての旅行以外に、多少の人間味を加へようとしたのが、今までの旅行と全く趣きを異にしてゐた點であつた。子規の考へでは、俳句上のそれまでの知識と理解と見聞は、斯道の古兵らしく考へられる宗匠輩を相手にしても遜色のない自信があつた。どういふ方面の話題を提供されても談じ負ける患ひはなかつた。彼等に勝たうといふのでもなければ、又た彼等から新らしい知識を得ようといふのでもなかつた。まして宗匠を我が道へ引き入

れようといふ感化を意味する企てゞもなかつた。宿屋にひとりつくねんとしてゐる時間を割いて、俳句につながる談敵を得る位の無雜作な無邪氣な出來心に過ぎなかつた。

それで子規は、少しは風采をつくつて行く必要にも迫られて、草鞋もはかず、脚絆もつけずおろし立てのデカばきの駒下駄に、裾を引きずつた袴といふ姿で首途したのだつた。子規が自らいふやうに「紳士旅行」の其の最初のものであり、又た其の最後のものでもあつた。

この旅行記は「はて知らずの記」と題して、新聞「日本」に連載された。上野をふり出しにして、始め松島を觀、廣瀨川を溯つて楯岡、大石田に出て、最上川を下つて酒田に泊、象潟を過ぎて北上し、本庄より秋田に入り大曲に行き湯田溫泉より黑澤尻に出て、水澤を一見して、八月二十日歸京したのであつた。

上野を立つた日に、子規はかねて紹介狀を貰つてゐた宇都宮の某宗匠を尋ねた。若しこの夜屋を震撼するやうな大雷雨が、鬱積した塵氣を一掃するのでなかつたら、子規は恐らく其の宗匠との對坐には堪へなかつたであらう。人間味にも藝術味にも、何ら觸れることのない、其の端坐作進退に四角張つた禮義を守つてゐなければならない、空虛な應對は、先づ子規のさほど

重きを置いてゐなかつた期待をさへうら切つた。倦怠そのもので終始した。其の翌日は須賀川に下車して、又た某宗匠を尋ねた。須賀川は芭蕉當時でさへ、等躬といふ俳人がゐて、軒の栗で有名になつた土地であつた。が、若輩に見えた子規は更らに齒ひせられなかつた。當時東京で有名な宗匠と言へば、金羅、幹雄、永機などであつたが、幹雄門にでも入つて、もつと勉强するといゝなどゝ頭から教訓を垂れるのみであつた。

この二夜の經驗で、子規は改めて自己を中心にした句の問題を考察せねばならなくなつた。今まで潛在的に懷抱してゐた藝術的の自己期待を、或る水平面から押し出したやうに一つの指標として見せつけられる氣がした。裏切られた苦痛と倦怠の重苦しい空氣の中に、新らしく芽生える自己の姿を見て、人知れず快感を喚ぶのでもあつた。

職業と遊戲の觀念に墮してゐる月並連中を見縊つてゐても、まだ斯道の先輩である、といふ因襲觀念が、子規の意識のどの邊かを支配してゐた。書生俳諧と謙讓していふ挨拶は、必ずしも禮儀上の空虛な言葉ではなかつた。併しこの二夜の經驗は、地方に宗匠を稱する人物の、人格識見のゼロであることを遺憾なく暴露してしまつた。子規の理解の朦朧として十分正確に摑

み得なかつた姿を、餘りにはつきりと些の陰影もなくむき出しにした。子規が其の淺薄さと無能さを直覺した事は、同時に自己の詩的立場を明白ならしめる所以であつた。子規は尙ほ旅行をつゞけながら、頭はこの問題で一杯になつてゐた。

社會的に或る野心を持つてゐた子規としては、單り自己の詩的立場を明白ならしめるのみに落着いてはをれなかつたであらう。芭蕉の創造した幽玄靜寂の世界、少くも不易流行の門を體得したと自信する子規が、彼ら淺薄無能の宗匠輩に蹂躪されてゐる俳句の眞髓を、其のまゝ傍觀して過ごさうとは想像されないのだ。子規が俳句を宗匠輩の手からもぎ取つて、其の正しい道の上に歩ませようとした發心の動機は、言ふまでもなく複雜な心理に萠してゐる。併しながら、之を明白に自己に意識し、又た社會的に呼號しようとした最も手近い因由は、この果て知らずの旅行の首途であつたことを、强ち拒否し得ないであらう。

初めは無雜作に考へたことが、結果に於て可なり重大な意味を持つやうになつた。世の中の事でさういふ例は必ずしも珍らしいとするに足らぬ。

この旅行に出かける前に、私宛に左の端書が來た——明治二十六年六月二十九日附——

度々御書面拜見仕候へども、實はいつ御返事致せしやら不分候次第御容恕被下度候、實は小生本月十日頃より臥褥に打過候（肺に非ず痔也）故、どこともへ御無沙汰、いづれ快方之後は早々松島地方へ出掛るつもり、其節ゆる〳〵御返事可仕候匆々

次で七月二十三日郡山消印の左の書狀が來た。

拜啓仕候、幾度か芳翰拜見致候とは存候へども、病中又は病後にて御返事も致さずと存候ひらに御詑申上候、高濱若し歸郷候はゞ小生の事大方御聞取と存候（先日高濱へ一書差出置候故）約言すれば痔落ちて身體衰へそこへ少々の氣管支炎に惱まされ候次第に候、最早醫師に許れて去る十九日東京出立、紀行はいづれ新聞に載せ候故それにて御覽被下度候

此頃は小川天岸共歸郷なれば、藤野の家などは一寸位傾き候事と存候

小生此度の旅行は地方俳諧師の門を尋ねて旅路のうさをはらす覺悟にて、東京宗匠之紹介を受け、已に今日迄に二人おとづれ候へども、實以て恐れ入つたる次第にて、何とも申樣なく、

前途茫茫最早宗匠訪問をやめんかとも存候程に御座候、俳諧の話しても到底聞き分ける事もできぬ故、つまり何の話もなく、ありふれた新聞噺どこにても同じ事らしく候、其癖小生の年若きを見て大に輕蔑し、ある人は是非みき雄門にはいれと申候故少々不平に存候處、他の奴に頭から取りあはぬ樣子も相見え申候、まだ此後どんなやつにあふかもしれずと恐怖之至に候、此熱いのに御行儀に坐りて、頭ばかり下げてゐなければならぬといふも面白からぬ事に候、せめてはこれらの人々に、内藤翁の熱心の百分一をわけてやり度候、半紳士半行脚之覺悟故氣樂なれども、面白き事は第一、名句は一句とてもできぬに困り候、小生は今日に於てたの一語を明言致し申候、名句は菅笠を被り草鞋を著けて世に生るゝものなり

先は大略惡旅店之腹立ちまぎれにしるす

七月二十一日　　　　　　　　　　　　子規子拜

梧桐伯
梧樓子　足下

多少は新聞へのせ候得どもさしあたり拙句數首

夏木立宮ありさうな處哉

我部屋は茶代も出さぬあつさ哉

山史の桑に晝顏あはれ也

夏川や馬つなぎたる橋柱

掛茶屋は盧生に似たるひるね哉

狂句多けれどもうその句は無之候、紀行と思召被下度候

最後に得意の一句、田舍傾城贊、夕顏に昔の小歌あはれ也

七月二十一日は、旅に出た第三日目であつた。郡山の宿屋が、この未來の大詩人を知らなかつた冷遇ぶりに三日間の不平を爆發させて、せめて胸中の欝を散じようとした跡が歴々として見える。「名句とは」の格言めいた一語も、小學生の作文式な嫌ひはあるが、昂奮した感情を極端に言ひ表はさうとして、態と特異な形式を採つたのであらう。

子規はこの次の夜、本宮在南杉田の遠藤菓翁を訪うて「氏は剛毅にして粗糲に失せず樸訥にして識見あり我れ十室の邑に斯人を得たり」と書いてゐる。始めて談敵を得た喜びは、其の文

外に溢れてゐる。この菓翁は後に明治三十九年私が全國行脚を志した時も、態々人を派して私を共の隱栖に誘ひ、十餘年の昔話をしてくれたことがある。

菓翁との對談を最終として、共後子規は宗匠訪問を斷念してしまつた。恐らくは空疎な醜惡な對人關係で對山水關係の清淨な充實した詩境を攪亂されることを忌避したのであらう。松島の觀瀾亭に行つた時の感想は、この旅中の不平不滿が近因を爲して、やゝ誇大に失するかとも思はれる程、子規自身の懷抱を物語つてゐる。

吾一介の窮措大固より朔を横へて千軍萬馬を走らするの勇無く、手を拱して一州一郡を治むるの能なしと雖も共意氣昂然たる處に於て豈敢て人に讓らんや。況んや風月の權に至りては大明を驚かし羅馬を嚇するの手段を以て猶且つ之を一書生の手より奪ふべからざるをや――はて知らずの記――

豐太閤と伊達政宗を向ふに廻して大見えを切つてゐる處に、子規の若さの血の脈々と浪打つてゐるのを感ずる。固より漫然として芭蕉の後塵を拜する松島耽美の俳諧者流では無つた。

二十一　吉田のしぐれ

明治二十六年の九月には、私も中學を了へて京都の第三高等中學に來てゐた。學校のすぐ前にあつた靴屋の二階に間借りをして虛子と同棲した。

この四月の春休みに一寸上京してあちこちの句會などに出た虛子は、もう中學時代の虛子とは殆んど一變してゐた。酒も飲めば女の話もする。殊に學校で用もない課目を習ふ割り當て學問を嫌つて、もつと自由な學校へはいりたい、などゝ言つてゐた。昔の寡默從順な聖人は、醉つて氣焰を吐く未來の大文學者氣取りの覇氣橫溢な青年になつてゐた。それまでは私の方が兄顏をして、何でも文章でも一步を先んじてゐるやうな氣もしてゐたが、自由で大膽で才氣煥發する此頃の虛子の前には、何となく主客轉倒したやうな暗示を與へられるのだつた。つまり今まで家庭の溫かな籠の鳥であつた彼が、籠から放たれた大氣と曠野に翺翔する愉悅に躍りあがつてゐたのだ。

其頃同級程度の同目的の幾人かゞ寄り合つて無聲會といふ會を作つてゐた。毎月廻覧雜誌を出したりした。何か深く思ひ込んでゐた虚子は二十六年の冬休みから學校をやめて上京する事に決した。其の送別の爲めに無聲會で寫眞を撮つたのが、今でも遺つてゐるが、紙捻の紐でとめた木綿羽織を着た虚子の傲然として總てを見下してゐるやうな氣慨は、其の眉宇の間にもほのめいてゐる。三高入學當時私達の保證人であつた栗生氏の細君は、其の寫眞を見て、虚子の態度容姿の變り方に驚いてゐた。虚子退學の報は、同じ國から出てゐた同じクラスの誰をも呆然たらしめた。「へえ、きよさんが……」とは一樣に發した嘆聲だつた。

虚子のこの退學は、言ふまでもなくもつと自由な勉强をする意味に外ならなかつたのであるから、其の斷行の意味を理解し、其の前途を祝福したのは、恐らく私一人であつたであらう。私はそれを羨望するといふよりもむしろそれほどの自信と決斷を持たなかつた自分を恥ぢた。のみならず、上京した虚子はトン〳〵拍子に文學者の仲間入りをして、其の製作が世間に持て囃される凱歌を揚ぐる聲をも夢幻の間に聞いた。さうして、自分はいつまでもコツ〳〵高等中學、大學と重箱詰めの生活を送らねばならないのか、と一人とり殘された神樂丘の冬木の空を

眺めて、不甲斐ない孤獨の淋しさを味つてゐた。

そは兎に角、この冬除隊になつた飄亭がゆくりなく私達の下宿を驚かした。私達の下宿を、「虚桐庵」などゝ言つてゐた其の二階で、飄亭歡迎の句會を開いた。十二月六日、九日の二回開いた。其の原稿に飄亭が「吉田のしぐれ」「二度のしぐれ」と題してゐる二卷が、私の手元にある。

三高の校友會雜誌に、それまで私達の句や俳論めいたものを投じたこともあつて、一二俳句の話などを聞きに來た人もあつたが、それらの人々が一堂に會して、句會らしい會合をしたのは、この「吉田のしぐれ」が其の最初であつた。且つ又た東京の子規のお膝下でなく、地方で子規派の句會の催されたのも恐らく「吉田のしぐれ」を嚆矢とするであらう。飄亭の入洛は、たゞ舊知であつた私達を驚かす私交の一卽興に過ぎなかつたが、子規の事業、其の公的發展の一過程として、潜在的に可なり重大な意義を持つてゐやうとは誰が想像したであらうか。この會合が因をなして、やがて二三年の中に、京阪滿月會の旗上げを見るやうな結果を見ようとは誰が推想し得たであらうか。

「吉田のしぐれ」の第一日には、秋竹、鳥寸、岐山、蟻白などいふ人達が私達三人以外に寄つてゐる。秋竹（姓竹村、名修、文學士、大正八年頃歿）は故郷の同窓であつたが、其の他の人は姓名存否をも今審にせぬ。第二日は私達三人に鳥寸を加へた四人であつた。寒川鼠骨、大谷繞石、阪本四方太なども前後して我々仲間に投じたのであるが、この時にはまだ加つてゐない。中川四明、相島虚吼、水落露石などの京阪に名のりを揚げたのは更らに三五年後の事であらう。

當時の運座でどんな句を作つてゐるか、一二の作例を「吉田のしぐれ」二巻からこゝに抜萃して置く。

まかり出るこれは近處の鉢叩　　瓢亭

雪佛さま〴〵にとけてしまひけり　　同

あの島へ水鳥ふはり〳〵哉　　同

畑人の名所としらでしぐれけり　　同

蠣殼のまがき寒けくさす日哉　　同

籾すりのそこにちらほら落葉哉　鳥寸

しぐるゝや八瀬の荷馬のなきそろふ　同

三ツ四ツは若く見せけり頭巾すがた　秋竹

冬木立屋根のくづれもあらはなり　岐山

頭巾着てことしのくれを八瀬の里　蟻白

鉢叩けふは東寺にしぐれけり　虚子

湯婆の都の夢のほの〴〵と　同

炭賣りの片荷夕日に賣れ殘る　同

しぐれ來や牡蠣むく家の薄明り　同

水鳥の鳴く時城の夕日かな　碧梧桐

木曾ひくし落葉する山しぐる山　同

砂の中に海鼠の凍る小さゝよ　同

阪本の初冬白き湖水かな　同

二十二　寫　生

子規の藝術的モットーは、殆んど寫生で終始したと言つてもいゝほど、有りの儘の自然を尊重する觀念で一杯であつた。寫生といふ意味、寫生といふ言葉、それは恐らく油畫の齎らした繪畫上の新たな傾向にヒントを得、且つ其の用語をも踏襲したに過ぎなかつた。であるから、寫生といふ簡單な言葉は、時と場合によつていろんな意味を持つてゐた。俳句が芭蕉の幽玄味を曲解して、淺薄な主觀に拘束されたが爲めに月並に墮して往つた其の反動としての寫生は、主觀化に對する客觀化を意味してゐた。江戸文學が文字の遊戯に沒頭して、眞の事相に徹しようとしない上すべりな洒落や皮肉への反動としての寫生は、ウキツトに對する眞實性を主張してゐた。和歌の萬葉集を推稱して、古今集以下を月並であると罵倒し、漢詩の唐詩選までを擧げて、宋以後の詩は文字の技巧であると喝破した、寫生に立脚する批判の意味は技巧に對する内容論であつた。一般的なヒューマニティを甘い卑俗なアイデアリズムとして輕蔑し、超人間

的な解脱と悟入を現實に求めようとしたリアリストとしての寫生觀は、藝術の情趣化に對する思想化でもあつた。

尤も子規が、かやうに複雜な意味を持つ寫生の意義を十分自己に體得して、藝術的の命の綱を摑んだのは、日清戰爭に從軍した後の事であつて、其の肉體が病魔に釘づけにされるのと反比例に、寫生論を高潮して往つたのだつた。自然其の芽生時代にあたる明治二十五六年頃にはまだ左樣に確乎とした根柢は据つてゐなかつた。のみならず、其の多くの製作が示すやうに、議論では月並として排除する卑俗な思ひつき、頓智の舊習に累ひされてゐた。過渡的現象として、已むを得なかつたでもあらうが、併し七部集を通しての芭蕉の不易流行論を翫味し、中興五傑集によつて安永天明の復興の意義を讀み得たと信ずる子規は、早く虛僞を排して眞實に立脚する自覺めを感じてゐた。前掲の手紙に「名句は菅笠を被り草鞋を著けて」とあるのも、單に名句に苦勞の伴なふものである事を意味するのでなくて、痛切にしんみりと自然の山水に親む境地を指示してゐるのであり、「狂句多けれどもうその句は無之候」といふのも、同じ意味を敷衍して、實景實境に立たうとする用意を物語つてゐるのである。子規は自己の信ずる道を陰

薇するやうな卑怯者ではなかつた。私達仲間の後輩に對しては、殊に其の自信を强制的に植ゑつけようともした。自然の感化では滿足しないで、無理にも理解せしめる教化の斧鉞をさへ屢揮つた。私達が月並の月並たる主觀化から脫する客觀化の意味を敎へられたことも幾度であつたであらうか。

この「吉田のしぐれ」の時飄亭を案内して、一二日東山方面から嵐山あたりまでを散步した。京都の初冬の空は高く澄みきつて、地には濃い霜が下りてゐた。飄亭は、見るもの聞くものを珍らしがつて、郵便配達がノロ〳〵步いてゐると言つて笑つた。梅畑の婆さんの紺の前掛がいゝと嬉しがつた。さうして十步に一句、二十步に一句を吐いた。それが皆事實ありのまゝの敍事であつて、さうしてちやアんた一句にまとまつてゐた。さすがに京は何でも句になると言つて豪傑笑ひをした。私は其の豪傑笑ひの尾について空虛な笑ひ聲を立てながら、其の盡きない句作に心から驚かされてしまつた。平生見なれ聞なれてゐたものが、飄亭の句によつて美化されて行く輝かしい世界に幻惑されてしまつた。

私は何よりもこの時始めて寫生の意義を明かに體得したことを感謝せねばならなかつた。人

の見ないものを探つたり、滅多に氣づかないものを見つけることが寫生の眞意義ではないのだ、といふ抽象論を具體化した詩人飄亭を心から渇仰せねばならなかつた。

其の後間もなく冬休みになつて、私は神戸の中兄の家族が歸鄕する留守を預かる事になつた。大三十日に迫つて、女中が無斷で家出した爲め、新年かけて十日ほど自炊の已むない境涯にゐた。其の時「冬籠」と題する句作日記のやうなものをこしらへて、後に子規から「この冬の籠居貫兄第一なり」などゝ譽められたこともあつたが、其の時の句作は總て飄亭にヒントを得た日常些事の十七字化であつた。

飄亭の京での十歩吟は、今悉く記憶に存しないが、私の「冬籠」の原稿は尙ほ保存されてゐる。——其の原稿を第一著に飄亭に見せたと見えて、飄亭の朱引の批評が加へられてゐる——。

冬ごもり飯焚くひまを謡かな　　碧梧桐

物うくて二食になりぬ冬籠　　同

米倉に鼠音すなり冬籠　　同

冬籠粥を焚きつゝ夜に入りぬ　　同

冬籠米洗はゞや芋きらばや　　　同

こんな句が三四十行列してゐる。さうして「以下悉く即景」などゝ斷つたりしてゐる。今日の藝術論から言へば、單純で平易で、又た餘りに幼稚であるが、俳句が月並化した卑近なアイデアリズムから脱却しようとする反動的第一歩の主張としては、幼稚な寫生論も時代を區劃する重大な意味を齎らしたのだつた。子規が後年大上段に振りかざした寫生論のだんびらも、既にこの時分から使ひ馴れてゐたことを物語つてゐるのだつた。

二十三　一高退學

明治二十七年は私一個人にとつて、いろんな事件の起伏した、落着かない騷がしい年だつた。二月には子規から殆んど突然に「小日本」の見本を數百部も郵送されて、それをどう處分しようかに戸惑ひしたりした。已むなく學校の生徒控席の掲示版に貼り出して、誰でも取るに任せたりした。子規が「小日本」を創刊するに就いて、どれほど日夜氣苦勞してゐたか、それをさへ想見する豫備知識を私は持たなかつた。たゞ多年の宿題になつてゐた「月の都」が其の第一號から發表されたことが、私の胸を躍らせた位だつた。「小日本」は氣の利いた、挿畫の多い、調子の高い賑やかな新聞だつた、と古い記憶を持つてゐる人は、今でも口をそろへてさういふ。アヽいふ調子の新聞が此頃創刊されたのであつたら、必ず成功したであらうともいふ。私はさういふ批判を明らかに下すほど、新聞に對する感興も持つてゐなかつた。私は新聞「日本」を講讀しながら政治論などには一度も目を通さなかつた。子規の隨筆と俳句欄を見るのみで滿足

してゐたのだ。
四月の末には急病で父を失なつた。其の爲め歸鄕して、やつと學期試驗に入洛した。學期試驗中の試驗勉强に草臥れて、ぐつすり寢込んでゐた蚊帳の中に、意外にもこの一月から上京中であつた虛子を迎へる唐突な出來事があつた。
「お前、どうしたんぞな。
「もうやめて來たのよ。
「やめて？
「思ふやうな學問するところは東京にもないな。
「ヘエ！
私は彼の突然な轉身を、たゞ驚きの限で迎へたきりだつた。虛子は上京中殆んど何もしなかつた。少々遊蕩氣分を味つた位だつた。それで復校して、又た窮宿な重詰學課をやると言つた。
學期試驗が終るのと同時に、第三高等中學は解散されて、生徒は各地に四散せねばならない

運命になつた。復校を許された虚子は、私と同期生で、文科の本科一年生になつたのであるが、私達は仙臺の二高移轉を志願して許可された。熊本に行くか、金澤に行くか、若くは鹿兒島に行くかゞ順當なのであつたが、私達はたゞ東京を通過するといふ點だけで仙臺を志願したのだつた。

仙臺の二高は、選りに選つて私達の意思に反する校風のギゴチなさで一杯だつた。三高時代の生徒の自由が極度に束縛されてゐた。

文科の本科生も、小學校生徒同樣に取扱はれてゐた。裏切られた私達は、毎日氣まづい、重苦しい日を送つた。毎晩蒸菓を買つて來ては、それを二人で剝ぎながら、文學論、人間論、小說家論、現代の小說家評論などで僅かに鬱を散じてゐた。廣瀨川を下に臨む公園を夜半に散歩しては、虚子の燈火觀などをしみ〴〵聞き味ふのだつた。かくて二年もこの校風に縛られねばならない月日を無限に永いもののやうに思ひなして、今度は私の方が退校論を高調した。復校して間もない虚子は、理性では幾分鈍つてゐたが、感情ではすつかり私に共鳴した。それで二高在學僅かに二ケ月で、斷然學校と緣を絕つた。

十一月末日のうら寒い日に、私は一人で松島見物などをして上京した。

それまで子規は新聞事業で多忙であつたし、私はいろんな身邊の事實に追はれて、手紙の往復も殆んど絕えてゐた。たゞ二高入學當時、東京で親しく子規の謦咳に接したのみだつたが、この退學事件に就いては子規も默止し難かつたと見え、左の一書を久しぶりにくれた。子規が仙臺の下宿――大町通五丁目新町七、鈴木芳吉方――宛によこした手紙で、遺つてゐる唯一のものである。

碧梧桐詞兄　几下

子　規　拜

御手紙拜見仕候、益々御清勝奉賀候、御申越之趣にていよ〳〵學校御退學と御決定被成候由誠にめでたく存候、それ位之御決心なくては小說家には迚もなれ申まじく天ッ張れ見上げたる御事かなと祝ひ申候、虛子君の復校せられてよりまだ半年も立たぬ内に、又々貴兄の退校とはよく〳〵入組んだ仕掛にて天公の戯謔も亦おもしろく候（以上世界觀）

然れども小生一個より見れば矢張退校之事は御とめ申候、殷鑒遠からず虛子兄にありと存候、

學校をやめる事がなぜ小説家になれるか一向分らぬ様に思はれ候、學校をやめて何となさる御積りか定めて獨學とか何とかいはるゝならん、なれども獨學の難きは虚子兄之熟知せらる所に候へば同兄より御聞取り成さるべく候、況んや家郷と縁を斷ちても遣りとげんとの御の決定由、萬一貴兄獨立して渡世せねばならぬ様になりし曉には何となされ候ぞ「たゞ一人の糊口なればそれにてよろしき事と思ひ居候」との御詞は已に世の中を御存知なき證據なり、只一人の糊口を何とし遂げ給ふぞ、よし糊口の道あるにせよそれは非常の困難と勞力とを要する仕事にて、つまり小説書くひまなんどは無く、矢ッ張り中學にぶら〳〵してをつて、相間〳〵にむだ書して居た方が餘程ましだつたといふやうな事にはならぬかと存候、つまり貴兄の退校は先日の虚子兄と同じく學校がいやといふ一點より湧き出した考にて、學校を出て後始めて學校の極樂場たるを知るの愚を學び給はぬかと推察致候

それよりもこゝに尤もをかしきは御書中「これ實に小子の身に於て最大激變なり」など、書き立て給ひし事なり、貴兄自身に於て最大激變と思ひ給ふ程ならば、先づ學校はやめぬ方がよきかと存候、人間世界で最大激變といふ事は總て善からぬ事に候、自分之事いふでなけれ

ど小生の退學せし時抔は、小生自身に取りては毫も變動なかりし事にて、一週間に一度位登校せしものが其義務を免れし位之者にて候ひき、鷺は立てども後を濁さずとか、退學するにしても先づ此學期だけは試驗をすまし、冬期休業には一旦御上京なさるべく御面會致候上縷縷可申上候（以上個人觀）　十月二十九日夜獺祭書屋燈下に認む

この手紙では退學を相談してやつた返事のやうであるが、この時は既に萬事を決行してゐた後だつた。虚子も同時に退學したのだつたが、子規の手前を氣がねして、たゞ私一人の問題のやうに繕つてゐたのだつた。

虚子は退學攻擊の鉾先きを避ける爲めであつたであらう、尚ほしばらく仙臺に留まつてゐた。

「のぼさん、おこつといでるな」と二人で話し合つた心の中は息のつまるやうな暗さだつた。「よく退學おしたな」と讚められようとも豫期してはゐなかつたのであるが、かう冷靜に眞向ふからドヤしつけられやうとも考へてゐなかつたのだつた。

それでも同じクラスの人達が二人の送別會を開いてくれた時には、今日から社會の自由大學

て奮闘して、必ず素志を達して見せる、と言つたやうな氣焰を吐いて、私は何か留別の句を席上で讀み上げたりした。

二十四　暗澹たる首途

仙臺での私達二人の下宿は、風呂屋の離れ座敷であつた。庭といふほどのものでもなかつたが、緣側に少しの空地があつて、杖にでもなりさうな大きな萩が屋根の高さに立つてゐた。枝垂れた枝からこぼれおちる花を、庭の出入りに踏む例だつた。二高在學は、この萩の花と一處に終始して、もう散りこぼれる花もなくなつた時分に、仙臺を去つたのだつた。學校の日課に飽いて、重く寂しい氣分に囚はれながら、下宿に歸つて來ると、陸奥の高晴れと言つた輝かしい秋の日に照らされた紫の鮮やかな萩の花が、いつも新たな盛りの姿を見せてくれた。重く寂しい氣分が、輕く晴れやかになつた。學校の道具を投げ出して、緣側に腰かけながら、しばらく無關心のやうに、梢高い萩に眺め入つた。

一體學校の課目で、興味を持つて聽く講義は何だらう?　今日興味はなくとも、それが他日何らかの役に立つものといふのは何?　尤も學者になるつもりで、大學迄の課程を修得しなけ

ればならない必要でもあるなら、今日のいやな課目も、生徒といふものに課せられた一つの負擔、又は義務として、目をつぶつて通過し得る場合もあらう。併し我々創作を念とする文學志望の者が、自分と全然沒交渉な課目、無味索寞な講義に束縛されねばならない所以は毛頭ない筈だ。酒好きに餅を强ひるといふよりか、哺乳動物に爬虫類の食物を與へるのと一樣だ。いくら食つて見たところで、血にも肉にもならないではないか。文學者に必要なのは空な學問よりも、實際の經驗である。人間苦、世間苦の體驗である。今後五六年の間、空な學問に縛られることは、時間の上から言つて不經濟である許りか、强ひて口に合はないものを鵜呑みにしなければならない全くの徒勞である。且つ今日の五六年の日子は、老後の五六年に比して、より多く重大な意義を持つ時間である。之を學校で無爲に過ごすことは、自己に忠なる所以ではない一時は父母兄弟朋友に背かうとも、他日文學者として大成すれば、其の罪を償ひ得ることは明らかなことだ。改めていふことでもないが、昔からの文豪と言はれる人で、正式に大學を卒業した者が幾人あるであらう。手近い例を言つても、我々の崇拜する露伴が、どこの學校を卒業した肩書を持つてゐるといふのだらう。露伴の文章に犯し難い高さと深みのあるのも、決して

學問のお蔭ではない、たゞ經驗の賜物である。經驗と言へば、我々のやうな世間見ず――ウブなお坊ちやんで育つて來た――が五六年を學校で空費して、それで何程の經驗を收め得るのだらう。無事に文學士といふ肩書を持つ事が、我々の志望に何の糧を供するものとなるのであらう。

萩のほろ〳〵こぼれる花を見ると、それが未來を暗示するものゝやうに、自分の現在に慊らない感想がそれからそれと湧くのだつた。さうして自分に都合のいゝ理由や解釋を探し求めるのだつた。

この將來に對する煩悶といふよりも、寧ろ文學に對する一種の憧憬、言葉をかへて言へば、文學に對して多少の自信を持つてゐた自己信頼は、學校の日課などをそつちのけにして、旺盛な創作氣分を湧き立たせた。學校の教科書に、鉛筆でメモを書くことを許さない、と言つた獨逸語の本などは、反古の下積みにして、筆に紙にひたすら練想彫文の燈火に親んだ。

酒を飲み、女を買ふこと位は萬更知らなかつたのでも無かつたが、仙臺といふ見ず知らずの土地では、まだ勝手もわからなかつた。で、毎晩蒸菓を買つて來ては、筆を執るひまに放談高

論もしてゐた。眞に未來の大文豪を夢想する精進な態度であり、又た純な氣分でもあつた。阪本四方太や大谷繞石が、文學談や俳句談をしに來たのは、この風呂屋の裏座敷だつたと記憶する。

私は第三高等中學時代に、校友會雜誌に俳句論を書いた、と前にも言つたが、其の一つは、俳句滅亡論で、五七五といふ調子に囚はれてゐる音律詩は、數學のパーミテーションでさへ割り出し得る有限の形式であり其の生命は限られた或る範圍のものである、と言つたやうなものだつた。この議論が、當時の校友會誌編輯當事者だつた佐々醒雪―文學士、亡―等の問題になつて、一二度反駁論を交したこともあつた。一方にそんな考へもあつた爲めであらう、仙臺時代は殆んど俳句のことなんか忘れたやうになつてゐた。俳句のやうな狹い形式に縛られるのは愚だ、とも考へてゐた。小說でなければ夜も日もあけなかつた。小說を戀する若い二十二歲の血汐は、異性を追求するやうに、盲目的に波立つてゐたのだ。

小說を戀する他の事由も一つあつた。それは子規の「月の都」が、私達の問題にした程のものでは無つた、といふ子規の創作に對する私達の幻滅的な失望だつた。子規に向つて、直接「月

の都」を評論したやうにも覺えず、又た其の話が出ても、通り一遍のお世辭位で通過したのであるが、心の中では、子規平生の主張自信の裏切られた、淋しいやるせなさに堪へなかつた。あれは寧ろ發表しなかつた方がよかつたとも思つた。逐に露伴の敵ではないとも思つた。さうして胸のずつとの奥の方に、あの程度のものなら……と言つた驕傲な自信も芽ぐんでゐた。

「子規書簡集」に當時虛子と私に宛て書信がある。

拜復時下寒冷に相向ひ候處御清榮御起居可被成奉賀候、小子亦無事罷在候乍憚御放慮是祈

小説熱上騰名作しきりに生れ候由見たきものに候、小子相變らず俳句三昧に日をくらし申候、小説氣なきにはあらねど、當職ある身は思ひつき難く打ちやりたるありさまに候（中略）

屹然として立つと云ふ事碧梧桐兄より御辯解これあり了承致候

（一）寢て居るものに立てよといふいふもの〻明なり

（二）立て居るものに立てよといふいふもの〻愚なり

（三）寢て居るもの〻自ら立ち居ると思ふは思ふもの〻愚なり

貴兄は自ら第二なりとの仰なれば何より結構に候屹然と立つといふ事固より深意あるにあら

ず、己が心中に何となく屹然とする處あらば是れ屹然たるなり、只小生が貴兄等の年齢に於て始めて大地を踏みしめし如き心地いたし候故試みに一言こゝに及びしのみの事に候（以下略）

これは十月二十五日附の封書であるから、私達は、もう二高退學を決するに間もない時だつた。子規自ら「貴兄等の年齢に於て始めて大地を踏みしめし如き心地いたし」と其の心的目覺めの機微を漏らしてゐるのも、見のがし難い子規自叙傳の一句ではあるが、これによつて如何に私達が小説熱にとりつかれてゐたか、とりつかれるといふよりも有頂天になつて浮かれてゐたかゞ想像される。私達の力の程度を洞察してゐた子規は、側面から「屹然として立つ」問題を提供して、それとなく夢遊的な青年病を覺醒するつもりであつたのであらうが、それは「立つてゐるものに立てよといふ」類であると、寧ろ反抗的な氣勢をさへ昂らしてゐたのだつた。

次ぎに前掲十月二十九日附の、私の退學に關する世界觀個人觀を書いた手紙が來た。若し私達がもつと老巧であつたら、此際子規に向つて當時の創作などを見せようとはしなかつたであらうが、小説熱に浮れてゐた忘我の得意さで、特に自信のあるといふのでもなかつた草稿を送つてしまつた。子規としては「屹然として立つ」問題以來引きつゞいて、反子規熱を豫感せし

めるやうな出來事であつたから、恐らく一種の面あてとも享けとつたてあらう。子規の怒りは「のぼさんおこつといでるな」と呑氣に噂さするやうなものではなかつた。矢つぎ早やに十一月二日附の其の怒りを想像せしめる長い手紙が來た。――子規書簡集より――

虚子兄　足下

貴著小說一篇拜讀、文章は思ひの外に御上達面白き事限りなく候、趣向の方は小說でも何でもなく候、貴兄はどこに美といふ事があると御思ひ被成候哉、樂屋落は美にあらず剽竊は美にあらず陳腐は美にあらず、扨美の在所を見出すに苦み申候、是非直せと被仰候へば試みに雌黃を施し申すべけれども、それは只文章の上のみの事なれば何の役にも立ち申さず、何として善きものやら一應御伺申上候

碧梧桐兄　足下

御教示の小說拜見仕候今夜到着致候故、先づ卷を開きて讀かけ候處どうやらこれも樂屋落臭くは思ひ候へ共、樂屋落も隨分仲間にはおもしろきものと讀み〳〵て第四回の終りに至り候まゝ、本を投げ出して二度と手にとる氣はなく候、第一文章の拙さ加減はこれでもあの碧梧

桐君の作かと思ふ許りなれど、それもそれとして置て扨趣向はといふと全體は知らず、第四回までの所は虚子兄のと一般小說の小の字も見え申さず候、議論は美でなく獨合點は美でなし、いやにくどくしつこくうるさく油こき裝飾（文章）を被りたる感情は少しも面白きものには無之候、俳句の上で考へて見ても天然物を下手な擬人法にした程いやな物のない事は萬々御承知と存候、之れと同じ事で人事を下手な擬物法にしたのは尤もいやなものに御座候、此度の御著作は頭から厭味といふ事許りにてかたまりたるものと被思候、何分後回讀み兼候故今度御目にかゝり候事あらば其節御話聞きながら一讀可致候、それとも後は面白いから是非讀めとの御指命ならば讀み可申候、依て右伺書差上申上候何分御指命を仰候

畢竟するに小生が今度の兩兄の作を見て非常に其拙に驚きしものは、所謂三日不見刮目して俟つべしとの金言を守りしものにして、兩兄近來小說御熱心との報は度々耳に致し居候ひし故、定めて驚天動地の大作ならんと存じ居候ひき、然るに虚子兄の作は趣向淺く碧梧兄のは文章最も拙し、豈失望せざらんと欲するも得んや、小生これまで兩兄の文章に於て趣向に於て度々褒辭を呈し候事ありしと覺え候、それは兩兄を以て一人前の文學者と見てほめたるも

のには無之、只普通學に束縛せらるゝ書生が、課餘にものする文章小說俳句としていたく賞讃したるなり、今や兩兄ともに志す所ありて高等中學を退學し一個の十九世紀文學者たらんと欲す、小生は兩兄に對して更に注文すべきもの多し、若し兩兄が今迄に作り給ひし文章俳句小說之を文學者の作として見んか、平凡ならざれば陳腐、幼稚ならざれば佶据、殆んど見るに足るべきものなきなり、知らず兩兄は自ら以て足れりとなすか、固より足れりと思ひ給はじ、さればこれより何として修業せらるゝか、貴書によれば最早獨學といふが如き迂策は取り給はぬやうなり、されば兩兄は最早學識に於て文章に於て古人の知識を借るに及ばずとせらるゝもの如し、小生は兩兄に向つて實に危險に堪へざるものあり、兩兄は今迄に收め得し文字と智識とを以て、今世の斗筲輩はいふに足らず、古來の大豪傑迄を壓倒せんとし給ふか、其大膽には敬服すれども其の自ら力を揣らざるに驚かざるを得ず、只恐る群盲を壓殺せんとて兩兄が目より高くさし上げ給へる大石は、存外に重くして他を壓するよりも先きに己れを壓するの不幸を見ん事を

これは直接に學問より得べきものならねども、兩兄が美といふ觀念に乏しきは今度始めて之

を知り申候、今日の平凡小說家と雖も美の觀念に至りては、或は兩兄の上數等にあるやを疑ひ申候、小生の經歷は總てに於て遲々たる進步をなしたり、殊に兩兄等に比すれば萬事三四年の差あり、小生が兩兄年代に於ては俳句でも文章でも實に幼稚にして愧死に堪へず、兩兄の想像も及ばずと存候、然れども美（極めて幼稚なれど）の觀念に至りては或は兩兄より一等を進み居候樣に覺え候

之を要するに高等中學生たりし兩兄に向ては感服せしもの多し、然れども文學者たる兩兄に對してはあきたらぬ者多し擱筆

時は夜闌時辰儀一時を指す

褥中にて　　　　　　　　　　　　　子　規

碧梧兄　虛子兄

心中に爆發してゐる憤りを、强て鋒鋩に表はさうとしない冷靜な自己抑制によつて、諄々として敎へようとする子規の衷情は感謝に値する。事に當つて自己を客觀する餘裕を持たなければ、かやうに理論整然とした長い手紙は書けないのである。併しながら、それまで一度も使つ

たこともない「足下」の文字を用ひたり、退學したからとて一躍文學者呼はりをするなど、却つて底を抉ぐる皮肉が閃めいてゐる。殊に士三日見ざれば刮目して俟つべし、と自己を辯護しながら、私達の草稿を罵倒してゐるあたりは、其の草稿を手にして虫唾を走らした子規の險はしい顏が眼の前にちらつくやうである。

この手紙を見た當時の私は、自分といふものを、根柢からひつくりかへされたやうな驚きに打たれた。さまで自信は無つたけれども、相當苦心をした作が、てんで物になつてゐない、といふのでは、私の創作力がゼロであるといふのと同じなのだ。以前「渡し守」の時に落膽失望したのとは別に、より深刻な、より痛切な自己悲觀がヒシと骨にまで喰ひ入つた。學校はやめる、創作はゼロになる、何だかとりつく島のない荒海に投げ出されたやうな淋しさで泣きたくなつてしまつた。さうして今までに經驗しなかつた子規といふ人の恐ろしい一面に戰慄した。

「馬鹿にしよげとるな。

「……ア丶まで言はれりやアな……自分の面目を考へるものならな……。

「なアに、のぼさんはよくムカツ腹をお立てるけれな、隨分ひどいこともお言ひるぞな、さ

ういふと何ぢやが、のぼさんはあれでシンは冷たい人ぞな、ことしばらく一處にゐて、つく〳〵さう感じたこともあるのよ――と言つて、そこがのぼさんのエライところかも知れんがな、まア自分のいふことをきかないで生意氣に勝手なまねをする、といふのでプリ〳〵しておいでるのよ。

「さうぢやらうか、何だかのぼさんに顏を合せられないやうな氣がしてな――あしアあの手紙が來てから二晩ばかり寢られなんだ、ほんとぞな。

「……ありアいつだつたかな、非風に連れられて吉原へ往つた歸りに、根岸に往つたことがあらい、話が俳句の話になつて、のぼさんと非風の間に議論が始まつたのよ、どうしたのか知らんが、のぼさんのあの蒼白い顏が一層血の氣のないやうになつて、それ位のことがわからんのかな、吉原の女をひつかけるつもりで句集は出來んぞな、と其の時分非風が案山子集とかいふ句集を作ると言つてゐた、それを頭ごなしにおやつつけたのよ、あしア側にゐてハラ〳〵しとつたがな……非風が案山子集を作らんやうになつたのも、それからぞな、何でも歸りに、のぼさんもひどいことをお言ひる、と非風の事だから、ぽろ〳〵涙をこぼして殘念

がつてゐた、それもあしを連れて吉原へ往つた、といふことがのぼさんには面白くなかつた、又た其の朝歸りに寄つたといふことも氣にくはなかつた、そこでムカツ腹をお立てたんだな、とあとで考へたんだが、今度の手紙もまアその邊ぞな。

「そりアな、のぼさんにどんなに叱られたつてかまはん、といふので今度の事も決行したんぢやけれな。

「今度又たどんな事でどんなに侮辱されたり罵倒されたりするか、我々の前途は多難多事ぢやけれな。

こんなことを虛子と二人で話し合つた。さうしてお互ひに激勵するやうな慰藉するやうな、尤も私の方が受身で、激勵されたり慰藉されたりする言葉を交はしたのであつたが、私の胸に刻み込まれた痛手は容易に拭ひ去ることは出來なかつた。

子規の所謂、私達の文學者として立つ首途は、前途の光明を打ち消された、洞穴のやうな悲哀を包んだ暗澹たるものであつた。

二十五　非風の家

明治二十七年十二月三十一日附で、伊藤松宇宛の子規の手紙の中に「碧梧桐虚子兩人とも學校をやめ碧梧は只今小生同居虚子は小石川に非風と同居致候」とあるのを見ると、上京した二人は當分別々に、お預け者のやうな境遇でゐたらしい。私が子規の宅にどの位厄介になつてゐたものか、殆んど記憶に殘つてゐない。のみならず、子規と同居してゐる中にどんな事件があつたか、又たどんな印象があつたか、內的にも外的にも何らの痕跡をとゞめてゐない。虚子がいふやうに、子規がムカツ腹を立てゝ、私達のやり方に不滿を抱いてゐた際であつたし、私達も相應の理由を抱いて自由行動をとつた、むしろ一種の戰時狀態の會合であつたのであるから子規の一言一行にも、私の意識なり感情なりを刺戟するものがなければならなかつた。お互ひに觸れるもののいづれかゞ傷かねばならないとも想像される、せつぱ詰つた狀態でもあつた。それにも關らず、子規の宅に居候をしてゐたことさへ十分記憶に存しないといふのは、恐らく仙

臺から持ち越した私の心的傷手が、私の自我を極度まで萎縮せしめて、一切の刺戟も印象も享け容れ得なかつた爲めであらう。猫に見込まれた鼠のやうに、一時失神的狀態に沈湎してゐた爲めでもあらう。子規も一時の怒りに乘じて鐵槌を喰はしたものゝ、扨て面と向つては、今までの兄らしい親身な友情も湧いて、迷うて來た小羊を憐む心にもなつてゐたか知れない。又た昔の無我な子供と違つて、自我意識の下に動かうとする我儘な青年を、どう敎導すべきかに、重い責任を感じてゐたでもあらう。

子規がまだ大學に通つてゐる頃、軟文學で後進を誘惑し、其の前途を誤らしめるといふやうな非難や蔭口をきかれたことは前にも書いた。併しさういふ無稽な非難に對して、不關焉をきめてゐた子規も、眞に前途を囑望した私と虛子に對しては、非難の有無に關らず、理知の上からも感情の動きからも、常に割くべからざるつながりに引きずられて來た。子規にとつて大事な二人が、子規の大學退學と形の相似た行動をとつたのであるから、私達二人の前途の事を患へる以外に、對世の中の子規の立場も可なり苦しいものがあつた。私の中兄は、どこまで正岡をまねるのか、と言つて其の不心得を慨嘆して來た。當時の子規の心情は、恐らく複雜な、も

つれた糸を解くやうな、いら〳〵したもどかしさで一杯であつたであらう。

併しこの迷うた小羊は、さういふ事には一切無頓着で、鈍い暗い日々をたゞうか〳〵過してゐた。財布に殘つた僅かな金で、木賃宿でも足場にして、車を曳くなり立ン坊になるなり、勝手にしろと抛り出されても、こちらに文句は無つたのであるが、けふからさうしようといふ日も無つた。又たそんな勇氣も奮ひ起せなかつた。何の爲めに退學したのか、其の强手の一手を打つたあとのつゞかない平凡な碁であつた。

虛子が非風の厄介になつたのは、子規の家に二人まで居候をすることの出來なかつた事情もあるが、この春虛子在京中、非風と仲よくした關係もあつて、まア當分おいでや、といふやうなことになつたのであらう。が、眞底をたゝくと、虛子は子規の監視の下にはをりたくなかつたのだ。姑らく子規の鋒鋩を避けようとしたのだ。

非風の家は小石川の何處であつたか記憶してゐない。非風は一時喀血をした、肺結核の診斷をうけたのであつたが、療養效を奏して、其の頃常態に復してゐた。日本銀行の計算課とかに出てゐたやうだつた。算盤を二つつないで、何十億といふ長たらしい數の計算をするのは、そ

りやア苦しいもんぞな、とよく日々の仕事のくだらなさをこぼしてゐた。薄給のせいもあつたであらうが、六疊と四疊半位しか部屋のない小さな家だつた。それでも非風の家には火燵がしてあつて、いつも春らしい濃厚な暖かさが漂つてゐた。非風や虚子のいふやうに、根岸が窮屈で冷たいとも思はなかつたが、非風の家に來ると、何となく骨の伸びるやうなくつろぎを感ずるのでもあつた。

非風は其の頃吉原で馴染であつた女と同棲してゐたのだ。戀の經緯をよく非風から面白くきかされたものだつたが、地位も金もない非風が、多くの競爭者の中の戀の勝利者であつたのだ。小柄な、眼のぱつちりした、口は大きかつたが、顏全體に愛嬌のあつた細君――他人行儀に、たゞこの女とは言ひすてられない――は、初對面から私達を友達のやうにもてなした。忘れられない人なつこい柔かさがあつた。さうして何處にも玄人らしい臭ひがなかつた。下女も置かないで、自ら薪水の勞もとつてゐた。よく御馳走になつた食べ汚したものを片づける時など、氣の毒な位小まめに立働いてゐた。書生上りの水入らずの暮しには、恰好の細君だつた。

鳴雪や子規の先輩には打ち開け難い內證も、非風はかけかまひなく私達の前にさらけ出した。

私達を見物人に持つて、二人でいちやついたりする晴れ〴〵しさが、生活に追はれてゐた非風のせめてものパラダイスだつた。こまかい女性らしい感情の動きに支配されて、すぐ泣いたり笑つたりする、話上手な非風は、總てのものを失なつたやうな空洞な暗い心に囚はれてゐた私には、此上なく美しいものに見えた。又た羨ましい境涯にも見えた。主人のすゝめるまゝに、虚子と謡をうたつたりしてゐる間、萬事を忘れてしまふ事の出來たのも、たゞこの非風の家があつたのみだ。尤も先天性が合はないと言つて私を好かなかつたらしい非風と私との間は、中に虚子を通じての交際であつたから、當時の鴛鴦生活の甘味に十分浸るほどの親しみを持つてはゐなかつた。

非風が其後東京を引拂つて、北海道に往つたり、後に細君の郷里の京都で、悲惨な最期を遂げた事情に就いても餘り多くを知らずに過ごした。

私は今でもさう思ふ。非風といふ人に不得手な算盤などを持たして置かずに、其の趣味性の上に生活せしめる方法は無つたのかと。花の一時に開くやうに、其の口をついて出づる片言隻句にも光つてゐた天才的な閃めきを、もつと培養し鍛錬する道は無つたのであらうかと。一題

百句時代の子規と非凮とは、古白飄亭以上の親しみを持つてゐたやうであるが、それがどういふ機みで、次第に疎遠になつて往つたものか、この明治二十七年の末には、もう殆んどお互ひに往來することもないほどの隔たりを見せてゐた。或は非凮が戀の勝利者となつた榮譽、それが累ひしてゐたのでないかとも思はれる。非凮としては、子規の愛を失つても、戀人の愛に生くるのを本望としたであらうが、併し多少の自信を持つてゐた文才を全然捨てゝ顧みなかつたのは、餘りに自己に對する愛を犧牲にし過ぎたやうに思はれる。それとも、子規と非凮の間に、非凮自身他に洩らすことの出來ない祕密な心的關係でも包藏してゐたのであらうか。

非凮は始め其の號を非凡とつけてゐた。新聞か雜誌に校正を誤つて非凮としたので、非凡よりも遙かに非凡であるといふので、改號したのだつた。東京に遊學してゐる中徵兵適齡で砲兵にとられた。初年兵で士官候補生の試驗に及第し、其後士官學校に入校して約一年、肺患の爲めに退役となつた。非凮の親孝行であつたことは、同年輩の誰をも泣かしめたのであつたが、退役になつた時も、一人殘つた母親に、餘計な心配をかける、と言つて病床で悶へに悶へてゐた。病勢が小康を得た時分から、遽然として盲目的な遊蕩兒になつた。其の劇變は總ての人を

驚かした。さうして遂に戀の勝利者になつた。戀の勝利者になつた後の非風は、前垂掛けの一個の事務員として、餘裕のない索寞な生活を送るやうになつた。文學に對して未練がましいことを口にしなかつただけ、胸にはどのやうな人生の淋しさを抱きしめてゐたか、兎も角非風の運命は明治俳句發祥時代の哀調を帶びた一つのエピソードである。

二十六　從軍前後

「寓居日記」と題する明治二十八年の私の日記が、四册手もとにある。其の一・二を缺く三・四・五・六の四册で、二十八年三月五日から六月一日に及んでゐる。其三が三月から始まつてゐるのから見ると、日記を書き始めたのは大方二月の始めか一月の末であらう。

二十七年の暮に別居してゐた虚子と私とは、一時本郷の龍岡町邊の下宿屋に同宿したが、始めて強度な地震に遭うて、階子段からすべり落ちたやうな滑稽を演じたことを覺えてゐる。其の後間もなく臺町の香山といふ下宿に引越して、相變らず虚子と同棲してゐた。其の引越しの記念に書き始めたのがこの日記である。

日記の內容は、主として當時の遊蕩生活を赤裸々に書いたもので、たゞ文章の拙劣であるばかりか、殆んど他見を憚るやうな愚劣極つた事實の暴露である。この日記によつて、當時の放縱な糜亂した頹廢的生活がどこまで野法圖であつたか、恐らく之を手にする人を呆然たらしめ

るであらう。大方父母兄弟の監視や、學校の日課又は職業の束縛から放たれた自由と、未來の大文豪を夢見てゐた首途の誇りを完膚なく打挫かれた自棄的心理とが、當然弱い人間を引張り込む魔の陷穽へ一歩々々近づかしめたものであらう。

明治二十八年と言へば、子規の周圍は可なりに有形的な事件の起伏した時だつた。二月には子規が從軍する。四月には古白が自殺する、五月には子規が瀕死の病氣を得て歸つて來る。上半年は私達のやうなノラクラ者も毎日匆忙とした日を送つてゐたのだつた。

子規の從軍の動機は二月二十五日附の虛子と私に與へた連名の告別文——書简集所載——にも明らかであり、其後に書いた子規の最後の小說「我が病」にも容らかであつて、日淸戰役の始まつた頃から、旦暮子規の熱望したところだつた。飄亭に與へた手紙の中にも

小生今迄にて最も嬉しきもの

初めて東京へ出發と定まりし時

初 め て 從 軍 と 定 ま り し 時

の二度に候

とさへ言つてゐる。子規の宿痾を患へて、其の無謀を諫止した者もあつたが、それは子規自身の方がより以上に自分の健康を知つてゐた。當時の虚子はとも角、私の如きはもう眼中に置いてゐなかつたかも知れないが、それでも其の胸中の祕奥を吐露して、後事を托するやうなことを言つたのは、窃かに死を決してゐた消息を語るものである。

若し子規が從軍しなかつたならば、もつと餘命を長うしたであらうし、文學に多くの功績を遺したであらうし、五體を拷問にかけらるゝ病苦も知らなかつたであらうし、公的にも私的にも子規の生活は、より遙かに意義の深いものとなつたであらうとも想像される。

一體子規の內的生活、其の一生を捧げた文學に對する情熱は、牢乎とした信念の土臺の上に築かれてゐたとは言へ、其の信念を盛る表現形式は常に流轉して已まなかつた。文學の骨子中核として時代を超越するものと、時代に適應するものとの區別を明らかに直感して、一處に低徊することを許さなかつた。明治二十九年以後、年々の俳風の變遷を說いて、其の新たなる傾向に生きようとした洞察力の一例に見ても、子規の生活は卽流轉的であることを指摘し得るのである。であるから、子規がもつと健全にもつと長命に、文學に携り得たとしたら、其の流轉

的生活は、より速度を加へて推移して往つたであらうと想像する方が、或る一處に停滯した生活に落着いたであらうと想像するよりか、子規の面目を傷けない、よりたしかに必然性を帶びてゐるのである。子規が死に面した晩年、或る日枕頭に侍してゐた私を顧みて

病氣の重つて來るほど、頭はいよ〳〵明敏になる、さういふと大言するやうであるが、哲學でも文學でも今までわからなかつた問題が驚くほどはつきりして來た、自分でも恐ろしい程だ、議論でも創作でも、思ふやうに出來る氣がする、もうお前らにも負けてはをらんよ――破顏微笑――が、悲しいことには、もうそれを組み立てる元氣がない、考へを形に表はすことが出來ない、强ひて形に表はさうとすると、矢張惰性に引きずられたものになつてしまふ、これ程明らかにわかつてゐるものが……それでもう死んで往かねばならない、實の持ち腐れといふのは本統にこのことだ。

と言つて、私には見えないやうに涙を拭いたことがあつた。私は電氣に打たれたやうに、身體の居すくんでしまふのをどうすることも出來なかつた。もう總ての問題がわかつた、といふ內容を知ることは出來なかつたにしても、亦た左樣に明言する子規の頭は、多少病的な妄想を加

味してゐるとしても、子規の內的生活は、常に流轉し推移して、其の死の直前にまで迫つてゐた消息を窺ふに足るのである。

其の結果から見て、十を失なうて一も得る處のなかつた從軍を子規がなぜ決行したのであらうか。子規の靑年的な客氣が大事を誤つたやうにも見えるが、思ふにそれは、子規が何らかの雜念によつて奇を衒つたのでもなければ、巧を弄したのでもない。子規としては極めて自然な、其の流轉的生活に根ざす、有りふれた行動をとつたに過ぎなかつたであらう。子規は私達への告別文中に

征淸の役起りてより天下震駭し旅順威海衛の戰捷は神州をして世界の最强國たらしめたり（中略）而して戰捷の及ぶ所徒に兵勢振ひ愛國心愈固きのみならず殖產富み工業起り學問進み美術新ならんとす吾人文學に志す者亦之に適應し之を發達するの準備なかるべけんや僕適瓶を新聞に操る或は以て新聞記者として軍に從ふを得べし而して若し此機を徒過するあらんか懊に非れば卽ち愚のみ傲に非れば則ち怯のみ是に於て意を決し軍に從ふ

軍に從ふの一事以て雅事に助くるあるか僕之を知らず俗事に助くるあるか僕之を知らず雅事

に俗事に共に助くるあるか僕之を知らず然りと雖も孰れか其一を得んことは僕之を期す縷々の理些々の事解說を要せず之を志す所に照し計畫する所に考へば則ち明なるべし足下之を察せよ

とも言つてゐる。要するに行住坐臥總て自己の藝術であるが、戰爭といふ人事の大波瀾中にも更に新たな藝術の世界のあることを信じ憧憬し尋ね求めようとしたのに過ぎなかつた。平たく言へば、どれほど註文しても生涯に再び觀る事の出來ない新奇な世界を、直接戰場で味ひたかつたのである。さうして其の新奇な世界の戰場氣分を味ふことが、其の藝術に新たな呼吸を賦與するものと信じたのである。無謀に計劃したのでなくて、生活を緊密ならしめる當然の歸結であつたのである。

私の日記の始の方が散逸してゐなかつたならば、もつと當時の裏面の事情なり感想なりを明らかにし得たであらう。私の朧氣な記憶をたどると、愈々従軍の決定した日、日本新聞社近くの肉屋か鳥屋で、夕飯を三人で食つたやうに覺えてゐる。子規はさまで昂奮した様子もなく、あつさりとかねての希望の達した旨を語つて、そこ〳〵に表に出たが、いざ別れるといふ時に

右の告別文を貰つたのだつた。下宿に歸つて二人でそれを開いて見ると、先づ冒頭に「河東秉五郎君足下、高濱清君足下」と改まつた書き方がしてあるのに度膽をぬかれた。判紙二三枚の文章は徹頭徹尾楷書で、一字も苟くもしない謹嚴ぶりである。

僕足下と交遊僅かに數歳而して友愛の情談心の交恰も前世の契約に出づるが如く然り僕の志すところ常に之を開陳して利害を足下に問ふ共足下に望むところ亦之を披發して以て省慮を請ふ事の得失行の可否胸憶を盡くし肺肝を灑ぎて而して後に已む足下また僕の躁狂を咎めずつとめて卑言を容れらるゝを辱うす

と言つたやうな書き出しに面喰つてしまつた。讀み了つた二人は惘然自失したやうに、姑らく顔を見合せて口をきく事も出來なかつた。事もなげに話した從軍に、それ程の決心を持つてゐたのか、といふ驚きと、不甲斐ない私達をさほどに信賴してゐるのか、といふ感激の高調が、二人の心の中に波打つた。そこらに花札などの落ち散つてゐる醜惡と淫靡に塗られた部屋の空氣が、この夜位嚴肅に引き緊められたことは恐らく無つたであらう。

「參つたな。

「かうしてはをられんな。

永い沈默が過ぎて後、二人は我を顧みた嘆息の言葉を交したのみだつた。

のぼさんは矢張エライ、我々でも從軍したい氣が全然無つたのでもないが、たゞ物見遊山の大仕掛けなもの位にしか思つてゐなかつた。のぼさんのはそんな好奇心ではないのだ、ちやアんと平生の所期と聯關する大きな理由があるのだ、まるで腹がちがつてゐる、さうして自分は一體どうしたといふのだ、のぼさんのやうな大きな志を抱いて、確かな計劃を立てゝ、今日と言はず、今の一刹那もボンヤリしてゐないやうな明敏な精勵な先輩に、こんな重大な望みをかけた手紙を貰ふやうな資格がどこにあるといふのだ、まして「僕若し志を果さずして斃れんか僕の志を遂げ僕の業を成す者は足下を舍て他に之を求むべからず」などゝそんな後事を背負つて立つ力を自ら信ずることが出來るのか、頭は粗大で、理解は遲鈍で、おまけに學問ぎらひのお調子ものに過ぎないではないか、こんな手紙に接すると、穴でもあればはいりたい、今更自分の小さく弱いのが恨めしい位だ、此頃ののぼさんが我々をヤクザ者扱ひにするやうで、少々不平でないことも無つたが、やつぱり我々を全く捨てたのでも無つたのか、イヤ、のぼさんの

心持を察すると、勿體ないと言つていゝ程、このヤクザな我々をさへ賴みにしてゐるのだ、のぼさんの期待の萬分一に酬いる爲めにもうか〳〵してをつてはならない、もつと勉强しよ、もつと氣を張り詰めて居よう、考へれば考へるほど此頃の自分は何といふグウタラな暮しをしてゐたのだらう……私はこんな感想がそれからそれと湧いて來る自己反省に責められてゐた。さうしてかやうな賴みをかけられる自分よりも、我々如きにさへ賴みをかけなければならない子規が氣の毒であるやうにも思つた。

併しこの自己瓋蕤が、眞に私の生活を一變する位の意義を持つてゐたら、戰爭から歸つて來た子規にどれほどの滿足を與へたかは知らなかつたが、當時の頽廢氣分は、其の夜のことも次第に忘れがちになつて、酒に醉つたやうな、狐にでも魅せられたやうな日を送るやうになつた。

一方廣島の大本營麾下に姑らく滯留してゐた子規は、「我が病」にも書いてゐる通り、紙屋町の川友といふ旅宿の八疊の間に同社の人四五人と同宿して、每夜ヘラ〳〵踊りなどを見に往つて、ひたすら出發命令を待つてゐた。「どれだけ閑であつてどれだけ馬鹿な事をしたかはこれで分るであらう」と言つて、廣島滯在の無意味な倦怠にしびれをきらしてゐた。

四月十日に漸く宇品を出發した光景、十三日大連灣に入り、十五日金州着、一旦船に歸つて、十八日再び金州に入つたまゝ講和が成立して遂に戰爭を見る事も出來ず、土間に黍殼を敷いた上で寢起をした狀況は「我が病」に寫生してゐる。

從軍中に手紙を貰つたのは廣島滯在中三月三十日附——封書の消印には二十七日とある——の二人宛の一つだけだつた。

拜啓、兩兄益御淸穆奉賀候、小生來廣後忙がしとはなけれど、俗務絕えず困却致候處、昨今に至り大略用事片づき別室に閑居致候に付、ゆる／＼手紙位はしたゝめられる樣に相成候、文苑發句御面倒奉謝候、登錄句中愚意にかなはぬもの一二を擧ぐれば

初　空　や　一　筋　白　き　沖　つ　波

はまづ月並調に近くと存候

又　よ　と　て　妹　が　門　田　の　歸　雁　哉

初五文字耳だちて聞ゆ、又一つと改めてもこれよりはよろしらんか、猶好字あるべし

化やせん庄司か門の古柳

夢大にしては大出來なり、併し初五文字は矢張拙し、何と直してもこれにはまさらんか「そぼふるや」「蓑干すや」等いくつもあるべし

梅咲て月の出處かはりけり

言ひ様によりては面白くもならん、これにてはまるで月並の句なり
鳴雪先生百題の内數句を示さる、多くはこれ凡調俗聲これは何としたもの
小生歸郷中松風會の景況は、鳴雪先生迄中上置候御聞可被下候
其他色々認めんと存候まゝ此處迄にて一旦しまひ置候處、俗用多きため全く忘却し、今日反故の中より拾ひ出し候故御送申候
今日は久松伯の送別會あり、小生出立は四五日頃かと覺え候、畫師中村も大阪師團に從軍致候大略匆々

三月三十日　　　　　　　　　　つねのり

碧様　虚様

この文苑發句とあるのは、「日本」文苑欄掲載の句のことで、子規出發後は、當分私と虚子の共選で、一應鳴雪の檢閲をも得てから掲載しようといふやうな内相談で引きうけたのだつた。けれども選の都合や、掲載の關係で、いつとなく私が其の事務にあたるやうになつた。「寓居日記」にも三月八日の條に「朝日本新聞社より投書の發句を送り來るよむに好句とてはなし」同九日に「夜内藤へ投書の發句をもて行きぬ不在なりし故云々」同十日に「鳴雪先生を訪ひ昨日の發句をうけとる」「晝後吾ひとり出て日本新聞へ送る發句の檢閲を鳴雪先生に請ひし後云々」などゝある。新聞には別に代選とも斷つてなかつたやうに思ふ。子規の目は遠く廣島から東京まで光つてゐた。其後鳴雪宛の手紙にも

「日本」文苑發句の愚評碧梧迄送置候、御傳聞被下候事と存候、其後の文苑にては

大　兵　に　す　れ　違　ひ　け　り　朧　月

といふ句解せず、大兵とは大軍の意なりや左すればすれ違ふといふ事不都合と存候、或は大兵とは大男の義なりや、それならば趣味少しと存候

「消へぬべし」と文苑にありしは「消えぬべし」の誤と存候、箇樣な假名遣ひは注意するやう

碧梧へ御傳被下度候

の數節がある。子規の目が廣島から光つたのは、「日本」の俳句が既に世上の問題になつてゐた爲めもあらうが、遺孤を托した私達に大過なかれかしとの老婆心も手傳つてゐた。この「文苑警告」は、其後子規が病を得て歸つた時にも時々辛辣に來た。

右の手紙の中「鳴雪先生百題の中」とあるのは「寓居日記」三月七日の條に「朝春季百題を撰びぬ」とあり、同十六日の條に「晝過までは例の如し予は百題を漸う九十迄つくりぬ」とある春季百題のことであらう。子規不在中の一つの仕事として、鳴雪と虛子と私の三人で競作したのだつた。

「小生歸鄕中松風會」云々とあるのは、松山の俳句會のことで(村上霽月、名は半太郞、元愛媛銀行頭取、現存在松)、中村愛松(名は一義、當時小學校長、亡)、野間叟柳(名は門三郞、當時小學教員、亡)、柳原極堂(名は正之、元伊豫日日新聞社長、現存)等の會合であつた。「夢大」とあるのも、恐らく松山の叟柳嚴父のことであらう。

二十七　古白の死

藤野古白は名を潔と言つた。子規の從弟で、飄亭非風等と同年輩であつた。早く父に隨うて東上し、文才もあつて「知門」の作者でもあつたが、子規とは何處かソリの合はない點があつて、兎角孤立の位置にゐた。子規は明治二十七年十二月三十一日附で、伊藤松宇に宛てた手紙に「古白は先日上京致候兎角病氣よろしからず月並の句を作りて獨りよがり候は何分濟度難致候」など書いてゐる。從弟又は朋友として交情に變りは無つたであらうが、文學又は俳句の管見は相容れないものがあつたらしい。

私が古白を知つたのは、明治二十六年の秋、古白が歸鄉した際のことゝ記憶する。子規非風虛子等が相次いで、松山を去つた後、孤獨の淋しさのまゝ、古白に句を見せて直して貰つたこともあつた。當時は左程常軌を逸した人とも思はなかつたが、仙臺から東上して後に會つた古白は、もう別人のやうに一種の狂味を帶びてゐた。

隣家の處女に戀するまでの古白は、柔順寡默の青年であつたが、其の戀に破れて以來の古白は、饒舌瓢輕な書生になつた。表面饒舌瓢輕ではあつたが、心は常に憂愁と懊惱に囚はれてゐた。饒舌瓢輕なのは、たゞ其憂愁懊惱を自ら紛らさうとする手段に過ぎなかつた。其の親近者は古白の衷情を知つて、却つて我を忘れたやうな諧謔百出の饒舌を憐んでゐた。古白の父の友で、松山で果樹園を開いてゐた一種の修道者があつた。古白を平靜な心的狀態に復へさうとして、古白を其の園に入れて日夜共に鋤犂を操つた。山青く水白い自然の環境と相待つて、古白を平靜な心的狀態に復へさうとしたのである。修道者が自慢にしてゐた手作りの茅葺の家に、五六日寢泊りした後の或る日のことだつた。梨畑の後方の小高い丘に上つて、秋晴れのした、澄みきつた太陽の光りを浴びながら、ぢつと打ち沈んでゐた古白は、卒然手にしてゐた鍬を投げ出して「アシはもうこゝがイヤになつた」と言つた。いろ〳〵の躁狂者に接した經驗を持つてゐた修道者も、古白の斷定的な語氣と顏色とには、どう手を下すべきかを知らなかつた。これはたしか明治二十七年の秋のことで後に私が其の修道者から直きに聞いた話である。

二十七年の暮には古白は今日の早稻田大學の前身の專門校に入學してゐた。坪內逍遙のセク

スピアの講義のまねをして笑はせたこともあつたが、又たドラマに熱中して「築島由來」といふ一曲を、ドラマ革命の爲めに書くとか書いたとかも言つてゐた。自分の句を見せても、先づ名作呼はりをして、他の批評を挿む餘地を與へないのは古白の常習とも思はれてゐたが、「築島由來」の戲曲を吹聽する程度は一層猛烈になつてゐた。早稻田で何かの餘興のあつた時、振袖を著て女形をやつた、といふやうな話をして、劇作者と俳優とは、もと一つのものだ、劇作の苦に比べれば、俳優の所演は何でもない、と自畫自贊の議論を獨演したこともある。がさういふ氣焰をあげた後には、いつも突然深い沈默に落ちて、死を口にするのだつた。別に慰めるべき言葉をも見出し得ないでゐる中に、眼鏡の奥の方の眼瞼を痙攣的に動かしつゝ、又た洒落半分の話をして賑やかに笑ふのでもあつた。當時下駄の鼻緒の色がどうだとかいふやうな事を氣にしてゐる者が、死にたい〳〵と言つたつて容易に死ねるものでない、と古白の口癖を暗に冷笑したこともあつた。「寓居日記」にも、一晩虛子と痛切にお互ひの心事を語つた三月九日の條下に、

虛子の曰く藤野古白はよく死を口にす然れども彼容易に死する事能はざらん、吾や口にはい

はねども近來死なる觀念は一層に强し、或は古白に先つて死する事もあらん云々

の一節がある。古白の早發性狂昧は、今日から想像すると、其の初發以來月に月に重體に進んで往つたやうである。けれども何處からが狂態で、何處からが常態なのか、恐らく古白に接した何人もがそを洞察する事は出來なかつた。若し當時其の早發性狂昧を看破して、古白に一刹那たりとも安心と希望の光明を與へることが出來たとしたら、或は其の横死の慘事を見ずに了つたかも知れない。自ら天才呼はりをする古白を嘲笑の的にして、其の病的發作に思ひ及ぶことの無つたのは、眞に悲むべき我々の錯誤であつた。「寓居日記」に現はれた古白を見ると

（三月八日）晝前予一人一寸藤野古白を訪ふ――（當時古白は湯島の親族の家に寄寓してゐた、下宿とは左程離れてゐなかつたので、よく往來してゐたのだ。）

（三月十五日）雨の晴間なりとて一寸通りへ出て、歸途予許り藤野を訪ふ、同家の中島といふ人今日下廣出發とていそがしさうなれば直樣かへりぬ。

（三月二十一日）藤野古白を訪ひ早稻田文學をかりてかへりぬ。

（四月六日）吾は再び藤野古白氏に双眼鏡をからんとて立ち出づ古白氏散歩に出たりとて不在

又々一人して………。

など何等の變事を豫想するやうな記事はない。四月七日に至つて、私は芝能樂堂の能を見に往き、點燈頃歸寓した時、其日上阪中の中兄に會ふ爲め出發した筈の虛子が、酒氣を帶びて歸つて來た。さうして古白の變事を報じた。「寓居日記」を抄錄すると

……虛子は歸り來りぬ、しかも酒氣紛々たり、倉卒かけ入りて曰く藤野古白はとう〳〵やつつけたりと、ピストルを以て前頭部及後頭部の二ケ所より腦へうちこみし事より、家内の人の何か豆をうちたる如き響したるに、子供の惡戲と思ひて氣にもかけざりしに、二度目の音は現在子供が眼前に飯を食ひつゝありし故怪みて行き見れば、古白は血に塗れて煩悶しつゝありし事及び其の容體などくはしく話す、たゞ驚嘆の外なし、虛子は實は朝鳴雪先生に金を借りて後、靑木と共に上野の花を見に行かんと大學の病院の前を通りかゝりしに、內藤先生虛子を呼れて始めて其事を知りしなりと、かつ餘り心もちわるければ酒のみてまぎらさんとしたるなり、尙ほ今夜九時過より約束したれば若し兄不在なるときはたまらんと思ひ、つる仙(寄席)に行かれしかと懸念して、つる仙まで電報をうち置たりと、依て急に床をのべて九

時半迄を約し寢につく、九時半頃起きて第一醫院外科上等室一號に行き見れば田中傳吾、小川尙義、三並良など人多かりき、左の腦はうちぬきたればにや右の手足は一も動かぬに、左の手と足は非常に力づよく一通りの力にては抑へ難き程うめきあれたり、予の行きし頃は已に繃帶も出來すや〳〵と安眠する事もありき、予と虛子は一時頃迄起きて他の人とかはり三時頃迄寢ねぬ、夫より又起きて看護す

左の手ばかりは左程動かさずなりしに足の方一層力づよくなりたる樣なり、醫者の言によれば腦の主部をいためたる事なれば、到底生命は覺束なかるべし、萬一回復する事ありとも左眼には血液下りをれば之は不用ともなるべく、言語はもとよりきけざるべしとなり（下略）

（四月八日）……晝過まで看護して人に托してかへりぬ、沐浴酒をのみ三時頃より床をのべて寢につく、今夜また〳〵看護に行くため也

七時頃なりしか靑木來りて吾等が留守中の病狀をいふ、第二醫院の佐藤氏來り遂に腦中の彈丸を出さんとて眉間及び後頭部をきりて出る丈の玉を出したりと、然れども前よりうちし玉は骨に當てくだけたりし其少片今尙腦中に殘れりと

八時頃新海正行氏(非風)來る、虚子の其の狀を報ぜし爲め也、吾等は飯を食ひ共に〳〵行く、しばらくして非風子は明晩とまる約してかへりぬ、予等は翌日の午前二時頃起きてみとり共あとを人に讓りぬ、尙常に左手左足を動かしつむればこれをみとるには頭と手と足とを抑へずばならず故に三人は必ずいる也時には三人にてもむつかしき事あり

玉出て、より心もちよきかそは不明なれども、少々理解力を出したるの傾ありて呼べば「うん」と答ふる丈は間違なき樣にて、十分にはわからねど、言語を言はんとするの風は瞭也

(四月九・十・十一日)三日の間殆んど前と同じく、晝後少しく宿にかへりて他は大學病院にありき

(四月十二日)……昨夜より一層古白の容體危急なるを見る、午前十時頃よりカンフルを注射する事殆んど十數回に及ぶ終に午後二時永眠し了んぬ(下略)

(四月十四日)晝後藤野に赴き談話す、壽し菓子の饗あり、井上理三郎氏其ピストルを潔氏に盜まれし前後の話をなす、之をきくに其の注意頗る到れりといふべし

理三郎氏のピストルをもち居る事は同氏が切通(湯島の藤野)にて貰ひしなれば、潔氏も一二

度うちて見しことなどあれば萬承知なれども、たゞ井上氏が其銃を藏したる處は之を知るに由なかりき、故に潔氏は屢々ピストルを借せと言ひしも井上氏決して借さゞりしかば、遂に之を盜み出さんと覺悟したるものゝ如し、而してこゝに一事あり、井上氏かつて鐵砲磨きにとて潔氏の注意により眞鍮みがき粉を買ひし事ありけり、されば其磨粉は必ず鐵砲と同所にありしならんと推測せしものか、五日の日なりしとよ、潔氏何心なく煙管を磨くなれば眞鍮磨粉を借せといひたり、井上氏はそれともしらねば心安く出して貸せしが、潔氏は之を以て其の銃のあり處を知りしものとは後にてしられたり

六日の夜は井上氏の内（淺草鳥越町）に同宿し朝十時過湯に二人して行きけり（之はいつもの例なり）潔氏はいつも井上氏より早く出づる例にて大抵表へ出たりして待ち居りしが、今日は早く出たる故氏も急いで出しに其かげ見えず、由て早々宅へかへりしに濡れたる手拭あり潔氏も見えず、須臾にして潔氏かへり來り煙管を買ひに行きたるが君の歸りは早かりしなど平日に異なる事なかりき、後にてきけば井上氏の細君其の簞笥のひき出し（坡下のものへ本を入れ其下に銃をかくしたり）をあけし者ありし故見れば潔氏なり、他人にもあらねば其ま

ま默しぬとの事なりしが、大方其時出せしものならん、されども井上氏はそを知らざれば其日は何とも心づかず共に向島へ行きなどしたりとぞ（下略）

古白の死の祕密は、かやうな事實が明らかになる程愈々迷宮に入るの感がある。若し單に死を選ぶとすれば、死の方法はいくらもある。かやうに細心な計劃を立てゝまで銃死を選んだ所以はどこにあるのか、そも亦た一種の病的發作觀念であらうか。そは兎も角、四月十日は子規が宇品を出帆して、渴仰した征途に上つた日である。古白横死の報は、恐らく其の出帆前にうけとつたであらう。萬感交々往來した子規の胸中も亦た察すべきである。

「寓居日記」の五月二十五日の條に

晝飯前鳴雪來らる、玄關にて正岡歸着神戶に上りしも、持病發して神戶病院へ入院せし由を承る（中略）乃ち直ちに虛子——當時中兄と大阪にゐた——に此由を報じ陸氏に一書を走せて若し正岡重體にて誰か當地より見舞に行く事もあらば吾を派遣しくれとたのみ遣るとあり、同二十六日

陸氏より報あり、醫師の報によれば正岡子規子は「未だ喀血すれども氣配ひはなからん」となり故に少しく安心するに足らんか、と之を以て見ればよほどの重病の如し云々

同二十七日「神戶へ行きしとて虛子より電報來る」とあり、同二十九日の條に

朝虛子より子規子病狀につき一郵書を致す喀血はまだ止まざれども、舌のタイも大分へりて牛乳ソップなど飲まれ、氣分はいと慥かにて別に苦しさうな風なしと、少しは落着く事を得

べし（中略）そをもて直ちに鳴雪翁にしめし、ひきかへして根岸に赴き、正岡にもそをしめす（下略）

同六月一日の條に

朝虚子より長文の手紙來る、何分獨りにては心細くかつ己を慰むるものなければ、予にいく度か「キミモキテクレ」の電報を發せんかと思ひしも、今迄はこらへしが何分堪へられねば今はいふなりとて、予に下神を勸め來る、予も行度は山々なれば、この際一奮發と、早速陸氏を訪問せしに、幸ひに在宅にて（中略）氏一個の意見にては何とも申兼ぬれど社よりならずとも旅費位はどうなとすればと予が下神を肯ぜられぬ（中略）夜深うして鳴雪先生來られ、明日早朝陸氏より翁と予とに來てくれと申し來りし故其報知迄にと他をいはでかへらる（下略）

日記はこれで了つてゐるが、當時私は子規母堂のお供をしたから、翌二日の午後の汽車か、三日の朝の汽車で出發したのであらう。

病室の白いベッド、白い壁、白いカーテンの間に見出した子規の顏は、同じやうに血の氣のない弱々しい蒼白さに曇つてゐた。顴顬骨の隆起した多角的な陰影が其の間に動いてゐた。殺

菌劑を入れた枕頭のコップには、血痰の鮮やかな赤さが雲模樣を畫いてゐた。古白の病室で看護したのとはうつて變つて、頭をおしつけるやうな靜かさが、廣からぬ病室に漲つてゐた。何だかもう餘命のない枕邊に侍するやうなうら悲しさに打たれるのだつた。

毎朝山の苺畑に往つて、新鮮な苺を子規の朝飯に供するやうになつたのは、それから間もないことだつた。痰にも血を見ぬやうになり、ぽつ〳〵話をするやうにもなつた。子規の恢復は眼に見えて著しいものがあつた。

子規が「我が病」に書いた金州の宿舍の豚小屋に類した起居も、「我が病」の未完了の爲め其後を知る事は出來ないが、子規の話は、其後發病に至るまでの經過、この病院に擔架で舁ぎこまれるまでの狀況を備さにした。七月六日附の瓢亭宛の手紙に――過半は私の代筆

（前略）小生近衛に從ひ金州迄罷越候へども一の砲聲を聞かず、五月十日同所出發歸途につき候、十四日大連灣より乘船、十七日船中にて喀血を初め候處、何の手當も出來ず、且つ消毒とかこれら患者とかの騷ぎにて、漸く和田岬檢疫所に放免せられたるは五月二十三日午後なり（船を上りしは同日朝）それより釣臺にて直ちに神戸病院に入り、今日迄已に四十餘日に相

成候、今度は前年に比すれば更に甚だしく喀血前後二十日間に渡り申候、自分はそれ程にもなかりしが、傍人いたく心配して鳴雪翁などは最早小生をもつて地下の人とせられしとか、あとにて聞き及び候云々

とあるのでも其の大體は想像される。戰時中の事と言ひ、殊に船内のコレラ騒ぎと言ひ、一新聞記者の疾病などは九牛の一毛にも値ひしない一些事と看過されたのであらうが、約一週間喀血しつゞけて、何の手當もうけなかつた子規の運命が、かくまで早く光明を見ようとは豫想の外だつた。

七月二十二日附、私宛の手紙に「小生は多分明日退院と決定致居候、併し天氣都合にて延引可致候」とあるのによつて、入院約二ケ月、七月二十三日須磨の保養院に移つたことがわかる。私は七月十日頃母堂と共に歸京したのであつたが、虚子は尙ほ姑らく保養院に附添つてゐた。尤も七月二十七日附、虚子宛の手紙が東京に來てゐるから、須磨の看護は僅か二三日に過ぎなかつたらしい。

保養院に居た間に、鳴雪を始め虚子及び私宛に、巻紙の一本以上も費した長い手紙をよこし

て、俳句は勿論文學美術を論じたのは、子規の書簡集でも前後に類例のないものだつた。病後の保養を主としたとは言へ、保養院に在る約一ヶ月――八月二十日に須磨を出立して途中岡山廣島泊歸松した――の日子が、子規の生涯の中で、最も悠々自適した閑日月であつたやうだ。

二十九　漱石と子規

夏目漱石が松山中學の先生になつて赴任したのは、二十八年三月の事だつた。子規が須磨から病後の療養かた〴〵歸鄕した時、二番町の上野といふ人の家に居る事にしたのは、同家に漱石も寄寓してゐたからだつた。漱石と子規の交際は一高時代からの同窓といふだけで、お互ひに談心の友として許すほどの深みを持つてゐなかつた。同窓生の中ではまア〳〵話せる男位に子規は思つてゐた。漱石もまだ小說を書かうといふやうな野心も抱いてゐなかつた。そんな水商賣ぢみた文士なんぞになる俺ではない、と高く己を持んでゐた時でもあつた。文學の話なんか漱石にはわからないと見くびつてゐた子規も、何處かに氣心の知れた親しみと暖か味の結びつきがあつた。松山には親族の二三軒もあつて、病後の子規を看護する人手位に事を缺かなかつたのであるが、子規は却つて漱石と同居する舊友の誼しみを選んで、約二ケ月共の厄介になつてゐた。

漱石が後に人に話したといふのによると、子規は人の迷惑なぞには何の頓着もなしに、けふは鰻を食はうとか、イヤ雛にしようとか、食ひ物の贅澤を言つて平氣でゐた。毎日句會をやるとか言つて大勢詰めかけて來ては夜更かしをする、相變らず病人らしくもない非衛生の親玉だつた。

併し晩年の漱石が創作を以て身を立てるやうになつた所以は、漱石の思想、感情、及び其の環境の變化による事は明らかであるが、其の創作に向つて行つた機縁は、遠く溯ると、この松山の子規との同棲に胚胎してゐるのだつた。漱石が十七字を並べるやうになつたのもこの時だつた。追ひ〳〵子規派の作者として、ユーモアの濃厚なウイットに富んだ一異彩とも見られるやうになつた。

始めて漱石といふ雅號を見て、それが誰であるかを質した時、夏目といふ男にはとてもわかるまい、と思つてゐたが案外なもんだ、と言つて、子規は一つの奇蹟のやうに話したこともある。後に漱石が洋行中からよこした「倫敦塔」を見た時には、子規は更らに驚異の眼を輝かして、素人の筆ではない、もう堂に入つてゐると、三嘆した事もあつた。

若し漱石晩年の成功を子規が見たとしたら、それに對してどういふ態度をとり、どういふ批評を加へたであらうか。子規が談心の友として將來を囑目した者は、大方碌々爲すなきに反して、子規が半ば俗物視してゐた漱石の盛名隆々たる事實を自己の不明に歸するであらうか、或は自ら筆を呵して文壇に相馳驅する勇氣を振ひ起したであらうか。それとも漱石の成功を白眼視して、別の世界の出來事のやうに不問に附したであらうか。無益な架空な想像ではあるが、多少の興味を喚ばないとも限らない。

三十　病後の焦燥

子規は七月二十七日附の鳴雪宛の手紙の中に左のやうな赤裸な感情を述べてゐる。

……自分は死ぬると迄は思はざりしが、醫者さへ氣遣ひしと聞て、今更夢のやうに覺えて半ばうれしく半ば恐ろしく、はては老耄人の如くつまらぬ事に心配致候やうに相成候(中略)碧梧抔看護致呉候後は、一時間でも人が側に居らねば心細く覺え候事屢々有之、從て兩人の顏を見る時は我子にても逢ひし時の感なるべしと思ふ樣の感起る事有之候、それにくらぶれば入院當時の勇氣は我ながらえらきものにて、看護一人さへあれば疊の上に死ぬるには十分なりと定め(中略)それを思へば今の老耄は實に恥かしく存候、併し病氣の少しつゝよくなると共に勇氣もやう〳〵に恢復し、今では高濱なくとも左迄淋しとも思はぬ樣に相成候、只勇氣の全然回復するや否やは無覺束候、此一點一生の遺憾に有之候。今日の如き無氣力にては、此後たとひ何年生きたりとも何事も出來申間敷候。此點よりいふも長く田舍に閑居して遊び

居るは却て悪しく、矢張〳〵都門に住みてはげしき競爭の風に吹きまはさるゝ方が元氣づくべきやと存候。（下略）

病氣に影響されて、抵抗力の薄弱になつた場合のさもあるべき感想である。殊に人一倍强烈な野心に燃えてゐた子規のことであるから、「今日の如き無氣力にては此後たとひ何年生きたりとも何事も出來申間敷候」と痛切に自己否定の叫びを發する衷情も思ひやられる。同十月十日、松山から鳴雪宛の書信の中にも、

御地俳況如何や、小生當地に在て素人許りを相手にいたし居候、歸京後意外のひけを取り候樣な事有之やと氣遣申候

など意外なとり越し苦勞をさへしてゐる。

十月二十五日歸京途上大阪からの私宛の書信には

……小生も大分よろしくなり候故あづまの秋もこひしく、須磨迄出稼候處、僂麻質斯にや左の腰骨いたんで步行困難に相成候、當地にては全く動けぬ程なりしを、服藥の效によりて今日は大分心よく相成候、明日は少しはあるき得べきかと樂み居候

と新たな病氣の發生を報じてゐる。この腰骨の痛みは、晩年子規を椅悩にかけた脊髓浸蝕の第一の徵候だつた。子規は十月三十一日に歸京して無事根岸の庵に入つたが、其後一二度杖をつきながら上野の山を散步した位で、間もなく步行の自由を失なつてしまつた。

同十二月十四日附、大谷笑天宛の書信に

……小生やうやく歸京致し候ものゝなかなか昔の小生にても無之大弱りに弱り居候、併し病氣の爲めに仕事をなまける事は毫も無之候故御安心被成下度候、近來は每日二欄三欄位も書續申候、歸京後リウマチス見たやうなものにて足腰自由ならず困居候、最少し世の中の苦を重ねて試み度候

ともある。

當時「日本」に入社して、編輯の一員になつてゐた私の無能ぶりにも業を煮してゐたらしく「文苑警告」の手紙も屢次に來た。「俳諧大要」を主として、新聞の上の活躍もめざましいものがあつた。笑天宛の手紙に「每日二欄三欄位も書續申候」とあるのは、新聞原稿のことである。

かやうな手紙の文面を見たゞけでも、子規の心中に平らかならない不安の影の漂うてゐるの

を想察することが出來る。子規の青年的な元氣と、元氣の燃えてゐる野心と、其の健康の示す抵抗力とは、次第に反比例をなして行きつゝあると子規は考へるのである。自己の短縮せられた生命の、まだたしかな呼吸をしてゐる間に、其の宿望の一端なりとも果したい、と功を急がねばならないのである。自己の頼みにしてゐた周圍の友人達は、大抵迂にあらざれば鈍、悠々として時勢を解しないか、仕事をさせればヘマな失敗許りする、論外の徒である以上、大童になつて自己自ら馬を陣頭に進めなければならないのである。明日にも自分が斃れたとしたら、今日まで築き上げた中途半端な仕事はどうなるのか、命數は已むを得ないとしても、これでは死にきれない遺恨を抱いて死なねばならないのである。

總てが今日の自己と背戻してゐる、すれ違ふ車のやうに行くべき方向がまるで違つてゐる、これをどうすればいゝのか、といふ不平と不安とは、遂に在廣島の飄亭宛の手紙となつて爆發した。この手紙は子規の當時の感想を大膽に正直に告白してゐる。左に要點を抄錄する。――子規書簡集より――

尙ほこゝに附記して置きたいのは、虛子と私の關係である。虛子は子規を看護しての歸京後、

私と別居して、戸塚村のもと古白の借りてゐた家に移つた。二人を一緒に置いては、依然として遊蕩に耽溺するといふ表面の理由であつたが、內實は子規の訓戒によつて、虛子は單獨勉强するつもりであつた。子規が「天晴兩大關こゝ一番の見物」など冷笑したのはこの時であつた。其後私は日本新聞社に通勤する都合上、神田淡路町の高田屋といふ下宿に移つた。子規と虛子の間にどのやうな事件があつたかは一切知らなかつたのである。

飄亭宛の手紙は先づ冒頭に

小生が心中は狂亂せり筆頭は混雜せり、貴兄は氣を落ちつけて讀んでくれ給へ

と書いてゐる。

こゝに一つ御報道可致事出來申候、單刀直入にては相分りかね候に付、はじめより叙を逐て可申候、小生が貴兄及非風と交際致居候際、貴兄よりも非風の方文學上の才能ありと思ひ居候事は僅かの間にて、非風は稍其正體を現はしかけ候故、貴兄に遠く劣り候は勿論、迚ものにはならずとて一朝見すて申候

それと同じく碧梧虛子の中にても碧梧才能ありと覺えしは其のはじめの事にて、小生は以前

よりすでに碧梧を捨て申候、併し虚子は何處(原文の儘)やりとげ得べきものと鑑定致し、又隨てやりとげさせんと存居種々に手を盡し申候、小生の身命は明日をもはかられぬもの、小生の相續者は虚子と自ら定め置候、しかも此相續者のたしかなる事は小生自ら人を鑑定する事の明を有せりと自ら恃み居りし心にて相分り可申、小生は何處までも之を信じ、貴兄はじめ誰人も能く之を信じ申され候事と存候、併し人間の智慧程はかなきものは無之候、小生は今日只今二人となき一子を失ひ申候、小生をして人を觀るの明なからしめたる者は實に此一窮措大高濱虚子に有之候、最早小生の事業は小生一代の者に相成候、三十有餘年だに保ち得べからざる此一代にて相終り可申候(下略)

小生須磨にありし時もしみ〴〵と忠告する處あり、且つ我が相續者は君なりと迄虚子に明言いたし候、虚子もやゝ決心せしが如く相見え申候、小生潜かに喜んで心に文學萬歳をとなへぬ、先月歸京してつく〴〵虚子の擧動を見る又是舊時の阿蒙のみ、小生が彼に忠告せし處は學問の二字に外ならず候、學問といふ語が小生の口を出て虚子の耳に入りしこと數百度以上なるべし、須磨にての忠告は實に最後の忠告なりし覺悟也、而して虚子依然たり小生呆然と

して詠め居候

頃日多忙なり碧梧は入社早々醜聞を流しおまけに無學の評あり新聞の益にはたゝず、小生は獨り悶々たる折柄、歡迎會送別會と暇なきを以て自分の仕事は一歩も進まず、稍氣遠ひじみたる折柄、最早堪へがたく相成、昨夜寒風凛々たるをものともせず虚子を訪ひ候ひしに虚子不在なり、小生の氣はいよ〳〵いらだちたり、直に手紙を發して今朝來れと命ず、今朝起きて待てども〳〵虚子來らず、けふはやけになつて分類に從事致居候へども虚子の事のみ氣になりて捗取り不申、やがて虚子の來りたるは十一時頃なりしならん、それより共に午餐をたうべ社へは不參の趣屆置、虚子を携へて道灌山に到り申候、小生未だ歩行に馴れず行程十町三四十分を費すやう〳〵に茶屋に腰掛けて手詰の談判をはじめたり（中略）つまり一言にしてつゞめなば、文學者にならんとは思へども、いやで〳〵たまらぬ學問さでして、文學者にならうとは思はずとの答なり、小生いふ

ソレナラバ子ト我ト到底其目的ヲ同シウスル能ハザルモノナリ

虚子いふ

厚意ハ謝スル所ナリ併シ忠告ヲ納レテ之ヲ實行スルダケノ勇氣ナキヲ如何セン

吁命脈は全くこゝに絕えたり、虛子は小生の相續者にもあらず、小生は自ら許したるが如く虛子の案內者にもあらず、小生の文學は氣息奄々として命旦夕に迫れり、今より回顧すれば虛子は小生を捨てんとしたること度々ありしならんも、小生の方にては今日迄虛子を捨つる能はざりき、親は子を愛せり子を忠告せり、然れども神の種を受けたる子は世間普通の親の忠告などを受くべくもあらず、子は怜悧也親は愚痴也、小生は箇程にまで愚ならんとは自ら知らざりき、小生蕭（悄カ）然としていふ、忠告を納れずとも子は文學者とならぬとは限らず、我も絕交するといふには非ず、只普通の朋友として交際し、今迄自ら許したる忠告の權利及び義務を拋棄すべし

（中略）

非風去り碧梧去り虛子亦去る、小生の共に心を談ずべき者唯貴兄あるのみ、前途は多望なり文學界は混亂せり、源語は讀了せしや如何、俳句は出來しか如何、小說は如何過去は如何現在は如何未來は如何、一滴の酒も咽を下らず一點の醫も之を惜む、今迄でも必死なり、されば

ども小生は孤立すると同時にいよ〳〵自立の心つよくなれり、死はます〳〵近きぬ、文學はやうやく佳境に入りぬ、書かんと欲すれば紙盡く喝ッ

かやうな告白を見て、子規の人物の一端の暴露とするのは早計である。病魔に襲はれた者の、其の發病時に感ずる發作のやうに、未來を否定する一種の幻想である。幻想を實體としての論據に立つ假定の演繹である。形而下の財產さへ、完全な繼承者を得るや否や不確實であるのに、形而上の文學に相續者を作ることの不可能な位、餘りに明白過ぎる事理である。併し自己の運命に杞憂を抱く弱者の心理として、何らかの支持者を得ようとする、其の孤獨に堪へない悶々の情は酌量すべきである。要するに病的焦燥の高潮であり、不安と危惧を紛らさうとする自己昂奮の對抗策である。

病氣が日を追うて重大となり、それこそ命旦夕に迫つた時でも、もう二度とかやうな幻想には囚はれなかつた、何らの焦燥も起さなかつた。死の雰圍氣の濃厚となるにつれて、心は愈々清澄に平靜であつた。

殊にかやうな激越な感情を爆發させて間もない翌二十九年には、雜誌「日本人」で、虛子や

私の俳句を擧げて過褒とも思はれる評論を書いたりした。次いで「明治二十九年の俳諧」を「日本」紙上に連載し、虚子と私を中心にして、始めて我黨の旗幟を鮮明にした一種の宣言文を書いたりした。

若し晩年の子規に、かやうな書信を見せて其の感想を叩いたとしたら、恐らく夢の如き舊事を一笑に附し去つたてあらう。さうして一時の罵詈讒謗も、後進に幸あれかしと希ふ眞の同情の迸發てあつた衷情を吐露したてあらう。言ふまでもなく過不及は總ての人間の弱點てある。常軌を逸する程度の子規の病的焦燥が我ら同人間を鼓舞激勵するのでなかつたら、明治俳句も當時に見るやうな長足の進歩を示さなかつたかも知れない。我らは子規の病的焦燥を冷評するかはりに、之に感謝の意を表するの外を知らないのてある。

明治廿九年以後の子規は、文學上の社會人として多くの人の耳目に新たなるものがある。本編は主として、社會人として立つまでの子規の面目の一端を書かうとした。

私の見た子規は、到底私の見た子規である。其の全豹は愚か、其の一斑をも表示し得なかつたかを畏れるのである。且つ記憶の粗雜な爲め、事實を誤つた點も少くないことをも患へるのである。正確な史料によつて訂正したい。

明治廿九年以後、其の死に到るまでの回想は、他日改めて筆を執る機會のある事を信じたい。

固と斷片的の回想に、何らの精彩のありやうはない。若しこの回想記に多少なりとも興味を惹き得た人があるならば、そは言ふ迄もなく、子規の偉大なる投影に過ぎないのである。

附　錄

一　母堂の談片

赤ン坊の時はそりや丸い顏てゝ、丸い顏てゝよつぽど見苦しい顏でございました。鼻が低い〳〵妙な顏で、ようまア此頃のやうに高くなつたものぢやと思ひます。十八位からやう〳〵人並の顏になつたので、ほんとに見苦しうございました。大人になつてあれ程顏の變つた者もありますまい。

六つ位からもう髷を結ひました。父親が早くなくなつたので殿樣へお目見えをせんならんので（大抵八つ位からお目見えをする）ございましたが、御維新になつてそれはせずにすみました髷を結うたなり、三並（良氏）のと二人で小學校（法龍寺內）へ通ひましたが、たつた二人ぎりが

髷を結うて居るので、大變いやがりまして、切つて呉れ〳〵言ひました。

上下着の時には(五歳の十一月十五日)金巾の紋付をこしらへて、上下は佐伯の久さんのを讓つて貰うて、大小は大原の元のを貰うてさしましたが、何様背が低いので、大小につらされるやうぢやと笑はれました。背が低かつたのはえつぽと低かつたと見えて、大原の祖父が、朝暗いうちに門に出て居つて、何か知らん小さいものが向ふから來ると思ふと、それが升ぢやつたなどゝ話をよくして居りました。

小さい時分にはよつぽどへぼで〳〵弱味噌でございました。松山で始めてお能がございました時に、お能の皷や太鼓の音におぢて〳〵たうとう歸りましたら、大原の祖父に、武士の家に生れてお能の拍子位におぢる、とそれは〳〵叱られました。近所の子供とでも喧嘩をするやうな事はちつともございませんので、組の者などにいぢめられても逃げて戻りますので、妹の方があなた石を投げたりして兄の敵打をするやうで、それはへボでございました。

小學校へ行く其前に、祖父の處へ素讀に參りますが、朝暗いうちに起しますから、なか〳〵起きませんので、毎朝々々蜜柑やお菓子を手に持たしては目をさまさせます。さうせんと起き

ませんのよ。
祖父は大變升を可愛がりまして、升はなんぼたんと敎へてやつても覺えるけれ、敎へてやるのが樂みぢやというて居ました。
小さい時は左りぎつちよでございましたから、大原の祖父が、お前はお客に往つても一番左りへお坐りよ、さうでないと、まんなかでは人の邪魔になるけれ、というて居りました。學校へ行くと先生が右でおたべなさいといはれるので、お辨當はどうしても持つて行きません、右でたべるやうになつたのは、ずつと後のことで、此頃でも寢やうによりましては、左でたべて居りました。
升が三才の時、大原に何かお客事があつて、私と二人で泊りに往て居りましたら、火事ぢやや〳〵といふので仲間が見て來ましたら、大變々々正岡が火事ぢやと言ひます。そとで升をおんぼして歸つて來ますと、もう火事もお仕舞ひになつて、龍吐水も去ぬる、提灯が澤山戻つて來ますのを見て、升が大變喜びました。それから後は何でも燒けた〳〵と言ひまして、ハンコ（頭のヤツコのこと）を落した時も「ハンコ、ヤケタ」ともとらぬ口で言ひました。
物言ひを覺えるのが、えつぽど遲うて、三つの時にも「ハル」といふ下女を呼ぶのに「アブ

〳〵」といふて呼んで居りました。物言ひばかりか、手さきもえつぽど鈍で、紙鳶もえゝあげず、獨樂もえゝまはしませんでございました。

何でもすきな物といふと、南瓜と西瓜が出よつたてい。

髷を切つて後も小さい刀をさして居りましたが、餘戸(ヨーゴ)の祭りで田舍へ行きました時、誰かゞ拔いて見い〳〵といふたけれども拔けませんのを、陰へ廻つて裏の畑へ出て自分でどうやらかうやら拔きましたら、手を斬りましてな、それでうちへは歸れないといふので、シク〳〵泣いて居つたこともあります。

小學校に影浦先生といふのがありましたが、そこへ本を習ひに三並の從弟と一所に行きよりました。夜が遲くなると、私どもが向ひに行き參りました。先生の處では本を讀んでもらひますより、話をしてきかして貰ふのがすきで、それで遲くなるのでございました。大方八犬傳や何ぞの話でございませう。

或時丁度米藤(コメトウ)(大きな呉服屋)の塀の上から、女が顏を出して居たのを晝見たといふので、歸りにそれを想ひ出して、恐がつたこともございました。

大街道の軍談(講談)をよく聞きに行きよりました、三並の從弟と二人て。小遣のない時には、永井といふ處て其錢を借て行きよりました。何でも一錢の木戸錢が少し遲く行くと、天保錢一枚ですむとかいひますのでございましたが、それが後にわかりまして大變に叱られました。

大原の祖父が死にましたのは升の九つ位でございましたが、祖父が何やら管のやうなものでお藥を飮んで居りましたのを大變に羨しがつて、其後自分が病氣をしたら、管でお茶を飮まして吳れといふてきゝませんので……。

私の祖母に當る人は名うてなやかましやでございましたが、升には目も鼻もないやうにやさしうしまして、それは〳〵えらい自慢をしよりました。まアあんな自慢がよう言へる事よと思ふやうな事を言ひまして……升も其曾祖母にはよくなついて居りました。

加藤の弟(恒忠)が四書五經を終つた時に、歌原のおじいから、何やら彫つた印行のやうなものと肉とを入れた箱を貰ひましたのを、升が四書五經を終つた時に讓つて吳れましたら、大變に喜んで、大事に〳〵して居つたのに、泥棒にとられて仕舞ひました。

中學校に行きよります中に、東京へ出たがつて〳〵やかましういうて居りましたが、加藤の

弟から、西洋へ行く前に來いというて來ましたので、飛上つて喜んで、丁度大原の叔父は留守でございましたから、佐伯の叔父の處へ飛んで往つて……來いといふ手紙の來た翌々日松山を出立しました。單衣物を一枚こしらへるといふので、夜通し縫うた事など覺えて居ります。

字は山內傳藏さんといふ人の處へ一年も習ひに行きましたか、判紙へ物を書くことが大すきで、昔から半紙はよく使ひよりました。

十三や十四の時分に類似コレラに罹りましたが、丁度盂蘭盆の頃で、松山ではよく味噌をつきますが、其味噌豆を澤山たべたのでお腹を下したのでございます。病氣は別にわるいといふこともないので、七日許りして家の內では遊ぶやうになりました。

松山の立花神社といふ天神樣へ、六月二十四五日の二日のうちに、大文字というて大きに字を淸書してあげると、手があがるといふので持つて行まよりました(此習慣今尙ほ存せり)が、升は唐紙や畫箋紙などへ二三人のよせ書きをして大きな〳〵ものをこしらへて、松の木の枝などへ吊るのを樂しみにして居りました。七夕竹を立てる時も、短冊が多いぢやの少ないぢやのと妹といひ合つて、すき好んで書きました。——以上「子規言行錄」より——。

○

われ〳〵子規に親炙した者の間で、子規を「先生」と呼んだこともなく、「師」とも「翁」とも言つたことがない。本名の「升」を國風に訛つて「のぼさん」といふ「さん」づけで終始して來た。之は、國の士分格の交際の習慣で、敬意も籠められてをり、同時に分け隔てのない親しさを表明してゐた。「君」といふより「お前」と呼ぶ方に、ずつと同輩視した親しみを感ずるやうに、そこには同鄉同族同年輩の、お互ひが一つになつた悅びの無量なものが籠つてゐた。

○

のぼさん、といふ呼び方にそぐふやうに、お互ひの話も、松山言葉の丸出しで、言葉を謹むといふやうな懸念をしたことがなかつた。ザツクバラン、といふのでなく、あたり前の言葉を、あたりまへの調子で話すのだつた。國風の言葉には和らぎと親しさがある、と言つて、茶目な

墨水――梅澤墨水、亡、東京生れ――など、よく松山辯の物眞似をしたものだ。當時大阪に移住した墨水は、子規を呼ぶに「のぼさん」と言つたりして、大阪人に通らしく振舞つたともいふ。

○

根岸の宅に往つても、案内を乞うたことがない。默つて上りこんで、おばさん――母堂――なり、おりつさん――令妹――なりの顏を見ると、始めて挨拶をする。折あしくお二人とも見えねば、ずつと座敷まで通つて、ぢきに病人の枕頭にすわりこむ。アラ……リツがもんたかと思うてゐたのに……と却つて、おばさんの方で恐縮される。

先客があらうが、あるまいが、お客様が知つた顏であらうと、あるまいと、病人が起きてゐようと、寢てゐようと、苦悶の聲を發してゐようと、ゐまいと。この一家のどのやうな事情にも無頓着でよかつた。それほどわれ〳〵には自分の宅のやうであり、內證も祕密もなかつた。

○

さういふ家族氣分の書生に、何らの接待も不用であつたのだが、きつと茶をくまれる。茶菓

子を出される。茶菓子は大抵岡野の煎餅だつた。丸い豆入り、細長い芭蕉の葉の形をした、それらだつた。いつもかはらない煎餅、といふやうな氣もするのだつた。この煎餅も、お客様が一つつまむ前に、病人の手の出るのを例とした。

○

茶は番茶煎茶一定はしてゐなかつた。急須でなく、大抵は土瓶だつた。どういふ珍客にも、我れ〳〵書生にも、同じ土瓶と茶碗であつたといふより、客に出す茶器は、あとにもさきにも一通りしか備へてなかつたやうだ。

秀眞君が、蝕くつたやうな、鐵の茶托をこしらへたのは、ずつと後のことだが、それが出來てからは、單り藝術品らしい茶托ばかりが光るやうになつた。

○

來れば長坐をする。半日話してゐても、病人の方から話題を出してくれるから、だんまりで向き合つてゐるやうなこともない。きつと晝飯か、夕飯の御馳走になる。親子とか鰻とか、丼の註文をきかれる。そのころ、晩酌の特典を許されたのが、虛子一人だつた。

どういふ酒が出たか、酒の可否などを飲み分ける時代でなかつたから、もとより徳利や盃の贅を考へるひまもなかつた。

病人でなかつた昔から、のぼさんは下戸だつた。酒の味、といふものを知る機會なしだつた。尤も、酒の味なんか、どうだつていゝ、といふだらうが。

一歩をすゝめて、酒飲んだ酔態を罪悪と考へる、或る程度の道徳觀を持つてゐた。酒に呑まれるのを、一種の痴呆だとも考へてゐた。誰でも、自分の嗜好に、何らかの合理性を發見したがるものだが、のぼさんは、むしろ强硬に、其の合理性を支持する傾きがあつた。若し假りに、のぼさんが大酒飲みであつたとしたら、とよく我れ〳〵の間で問題にしたものだつた。なぜなら、自己の嗜好に合理性づけるか、それとも理想的に節酒の模範を示すか、一寸解答を難得い論議の種であつたからだ。

〇

いくら食ふことだけが、一日の樂しみであると言つても、あゝしてよく食べるものだ、と我れ〳〵の健康者をいつでも驚かしたものだ。親子でも鰻でも、丼一つを食ひ殘すといふことは

なかつた。「病牀六尺」であつたか、自分の健啖を、胃腸の丈夫な爲めでなく、齒の健康によつて、よく咀嚼した爲めだ、との解釋を與へてゐる。よく嚙む、といふのと、大食とは、一所にはならない筈だ。よく嚙んで、時間をかければ幾分小食に傾くのが普通なのだ。が、のぼさんでは、それが一つに、合理に考へられるだけ、健胃健腸であつたのだ。

まだ、常盤會寄宿舍にゐて、時には野球のノックなどをやつてゐた健康當時、大袋に煎餅を買つて來て、友達の部屋へ話しに往つたりしても、それを平らげる大株主は、のぼさん自らであつた、といふやうな話も想ひ出される。若竹といふ壽司屋にもよく往つたものだが、我れ〳〵が食ひ殘すと、若いに似合はんな、と見せしめに二人前位、樂に食うてゐた。

○

食後には、大抵果物をとつた。柿時分、蜜柑時分、時には林檎、梨など、其の顏を見ないことはなかつた。柿は中でも好物であつたと見えて、樽柿が出はじめる、と午後のお八つにも二つ三つ、いかにも食ひ足りなさうにたべた。

奈良に泊つた時、美しい娘が御所柿を山のやうに盛つて出した、といふ話をするのでさへ、

如何にも、其の一つを手にでもしてゐるかのやうに、嬉しさうであつた。

が、奈良の御所柿、岐阜のふゆ柿、さういふ高級品でないと、など﹅いふ贅澤は言はなかつた。言はなかつたのでなくまだ知らなかつたのだ。東京で一番うまい、安物の樽柿で滿足してゐたのだ。

柿ばかりではない、食べもの﹅贅澤といふことを知らない、書生氣分で終始したのだ。食べもの﹅贅澤を知るまで生きてもゐなかつたし、懷ろも乏しかつたのだ。

○

さう言へば、書生時代には、舊藩主の給費生であり、外交官の叔父があり、學資には餘裕のある方で、他の貧乏書生を羨しがらせたものだ。書生の贅澤だから、多寡の知れたものだつたが、それでも、其の一生で、最も金といふ心配のない時であつた。家をもつて、家族と同棲してからは、月給十八圓をふり出しに、出來るだけの、今までとは打つてかはつた緊縮生活をした。いくら果物が好きだ、と言つても、西瓜、葡萄など錢目なものを常備して置くことは、懷ろが許さなかつた。

○

新海非風は、當時では、幾分不良性を帶びた、デカタンな書生だつた。たしか、明治二十四年の夏だつたと思ふ。のぼさんと連れ立つて歸郷してゐた。何とかいふ芝居小屋に、田舍まはりの歌舞伎がかゝつてゐた。神靈矢口渡をやつてゐた。座頭のお舟役を見て、非風が、馬鹿にノツポなお舟だと言つて笑つたりした。東京の芝居を見つけてゐた非風には、馬鹿らしく埃りくさいものだつたらうが、のぼさんは、頓兵衞役が氣に入つたらしかつた。東京にゐても、當時の團菊左を始め、二錢團洲の粂八さへ、ロクに見たことはなかつたのだ。芝居を出てから、もう夜も更けてゐたが、非風が途中で西瓜を買つた。丁度月の明るい夜だつた。この良夜を如何せん、てなことを言つて、のぼさんも一所に、石手川の川原まで引張つて行つた。そこらの石に西瓜をぶつつけて、手づかみで貪り食ひながら、今夜は大いに振つたな、と大恐悅だつた。非風は、別に醉つてゐるのでもなかつたが、大はしやぎにはしやいで、のぼさん、どうぞな、これから道後いてもおいきんか、など遊蕩氣分を唆つてゐた。ハツハツ、馬鹿お言な、とのぼさんは輕く打消してゐた。日清戰爭に從軍する時、廣島の宿で、命令一下を待つてゐる間が、

隨分永くて退窟に堪へなかつた。毎晩ヘラ〳〵踊を見に行くのが、夜の日課であつた、といふやうな話を、社の同僚がした時も、のぼさんは心持顔を赤くして、ハツハツと輕く笑ひにまぎらしてゐた。遊蕩氣分を低級下劣と考へて、有り餘る時間を少しでも有效に費消したいと念じてゐた人にとつては、月明の夜、川原で西瓜を割るだけの脫線氣分も、恐らく一生中の著しいエピソードであつたであらう。殊に、われ〳〵のやうな後輩の前では、一層先例にならぬやう、言行をつゝしんでゐた傾きがあつた。言行をつゝしむ、といふより、われ〳〵と平生話すことが、文學上の批判、評論、希望など正々堂々とした美しい熱烈さを持つてゐたから、さういふ手前、度はづれた脫線氣分を否定こそすれ、肯定することを疚しく思つたのだ。日清戰爭に出かける時でも、われ〳〵には判紙數枚に書いた、論文とも、又た遺言狀とも見える訣別文を殘して往つたのだから、廣島でヘラ〳〵踊りばかり見てゐた、と言はれるのは、少々バツがわるかつたのだ。

○

健啖のせいでもあつたか、持論といふ程のものではなかつたが、二タロ目には、御馳走論を

振りまはして、人間食ひ物を吝むやうでは、何事も出來ない、と一言に喝破してしまつた。財産收入の許す限り、ウンと御馳走を食へ、と誰にでも侑めた。阪本四方太は、總てにつゝましやかな、几帳面な男であつたが、鳴雪同樣、骨と皮のやうに痩せてゐた。寫生文の振つた時代は、さうでもなかつたが、二三度書いたものが餘り出來がよい方でないと、きまつて、四方太も、もちつと御馳走を食はんといかんなア、と心から歎息したりした。其の癖、四方太は、これでも子規先生より御馳走を食つてゐるつもりだ、と言つてわざ〳〵辯解に根岸まで出かけたりした。

○

松山で、土筆のことを「ホシコ」といふ。ほしこ取りには、女子供を引具して、一家で出かける習慣さへある。近い郊外には、取り盡したのか、容易に其の姿を見ない。やつと草の中に頭だけ出した土筆を、蚤取り眼でさがし廻る。それでも鬼の首をとつたやうに喜ぶのだ。自然松山人には、土筆ずきが多い。のぼさんも、其の例に洩れないで、春になると、もうそろ〳〵土筆が出るな、とよく噂さをしたものだ。「墨汁一滴」かに、妹のおりつさんが赤羽から土筆を

とつて來たので土筆の連作歌をつくり、長々と其の記事をさへ綴つてゐる。妹のよろこびを、自分の喜びにしたのだ。赤羽の土筆といふのが、松山などでは、乞食の婆さんが、たまに賣りに來るやうな、四五寸から一尺位、瑞々しく伸び〳〵したものであつたのが、鎌で刈りたいほど叢生してゐたのだから、松山のほしこ取りしか經驗しない人には、財寶を山と積んだよりも、無上の享樂であつたのだ。

土筆は、袴をとつて、一度茹で捨てながら、梅干を少し入れて煮びたしておく。酒の相手には、茹で捨てたのを三杯酢にするもよい。赤羽の土筆は、三度々々、幾日間のぼさんのお膳にのぼつたことか。

莖のすき頭のすきや土筆　太祇

と古人も相應に研究してゐるよ、だがなわれ〳〵は莖でも頭でも、お構ひないのだから、と、毎日の土筆を食ひ飽いたとも言はなかつた。

〇

明治三十四年の春、目黑邊を散歩して摘んだ土筆が、やつと小さな盞物に一杯あつた。時候

が早かつたので、頭ばかり一寸に足るのも少なかつた。何はともあれ、これでも病床を賑はすであらうと、根岸へもたせてやつた。久しく土筆など口にしなかつたのと、量が少ないのとで、病人の喜びは、側で見てゐる使ひの者も面目をほどこした程だ。後で會つたら土筆は、あんなに短かく切り揃へんでもエヽのぞな、とニーツと眼もとに皺をよせて笑つた。

○

嫁菜は、よく八百屋から買つて胡麻和などにした。長塚節から「タラ」の芽を送つて來た、と言つて珍重した。桑の實をたらふく食つた木曾旅行の想ひ出話。榎の實、椋の實、茱萸山桃のそれ〴〵に變つた味を持つ話、いづれも幼い頃をなつかしむのだつた。われ〳〵がもつと、今日のやうに食味についての知識をもつてゐたら、どれほど當時の病苦をまぎらし得たことだらう、とつひ〴〵三十年の昔を追想する。

○

鳴雪をはじめ、われ〳〵仲間は、どれも貧乏書生で、今日を食ふに追はれてゐた。伊藤左千夫、岡麓などいふ歌よみ仲間が出來てから、俳人とは違つて、財産もあり、商賣も大きかつた

ので、月々いくらかの金を小遣ひによこすことになつた。病床の上へ、木綿の財布をつるして、其の小遣ひをながめては樂しんでゐたこともあつた。われ〳〵が行くと、けふは僕の小遣ひでおごるから、何でも好きなものを註文おしよなどうれしさうにいふのだつた。そんなに餘計な小遣錢を持つことが樂しみなのか、と驚きもし、何やら涙ぐましくもあつた。丁度そこへ、よか〳〵飴屋が、鉦太鼓ではやして來たのが裏戶近くにきこえた。早速、財布から何程かを出して、大急ぎで買はせにやつた。そして、アヽいふ振賣りものは、滅多にかういふ奥へははいつて來ない。何だかのびやかて、きいてる氣持のいゝものだ、獎勵の爲めに買つてやると、又た來てくれるけれな、と言つて、獎勵の爲めに串ざしの飴もたべた。

○

ほとゝぎす發行所が、まだ猿樂町にあつた時分の闇汁會、露月が醫者になつて歸鄕する時の送別の柚味噌會、いづれものぼさんの發案であり、又た趣向であつた。三十五の誕生祝ひでもあつたか、平生の親しい仲間へ何か御馳走を持つて來いといふ註文の上に、それ〴〵色の題が附け加へられた。鳴雪には白、虛子には赤、四方太には綠と言つたやうな命令だつた。虛子が、

ニコライの宗教の儀式でやる方法だと言つて、雞卵を赤く染めて來たのなどが、眼立つてゐた。のぼさんの發案の會には、きつと食物が主題になるのだつた。

○

いつかの持より會の時、左千夫が、けふは「シシ」を持つて來た、と言つた。私が、七りんに火を起して座敷へ運ぶと、それどしたんぞな、といふ質問だ。だつて左千夫君が猪を持つて來たといふから……段々きいて見ると「スシ」と「シシ」の發音の聞きまちがひで、大笑ひになつた。

○

日清戰爭から歸つて、病ひ危篤に瀕した時母堂に侍して西下した。ベッドもカーテンも眞白な、神戸病院の一室にのぼさんを見出した時は、息もつまるやうだつた。少し元氣が出て、何か食つて見たいと言ひ出したのが、丁度時候が苺であつた。毎朝病院の上へ、苺を摘みに行く。それが虚子と私と交代の日課だつた。朝まだ日の出ない時分、露と一所に病床へ持つて行くのだつた。何かしら賴もしい、病人の喜ぶ顏を見る、ア、いふ愉快な苺摘みは、再び經驗さ

れない、尊くも潔い日課だつた。

〇

コーヒーも角砂糖時代、紅茶も輸入の少ない頃、本當のコーヒーも紅茶も味はずに了つた。よく病床日記に「紅茶一杯」などゝあるが、どういふ質の紅茶を、どういふ入れかたをしたか、今から思ふと氣の毒にもなる。

書生時代は、氣の利いた當時のハイカラであつたのだから若し健康であつたら、今日のやうにカフエーの發達した時では、どこかの常連になつてゐたかも知れない、とも想像される。少くも、どこのコーヒーが一番うまい位の通にはなり得たであらう。西洋料理といふものも、根岸邊では、とりよせる程のものもなかつたが、さまで興味も持つてゐなかつたやうだ。けれども、上等の肉で、ダブルビフテキでも見せたら、きつと垂涎三尺であつたであらう。

御馳走といふのも、主として肉を食ふことのやうであつたから、一週に二三度はロースやサシ身が食膳に供せられてゐた。

ロースも、かうやつて皿に盛つてしまつてはおしまひだ。豐國や江知勝で、鍋をつゝいた昔

が想はれる、と言ひ〳〵した。豐國あたりて、凡そ何人前位平げてゐたかは誰も言ひつたへてゐない。

○

われ〳〵が家庭以外て會食したといふのも、ホンの數へる程だ。京都から仙臺の二高へ移る途中、どこでか虚子と二人御馳走になつた。何でも上野邊の肉屋であつたやうだが覺えてゐない。

いよ〳〵從軍のきまつた訣別の日、神田の鳥屋で、三人あつさりした夕飯を食べた。

私が「日本」へ入社したのは、のぼさんの留守になる手傳ひかた〴〵であつたが、入社のきまつた日、同じ鳥屋へ引張つて行かれた。社員で編輯になるなどは、少し僭越だ、校正で澤山なのだが、非常な好意と思つて勉强せよ、知つてもゐるとほり、社は皆有識階級のエラ者ぞろひだ、そこもよく心得ておけ、社員となれば、もう一種の公人で、ノラクラ書生とは一つにならない、と可なり嚴格な注意をされた。尤も、二高を中途でやめて、東京でブラ〳〵してゐる間の、われ〳〵の生活は、荒んだ滅茶々々なものだつたのだから、ドンなボロを出すか、のぼ

さんとしては此上もなく心配だつた。同じ社員になるにしても、自分が監督してをりたかつた程だつた。で、この一夕の會談は、千鈞の重きをなすのだつた。私は、鳥も飯も、何を食つたかわからなかつた。

それでも、廣島からは、社宛によく手紙が來た。さうして鳴雪、虚子の三人で合議的に選をする筈になつてゐた、「日本」の俳句欄について、口やかましい程の注意をよこした。

實際、總て聰明な人のするやうに、他人が馬鹿に見える鋭さを持つてゐる明敏な頭では、人に仕事を任せる事は出來なかつたのだ。われ〳〵は其の爲めに、苦い經驗も嘗め、萎縮もしたが、それがどのやうな陶冶になつたかを顧みねばならない。

のぼさんとの會食は、以上の三回位のものだ。お互ひに少し餘裕が出來て、鳥や鮓や天プラやの、東京名物でも食つてあるけるやうになつた時は、もう進退の自由を奪はれてゐた。

○

地方の俳人から、土地の名産を贈つて來るのも、日ましに多くなつた頃だつた。どうも、うちの奴ら、よそから物を贈つてくるのに馴れてしまつて、まだ來ないの、こんなものをなど、

けしからんことをいうてな、と不平らしくこぼしたことがあつた。大方無意識な家人の失言を捉へての話であつたであらうが、他人との交渉には、先例に狃れない、潔い自己を把握してゐた。

出版經營法に、不純な、聞き捨てにならないことがあると言つて、當時の博文館を敵のやうに忌避したのも、同じ心理だつた。われ〳〵も、それをきかされて、同じやうに博文館といふと唾を吐いたものだつた。

○

かういふ話には際限がない。

こんなつまらない日常の瑣事によつても、子規といふ人間が、どこかに仄めき得れば、筆者の意は達せられたのだ。

年をふるに隨つてありし昔が、いよ〳〵鮮やかに眼前に浮んで來る。以上の話も、總て私の記憶を喚び起して、何ら文書によつたのではない。——以上「日本及日本人、子規記念號」より——。

三　家庭より觀たる子規

七月初旬より下旬へかけ三四回、根岸に律子刀自をお尋ねして、いろ〳〵懷舊談に耽つた。かねて子規研究の一助ともしたいと考へてゐたので、お話の要領を筆記して、尙ほ刀自の再閱を煩はした。

○

（碧梧桐）先づ順序として、幼少の頃からの御記憶をたどる事にしますかな………まだ誰もが知らないと言つたやうな逸事はありませんか。

（律子刀自）サア、兄がまだ小學校にも上らない前のことであらうと思ひます。自分もはつきりは覺えてゐませんが大原へ素讀にも行きます時分、佐伯にも——御承知の通り佐伯は父の出た家で、子規には伯父にあたる——手習ひに往つてゐました。そのことは「筆まかせ」にも

書いてゐるやうですが、或時、伯父が不在て、しばらく待つてゐる中居合した從兄――名は正直、兄さん〱と呼んでゐました――が、俺が敎へてやらうと言つたら、お歸りまで待つてゐます、と言つてきかず。そんなら、そこお動きなよ、と言はれて、可なりな時間、ぢつと坐つたきりでゐました。やつと伯父が歸つて、サア敎へてあげようと兄の樣子を見ると變だし、又た部屋中が妙に臭い。升さんどうかおしたか、と言つても急に返事もしない筈、べつとり大便をしてゐたさうで、あとで、どうしてあんなことをしたのか、と詰問すると、それでも、そこお動きなよ、と言はれたからだ、と言つたさうです。

（碧）稚い時世話になつた、といふ小島ひさとか言つたお婆さんのことも書いてをられますが、あのお婆さんといふのは？

（律）あのお婆さんには兄初め私まで、たゞ世話になつたといふ位でなく、まア育ての親と言つてもいゝ位、可愛がられたものでした。

固と私の家には、父の上の祖父がなくて、曾祖父にあたる老人がありました。くはしいことはわかりませんが、其の曾祖父の後添ひ、といふやうなことで、あのお婆さんが來られたので

あらうと思ひます。

なぜ小島姓であるかは、私も存じませんが、小島家は、何かお咎めをうけるやうなことがあつたらしく、斷絶同樣になつてゐました。隨分貧しい暮しをしてゐたやうで、長男は永井といふ家へ養子に行き、二人の子供は坊さんにしたとも聞いてゐます。其の後中島（忽那七島の一つ）といふ島の人に緣があつて再婚されましたが、どういふ譯でか、其の島を逃げ出して、一時松山に隱れて見えたこともあるさうです。島にも子供があつたとかで、其の主人が行方を探して、見つけたら殺すなどゝ血眼になつてゐた、とも言ひます。そんなことのあつた後、世話する人があつて、宅へ見えたのであらうと思はれます。其の島へ再婚される時お上から「捨て遣はす」といふのでお許しが出たともいふので、宅へ見えても入籍するといふことが表向き出來なかつたのでないかと思ひます。――お婆さんがいつまでも、戶籍面にも、小島姓であつたわけは以上の通りでありますが、道後へ別に葬つたといふのは、丁度其の當時、市內には土葬が出來ないことになつたからです。お婆さんは、死んでも燒かれるのはイヤだと言つてゐました。

又たお婆さんは、大變な酒好きて、いざ飲むとなると、お祭の時や、お客にでも往つた時は、ずゐぶん女らしくもなく醉つて騷ぐ人でした。醉ふと、よく口癖のやうに、小島家は、こんな正岡のやうな成上りもんぢやない、キンキンのお侍ぢや、と言つてゐました。しまひには呂律もまはらない程になつて何か唄ても謠ふ手拍子を打つのに、其の手がチグハグに合はない位、前後正體なかつたこともあります。サアどの位飲みましたか、さ程でもなかつたでせうが……。

○

兄は泣蟲で、よく夜泣をしました。母は初產といふのでまアお婆さんが引きとつて世話をやく、といふことになつたのでせうが、お婆さんから言へば、ひゝ孫にあたる私達を、孫のやうに思つてゐたかも知れません。左樣、お婆さんは當時六十そこ〱位であつたでせう。

母は御承知の通り、何事にも驚かない、泰然自若とした人でしたから、初產でなくとも、少し氣のつく人なら、母任せには出來なかつたかも知れません。まして、いろ〱功を經たお婆さんでしたから、私達も自然お婆さん子と言つた風になつたのかも知れません。叱られると怖かつたことを覺えてゐますが、ふだんは、よく甘えて往つたものでした。

正岡の宅が火事で燒けたのは、兄の三つの年であつたことは、些しも疑ひのないことです。それも、母や子供の不在中、お婆さんの晩酌が過きて、共の火の始末がわるかつたやうにもきいてゐます。母も嫁入つてさう間もないことで嫁入道具抔も何一つ殘らないで燒けたのでしたが、それすら、殘念さうな顔一つしなかつた、と當時の話草にもなつた、といふことです。

○

（碧） お婆さんの存在が、大變はつきりして、幼少時の家庭、家の空氣といふやうなものが、今まで我々の知らなかつた新らしいものを想像させます。それと言へば、升さんには、お母さんの悠暢な氣分がちつとも傳らないで、むしろ反對にキビ〱克明であつた、といふのは、養ひ親のお婆さん化されたといふやうなこともあるのでせうか。

（律） 私共には、大分佐伯風が……お婆さんより、佐伯の家風が、まア遺傳してゐるとでも言ひますか。佐伯風といふのは、親類中にも一際目立つてゐたと見えて、又た佐伯風だな、などよく言つてゐました。何でも曲つたことのきらひな、眞ッ正直と言つた堅苦しい氣分でした。泣き蟲であつた兄は、また弱蟲て、あの時分の遊び、凧をあげた事もなし、獨樂を廻すでも

なければ、縄飛び、鬼ごつこなどは、まして仲間にはいつたこともありますまい。どうかして表へ出ると、泣かされて歸る、と言つた風でした。自然稚い時には、別に友達といふものもありませんので、まア佐伯にでも行くのが、とつておきの樂みでもあつたでせう。佐伯の家は、其の後郷居して、余戸村に引越しました。佐伯の買うてはいつた家は、染物屋であつたらしく、藍壺などいくつもあつて、伯母などせつせと綛をくゝつてゐたのを覺えてゐます。

毎土曜日から日曜かけて、泊りがけて、其の余戸村へ遊びに行きました。いつでも兄と二人でした。持つてゆくお土産といふのが、瓢箪に一杯のお酒でした。佐伯の伯父も其の方では豪の者てあつたのでせう。

(碧) 私の子供時分にも、あの中ノ川から正宗寺の方へ曲つて行く、雄栗村へ出る場末には、小さい汚ない家があつて、よく喧嘩を吹かける腕白がゐました。武士に對する町人の反感とでもいふのですか、一人で通る時などは、怖ワ〲走りぬけたものです。升さんも、きつとそんな腕白を怖がつてゐたんでせう。御一緒のあなたは、差し詰め護衛格なんですな。

(律) いえ、さうでもありませんけれど、佐伯に行く樂みは、すぐ前の小川で蜆を掘つたり、

田圃の田螺を拾つて、出合邊へ蝦を釣りに往つたりする……伯父や從兄がよく遊ばしてくれたからでした。田螺の身を絲で縛つて、それで蝦を釣るのでした。今ではどうか知りませんが、大方手長蝦といふのでせう。子供でもよく釣つたものです。

○

（碧）松山では、子供にお灸をすゑる習慣があつて、我々時代まで、可なり頑強に壓迫したものですが、無論升さんもすゑられたことでせう。

（律）私どもの宅では、二八月と言つて、一年に二度すゑました。一個處に五十位づゝ、背中と横腹と腰とへ九個處位据ゑましたから、やがて半日仕事でした。このお灸は、東京へ遊學する時まで、ずつと續いてゐました。

お灸をすゑると、すゑ賃といふので、兄はいつも大和屋——其の頃の貸本屋——から、例の八犬傳だとか、弓張月だとか言つて小說本を借りてゐました。

小說本の借り讀みのことは「筆まかせ」にも一寸書いてゐるやうでした。

それから稚い時分、南瓜が好きだつたとか言ひますが、何分貧乏士族のことで、ロクに魚類

などよう買はなかつたせいもありませっ。篠原の從姉――篠原邦貫の妻忠子(たゞ)――の話に、父が亡くなつた時、お悔みに豆腐でも澤山貰ひましたのでせう、兄がもとらぬ口で、オトーチがタントあると言つたとか言ひます。

（碧）餘り外出もせず、學校でもすめば、いつも內へ引込んで、勉强ばかりしてゐた、そんな風にも見えますが。

（律）小學校を卒業する時分の事であらうと思ひます。兄の爲めに、三疊の書齋と言つたやうな一間が出來ました。それが出來た後は、大抵そこに閉ぢ籠つて、何をするのか家人にもあまり顏を見せない位でした。

其の時分、母が裁縫を致へるので、方々の娘さんが毎日見えてゐましたが、さういふ人達などにも、目もくれないと言つた風でした。

時々、私が算術が出來ないといふので、致へてやるから來いなど、言つたこともあります。兄は親切に致へてくれるのでしたが、こちらの呑み込みがわるいので、よく泣いてしまひました。

（碧）立花神社の大文字――私どもでは、オモジと言つてゐました。お祭の日に大きな字を

書いてあげると、手が上手になるといふ、昔の話らしい習慣、あれも無論お書きになつたのでしたね。

（律）おもじ、私ども女は、オモウジ、と長く引張つたやうに思ひます。兄も、けふはオモウジの日だ、といふと、其の日に限つて、判紙をついだりしないで、唐紙と言ひましたか、大きな一枚紙を買つて來て書いたりしました。

ついでに、一人の男の子でもあり、外に小言をいふやうな人もゐませんでしたが、たゞ紙をよくつかふ、と言つて母からさい〳〵ぶつ〳〵言はれてゐました。大方寫し物や書き物に、人一倍判紙をつかつたものと見えます。

（碧）五月のお節句について、升さんの爲めに特に作られた幟とでもいふものがありましたでせう。

（律）幟は其の當時の習慣で、男の子が生れた家では、きつと立てましたやうですが、宅では手織の布で作つたといふことです。が、三歳の時の火事ですつかり焼きましてからは、もう二度と作りませんでした。

（碧）初めて久萬山、岩谷寺へ旅行されたことも何か書いてをられますが、それについての御記憶は？

（律）十五の時、お友達と岩谷寺へ往つたといふことですが、それについては、何の記憶もありません。

次ぎに大洲へ往つたといふのは、其の翌年十六の年かも知れません。大洲から何か商ひに來る男が、よく宅へ泊りに來ました。サアどういふ商人でしたか、きつと宅にばかり泊つて行くといふのでなく、外へも泊るやうでした。その男が、兄を伴れて往つたと記憶します。何日位泊つて歸つたのか、又た歸りも其の男と一處であつたのか、それはもう忘れてしまひました。脚絆に草鞋でも穿いたのでせうか、途中車にでも乘つたものか、大洲への途中、中山村邊で一泊したものか、その邊のことも、一切記憶がありません。

○

（碧）東京へ遊學される時、何かお支度について御記憶は殘つてゐませんか。

（律）いゝえ、別に布團なども持つて行きません、さう〳〵あれは大方加藤の叔父（加藤恒

忠氏）から貰つた、と思ひます。

三並の幸さん（三並良氏）が、先きにおいきたので自分も行きたい〳〵と言つてゐました。加藤の叔父から來いといふ便りがあつた時、自分でも書いてゐますが、鬼の首でもとつたやうに喜んでゐました。

東京へ出てから、便りはよく呉れました。あの手紙でもとつて置きますと、御參考になる事もあつたのでせうが。

此間燒けた正宗寺の子規堂に私が裏へ手習した兄の手紙が、襖の下貼りになつてゐたものが保存されてゐたとか言ひます。そんな風に、兄からの手紙も、皆反古にしてしまひました。

（碧）さう〳〵上京前に、例の五友の會合て、私の宅では時々「おいり」――三月の雛の節句に作る豆入りのやうなもの――をボリ〳〵嚙りながら、詩を作るといふやうなことがありましたが、お宅でも無論あつたのでせうな。

（律）サアよくは覺えません。さういふ學問方面のことは私どもに話など、まアしなかつた、と言いつてもいゝ位、殆んど沒交渉でしたから。こちらも亦た、聞いてもわかりませんでした

らうが、別にきかうともしませんでした。

○

（碧）明治二十二年の喀血の時は？

（律）其の當時は、心配するからといふのでせう、誰からも何の通知もなく、しばらく知らずに過しました。服部嘉陳といふ方が、久松家の御用か何かで御歸松になつた時、始めてお話下さいましたやうに覺えてゐます。

中ノ川の最後の宅は、兄が歸つた時、病身を休める、といふやうな意味で、大原の叔父が建てゝくれたのかも知れません。長四疊が奥にあつて、客間の六疊が前にある、といふ妙な作りも、其の爲めであつたかと思ひます。

（碧）私が初めてお伺ひしたのが、其のお宅でした。橋の處に、よくスツポン屋の荷が置いてありました。

（律）スツポンの生血を毎日飲んでゐました。手袋を咬して首をさし伸べたところを斬つて生血をとる。まア盃に七分目位、さう澤山は出ませんでした。別にイヤな顔もしないで飲んで

ゐたやうです。さうして身は吸物などにして食べます。當時の正岡としては、思ひきつた贅澤であつたかも知れませんが。

其の外、桃を葡萄酒で煮て食べる、そんなこともよくしました。

（碧）きつと西瓜が出よりましたが。

（律）西瓜も好きで、毎日一つは買つておきました。病氣保養といふので、何事も言ふなりにしてゐたのでせう。

それと言へば、夏でもフランネルのシヤツを著てゐました。どんなに暑くても、脱がないでゐました。東京でも小川町の何とか言つた店へよく買ひに行きました。舶來品でないと、胸が詰つてイヤだと言つて、可なり高價な品に限られてゐました。フランネルのシヤツといふのは當時の流行であつたかも知れません。

（碧）鳴雪翁もお若い時分は、矢張年中フランネルのシヤツを著てをられたと言ひます。むしろハイカラな新流行であつたのでせう。升さんも鳴雪翁の故智を學ばれたのかも知れませんな。鳴雪翁もお弱くて、保健第一にお考へになつてゐたのでせうから、ハイカラな贅澤も、た

だ見え坊ばかりではなかつたと思ひます。

（律）　其の時分、自分も病氣をしてから、昔のやうに儉約ばかりも出來ない。月に二十圓位はかゝる、と言つてゐました。

私共女二人は、月に五圓あれば食べて行かれました。

ぢや、二十五圓あれば三人で暮らせる、といふのが私共の東京へ移る話の初めでした。

○

（碧）　東京へお引越の時は、升さんが神戸まで迎へにいらつしたやうですね。

（律）　明治二十五年の十一月と記憶して居ますが、三津ヶ濱を出帆して、翌日の夜神戸に著きました。神戸では人力車で、楠公社や、敦盛の青葉の笛は、この竹でこしらへたのだ、といふ竹藪などを見物しました。

翌夕方京都に往つて柊屋に泊りました。しばらく兄の姿が見えない、と思うてゐましたら、紅葉をハンケチに叩きつけたのを持つて來ました。其一つは今に殘つてゐます。大方私共を迎へに來る途中、嵐山か高雄にでも往つて、紅葉を拾つて持つてゐたのでせう。京都は大雨の降

る日で、ロク〳〵見物も出來ませんでしたが、それでも幌車で東山を一めぐりしました。

京都からは、靜岡に下車して大東館に一泊しました。私共初めての旅行に、まア一等旅行をしたわけでした。

翌日東京著、晝過ぎ一旦麻布の久松家のお屋敷にゐた藤野（藤野漸氏）の宅に落著き、夕方根岸の八十八番地の家に入りました。其の時は、兄はまだ日本新聞に入社してゐませんでしたのに夕飯の仕度から、何から何まで、陸（陸羯南翁）さんのお世話になつて、お氣の毒な思ひをしました。

この東京へ來る旅以外、前後に母や私どもを連れて、何處かへ遊びに行くとか、何かを觀に行くとかいふやうなことは、一度もありませんでした。左様想ひ出しますと、松山にまだゐる時分、三津の生ケ洲へ一度伴れて往つてくれたことがあります。どうしてか汽車が込んで乘れないので、兄とは別にトボ〳〵歩いて歸つたことがあります。

（碧）八十八番地から八十二番地のこゝへ引越されたのは家賃でも安かつたので……。

（律）イエ、家賃は一圓五十錢ほどこちらの方が高かつたのですが……、引越す前に、外に

一二軒見たやうです。御院殿坂の下で、お化け屋敷といふのがありました。それは夏目さん（夏目漱石氏）と御一緒に見に往つたかして、あれなら廣くて君も一緒に住まへるよなどゝ言つてゐたのを覺えてゐます。今一つは同じ加賀様の内で――日下賓生さん（賓生新氏）がお住居になつてゐる家――でしたが、其の時分門限が夜の十時だといふのでやめになりました。

○

（碧）日本新聞の入社が二十五年の十二月でしたから、東京へ御家族移轉當時は、まだ月給も取つてゐられませんでしたのに……入社當時の月給は二十圓位でしたか。

（律）月給は十八圓でした。ですから毎月の拂ひが、いつも家賃だけ不足してゐました。大原や加藤の伯叔父に、度々無心を言つてゐましたが、私の宅の金がまだ殘つてゐたのか、それとも宅の金などは疾くに無くなつてゐたのか、其の邊のことは十分に存じません。

日本新聞社に入社する前まで、大學にまだ籍がありました。籍を置くと、月謝を拂はねばならないから、と言つて私共の上京した後に、退學屆を出しました。

社に出るやうになつて、毎日出勤しましたが、歸宅が遲くなるといふことも、さう度々では

ありませんでした。

宅にをれば、大抵書き物をする以外、俳句分類を書でも夜でもやつてゐました。夜遲くなる時は、お前らはもう寢ェよ、と言つて一人で起きてゐるやうな事も度々でした。

(碧) 明治二十四年私が常磐會寄宿舍――眞砂町の――に入舍した時、升さんの部屋は、奥の二階の一番廣い間で、壁一重でお隣の鳴雪翁のお宅につゞいてゐました。時々鳴雪翁の甲高いお聲がきこえる、と笑つて話されたこともあります。一番廣い間であつたが、そこらぢう洋書や和書が一杯とり散かしてあつて、初めての時など、其の亂雜ぶりに驚いた位でした。尤も獺祭の號の出所なので、本人もそれを認めてをられますが、お宅でも矢張獺祭ぶりでしたな。

(律) 重に俳句分類に必要な本だらうと思ひますが、又は文章を書く參考書でもありましたか、どうかすると、朝掃除に困るほど並べてありました。いゝ加減に片づけて置くと、無茶にとりちらしてあるやうでも、自分だけには、それで整理されてゐるのだ。いゝ加減に片づけられては、自分だけの整理をひつくりかへされて困る、とよく小言を言ひました。

(碧) 根岸は一年の半分蚊帳を釣るところですが、夏分は蚊帳にランプでも入れて?

（律）そんなことは、危險でもあつたので……一切しませんでした。何か急ぐ原稿で、今晩中に書き上げねばならんといふやうな時、夜を更かします。そんな時だけ、うしろから私が團扇で煽ぐこともありました。

一體蚤や蚊を餘り苦にしない性分だつたのでせう、蚤や蚊の小言をきいたことがありません。

〇

（碧）升さんは柿がお好きでしたが、あの頃、もう樽柿が出るけれなと、大變樂しみにしてゐられた。樽柿なんて柿は、今でも中以下のものです。御所、富有、次郎などいろ〱いゝ柿が澤山あります。それほど好きな柿でも、いゝものを食べる機會がなかつた……それを殘念に思ひます。

（律）エヽ、食べ物の小言は餘り言はない方でした。御馳走〱言つても、あの時分はこしらへる術も知らなかつたし、自分でも食べる折がなかつた……今なら、もつとおいしいものを食べさせることが出來ましたでせう。相も變らず肉と鰻位が關の山で……尤も寢床を動けなくなつた後は近所の肴屋に、毎日變つたものは一皿持つて來るやうに言ひましたので、あとのお惣

菜を宅で作る位でした。それでも料理法の本を臺所に置いて、其の中で手に合ふものをこしらへて見ることもありました。

（碧）著物類も、固より贅澤を云ふ餘裕はなかつたでせうが。

（律）まだ著る物に好みをいふ身分でもありませんでした、何かの機會に、大方賞與でも少し貰つた時でせうが、お前達に任せると、イヤな俗な柄を買つて來る、と言つて自分で著物と袴を買つたことが、たゞ一度ありました。

これが――細かい秩父縞の小切れを出して――兄の初めて買つた絹物の羽織と衣服です。これが――他の山繭織のやうな小切れ――死ぬ時まで著てゐた筒袖の綿入れで、高橋健三さん（高橋自恃居士）から贈られたものでした。

さう言へば、兄の黒紋付の羽織は、私が松山にゐる時分、自分の何かにするつもりで、自分で蠶を飼ひ、それをまた自分で絲をとり、宅にあつた機――其の頃の松山の士族屋敷には、大抵手織の機が一二臺あつたもので、今の伊豫絣と同じやうな木綿を織つて、自家用にしたものです――にかけて手織にしたものでした。私共が東京へ來て間もなく、兄が急に紋付羽織が必

要だといふので、それを間に合せたのでした。其後一度染め替へて母が著てゐましたが、もう地が朽ちて役に立たなくなつてゐます。兄の著物の寸法と足袋の大きさは次の通りです。
著物丈六寸、ユキ七寸五分、前巾六寸五分、後巾八寸、足袋十文半（父は圖なしをはいた相です）

兄も十分お金でもありましたら、萬更著物なんか、どうでもいゝといふ性質でもなかつたらうかと思ひます。

いつか京都から、反物の見本をよこしたことがあつて、皆さんて、どれがいゝか銘々の好みを書かれたことがありました。

（碧）私は升さんの洋服姿をたつた一度見ました。明治二十五年の大學在學時代で、金ボタンの詰襟服に角帽、其の角帽が如何にもキチンとして、今買つたばかりと言つた、手垢もついてゐないものでした。

（律）洋服はきらひ、といふのでなく、洋服など作るゆとりがなかつたのでせう。從軍の時は、まさか和服でもありませんでしたらうが、大方加藤の叔父にでも貰つたかと思ひます。

和服の銘仙かたけのものが一枚殘つてゐますが、あの時の洋服なぞ、どうなつたのですか、宅には見當りません。

見當らないと言へば、いつも机の上に置いてゐた硯の水入れ、御存知でせう、そこらの安瀬戸物屋にあるお醬油つぎ、背のひよろ〳〵高い、あれがどうも見つかりません……。たしか倉庫にしまつた筈ですのに……。

それと言へば、兄の使つてゐた硯、筆、墨の類も、此頃の小學生でも、もつと氣のきいたものを持つてゐます位、まことにお耻しい安物でした。

此間も、兄の日常使つてゐたものをどこかに陳列するから、と言つて借りに來られましたが、餘りにヒドイ安物なので、吃驚されてゐました。

(碧)　支那筆の「小筌毫」と言ひましたか、十本拾錢か拾五錢位のもの、アレを買つて來てくれと、神田淡路町の下宿高田屋時代によくことづけされたものです。當時日本新聞社の近くに、支那ものばかり賣る小さな店がありました。或時買つて往つたのは、アレお前隨分ヒドイな、と毛がさゝくれてゐて、三本に一本位しか書けない、ヤクザさを示された。それからは一

本〳〵筆の穗をよく見て買つたものでした。

元來が安筆であり、それに穗を少し許りおろして、尖(さき)で細書されるのであるから、筆がすぐ禿びてしまつたと思ひます。それに原稿や分類で、普通人の何十倍か筆を使はれる。十本宛買ひ溜めの筆も、時には二ケ月位でおしまひになつたかとも思はれる。

何も彼もが、大事な用を足すもの迄、切りつめた實用の範圍を出ない……道具揃へをして樂むといふやうな、通がつたことなど、恐らく生活に餘裕があつてもしようとはしなかつたのではないでせうか。其の遺鉢をうけた我々にしても、そんな事は案外無頓着で押し通してゐる……それから憶測するのでありますが。

○

(律) 分類の材料に必要でもあつたのでせうが、下谷の朝倉屋でしたか、俳書を買ふのが何よりの樂みのやうでした。

いつぞや、小僧さんを連れて、澤山の俳書を買うて來ました。その本代を拂つてくれと言ひましたが、宅にもそれに足るお金のない時がありました。

私がお近所の仕立物などをする。陸さんではお盆と暮にきつと五圓づゝ下さいました。それを呉れんかなど言つたこともあります。私の方も、それをアテにして浴衣の一枚も買ひたい、と思つたりしてゐましたので……。

（碧）病床の上に綱を渡し、それに財布をぶらさげて、アシも小遣ひが出來てな、大いに奢るよ、など笑つたりされたこともありました、大分後のことでしたね。

（律）アレは岡さん（岡麓氏）とのお約束で、宅の俳書を全部提供する、其の本代の一部を前借りした、といふやうなお金でありました。サラサの錢入れ袋を持つて來て下さいましたが、赤と黄と赤の段ダラの袋を宅で縫ひましたのに紐をつけて、自分の寢てゐる床の上にぶらさげたのでした。其の下さつた更紗のも、段ダラの財布もまだ殘つてゐます。手縫ひの段ダラの財布は、縱五寸五分、横三寸八分、乳下り一寸三分で、隨分鄙びた色のきれが、三段に縫ひ合せてあります。

其のお金も一回きりで、アトはどうなりましたか、もうそんな子供らしい樂みをすることも出來ない程、からだの方が惡くなつたのでないかと思ひます。

（碧）晩年畫をかかれるやうになつた何か動機とでもいふやうなことがあつたでせうか。私どもは、近頃畫をかいて見たくなつてな、と出來上つた二つ三つを見せられて、一寸驚いた位です。朝顏の花の色を、何度ぬすくつたか、色といふものは、思ふやうに出ないもんだな、と笑つてゐられたりした。

○

（律）別に動機といふ程のこともありません、若い時分、森さん（森知之氏、五友の一人）に手引されて、お手本を見て書いたりしてゐた、そんなことでも想ひ出して、書いて見たくなつたのでせうか。畫の具も不折さんに頂いたので、或る色など、もう使ひつくしてカラ〳〵になつてゐたりしました。どういふわけですか、寢てゐて書く時分、よくガラスの小さな板を通して、其の寫生する鉢植や花を見てゐました。

（碧）いつか中央美術協會で版にした根岸八景の墨繪は？

（律）アレは色をつかふ前に書いたと思ひます。まだ左程病氣の惡くならない時分、不折さんにお送りした――不折さんが中根岸にゐられる頃でしたか――それが廻り〳〵して安田とか

いふ人のところにあつた、ときいてゐます。

(碧) 私が根岸へ移つた後(明治三十五年正月)カナリヤの鳴くのが頭に障るといふので、カナリヤを籠とも頂戴したことがありました。

(律) いろんな鳥を飼ひ放したのも、岡さん(岡麓氏)の御好意であつたと記憶します。安ものを買ひ集めて來ましたと言つて、カナリヤ、文鳥、紅雀などいろんな小鳥を下さいました。それもしまひには喧しい、といふので、金網も庭のあちらの隅へやりました。鴨は高濱さん(高濱虚子氏)が誰かに貰つたとかで持つて來て下さいました。盥に飼つてゐましたが、これも長つゞきがせず、陸さんに差上げました。

(碧) 病氣がすゝめばすゝむ程、頭はは つきりして來たやうで、いつかも哲學文學の今まで疑問になつてゐたことがすつかり解決した。が、それを話すことも書くことも出來ないで死んで行く、と如何にも悲壯な面もちで話をされたこともあります。

(律) 餘り催眠劑を飲み過ぎた關係もありませう、一寸した物音までが、頭に障るといふので、隨分病側の起ち居にも氣をもんだものでした。

○

（碧）　繃帶のとりかへは大事件でしたが、實際おとりかへになる看護婦としてのあなたの心づかひは？

（律）　穴は背中と腰の方に、背中のは始め二つであつたのが一つになつて、都合まア大きいのが二ヶ處、どれもフチが爛れて眞赤になつて、見るから痛さう、といふより無殘な程にギザ〳〵になつてゐました。そこへ一寸でも觸れやうものなら、飛び上る――ことも出來ない――ほどであつたらしいので、出來るだけソーッと古いのを剝がすのですが、いつでも膿汁でずく〳〵になつてゐました。それから棉フランネルのやうな柔かい切れに、一面油藥をぬつて、それを先づ穴の上に置き、其上へ脫脂棉を一重、其の上へ普通の棉を可なりな厚みに載せて繃帶をかけ、ピンでとめておくのでした。左程思つた程臭ひはしませんでしたが、それをするのは朝の御飯のすんだあと、モヒ劑を飲んだ、藥のきいた時分を見計らうのでした。每朝のことですから、お互ひにお勤めのやうな思ひでした。

○

（碧）亡くなられる前の日――三十五年九月十八日――には我々も午後馳けつけたのですが席上には鳴雪翁始め定連がゐました。お醫者が來て注射をしたやうに記憶しますが。

（律）あの日朝から具合がわるくて、食べ物もおいしくないといふので、午前中陸さんが來て下さいまして、お晝に何かおカヅを頂きました。それを頂戴したあとでも、どうも苦しいといふので宮本さん（宮本仲氏主治醫）が見え、注射をしようと仰しやいました。が、お晝にも一度モヒ劑を飲みましたからと言つてゐましたが、午後三四時頃でしたか、樂になつた方がい丶、と注射をしました。それからスヤ〳〵眠るやうになりました。

（碧）もうこれなら大丈夫と言つた氣分で、高濱一人を殘して、私共も解散しました。その後間もなく、高濱が起しに來ました。

（律）夜の十二時過、母と今一人親類のものが眠ずの番をすることにして、次の間にゐますと、何やらウーンと唸つた、といふので、往つて見ましたら、もう……。其の時が零時五十分でしたが、何かの新聞か雜誌に、安眠からさめずに永眠したので、誰も其の大往生の時を知らなかつた、など書いてありましたが、マサカあの大病人をかゝへてゐて、そんな……。

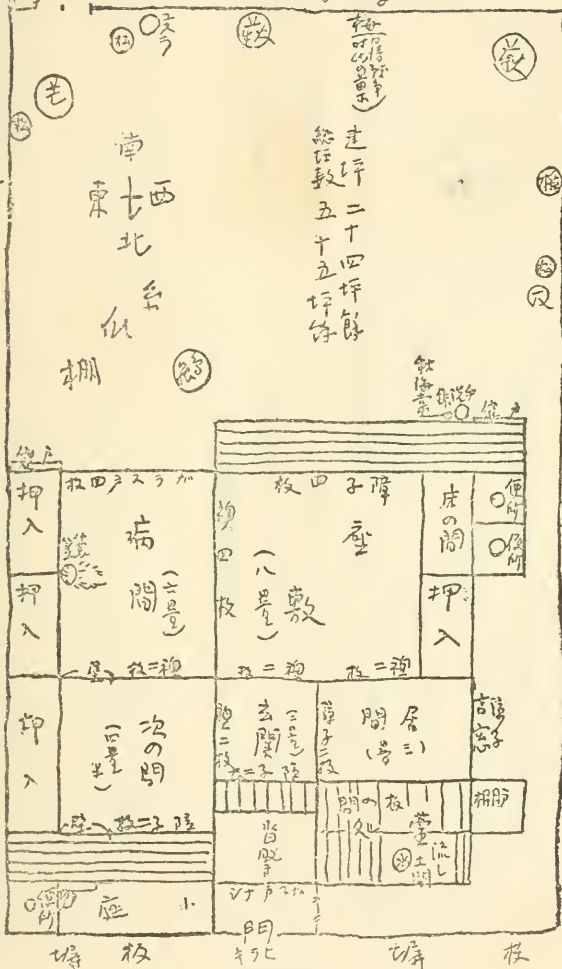
誕生が十七日ですから、例によつて赤御飯を炊きました其翌日のことでした。赤御飯も頂戴したと思ひます。

○

(碧) 升さんも從軍前にはお達者でしたから、何かお嫁さんの口でもあつた御記憶はありませんか。たとへば陸さんか、加藤の叔父さんからでも。

(律) サアさういふ方面からでなく、一つ二つ話はあつたやうでした。が、內のお嫁さんは田舍者でないと釣合はない、と兄はよく言つてゐました。別に其のお寫眞を拜見する程度にも話はすゝみませんでした。

(碧) 私が明治三十年北陸を旅して、金澤の秋竹の處にしばらくゐました。其の下宿の娘の富女は、當時女流作家として我々の間に推稱されてゐました。旅から歸つて、富女の八の字眉の愛くるしい容貌など話して間もなく、或日突然、お前も富女でも嫁に貰つたらどうぞな、とにつと含み笑ひをされた。私はまだ二十五歲、定職はなし、一家を持つなんて念頭にしたこともなかつた。升さんは、それ位考へてをられたのだから、自分の配偶のことも、全然問題にし

建仁寺垣
建坪二十四坪餘
総坪数五十五坪餘
南
東
西
北
押入
押入
押入
押入
病間（六畳）
座敷（八畳）
床の間
便所
便所
次の間（四畳半）
玄関（三畳）
居間（三畳）
建仁寺垣
小
庭
門
板
板

なかつたといふのでもない、と思はれますが。

（律）従軍することもなく、達者でゐましたら、それは一人でゐるわけにも往きませんでせうが、何分従軍後、一旦恢復したものが、又た始終床につくといふので、さういふ話をする間がありませんでした。

○

（碧）舊子規庵の看取圖をとつて見ましたが、改築後とどう相違してゐるのでせうか。

（律）昭和元年三月に改築しましたが、變つたのは、臺所の横に、一坪の湯殿を作つたのと、病間の南側に、一尺半幅の濡れ緣をつけたのと、それだけです。湯殿を作つたから、そこへ通ふ緣側をつけ、緣側の一方に、三尺の押入を作りました。改築當時、原形を壞さないやうに努めましたが、自分も段々年をとりますし、湯殿だけはといふので、それだけつけて頂きました。八疊の座敷の南緣側を、壁を拂つて病間の方へもずつと通したらい丶とも思ひましたが、それでは家の様子がすつかり變りますので、濡れ緣にしましたした。こ丶に緣側がありませんと、一寸した上り下りにも困りますので。

今の家は、改築の時に全體を東へ約一間位ずらしました。もとは座敷の便所裏の通り路など、井戸からバケツを提げて來るのに、身體を横にしないと通れない位狹かつたのです。それでは湯殿を作ることが出來ませんので、餘儀なく東へ寄せたのでした。ですから、今では庭の木や、お隣の家などゝ、家の位置が少し變つてゐます。

湯殿を作る關係で、昔の樣子を一番に無くしたのは臺所です。西側に出張つた臺所專用の戸棚を全部切り捨てゝ、そこへ湯殿をこしらへた。で、東側の板間――そこには、竈が置いてあつた――を縮めて、そこへ淺い戸棚を作りました。昔は高い流しが土間にあつて、立ながら水使ひが出來ました。其のすぐ横に水壺があつて、井戸から汲んで來た水を溜めてゐました。水壺の前に狹いヒラキがあつて、外から水を移すのに、やつと頭をくゞらせる位でした。臺所の北の明りとりは、今のやうに鎧戸のやうなものでなくて、たゞの三尺位の障子でした。水道になつてから、流しを低くして、土間を板間にしました。

玄關のガラス入り格子戸は、之も改築の時に出來たもので、昔は何もありませんで、表門の開きをはいると、すぐ沓脱きまで開け放してした。いつかお客樣の下駄を取られたこともあり

ました。

家圍ひの垣も、最初は建仁寺であつたのが、次ぎに四ツ目になり、時によつて變つてゐます。萩の中にこゞんでゐる母の寫眞がありますが、それが一番古い寫眞で、最初の建仁寺垣時代です。今は總て板塀になつてゐます。

病間の外に絲瓜棚を作つたのは、餘程後のことで、三十四年の夏だつたと思ひます。絲瓜棚は可なり大きなもので、座敷の緣側から二間以上も出張つてゐました。

引越して來た當時は、庭には殆んど何も植つて居ませんでした。松を三本、西南東側に植ゑてもらつてから萩や芒や梅の木など、又た雞頭、葉雞頭、秋海棠など次ぎ〳〵に植ゑました。もとからあつた西側の椎の木の下には、左千夫さん(伊藤左千夫氏)が一八を植ゑて下さつたこともあります。一時萩ばかりが餘計になつたのを見て、もう萩にも飽いた、庭一面芥子でも植ゑるか、など兄の言つたこともあります。

家のまはりも、昔とすつかり變つてしまひまして、鶯橫丁と言つても、昔のやうな趣はございません。古い寫眞には遠見に上野の森が見えてゐますが、今では、寬永寺坂のガードを走る

車と空ばかり……。それに、何年さきのことか知りませぬが、電車の鶯谷驛から日暮里の方へ、十二間道路がぬけるとか言つて、子規庵の地所も、少しはそれにかゝるときゝました。そんなことになれば、いよ〳〵昔の樣子は、すつかり無くなつてしまひます。

水道のない前の水は、井戸から汲んでゐました。其の井戸は、宅の裏門を出て左へ三四間さきに、丁度今の子規庵倉庫のはづれに、現在でもあります。まだ西瓜を冷したり洗濯物を洗つたり、よく使つてゐます。宅の水道のメートルが餘り動かなさ過ぎると言つて、メートルを見に來た人が、いつでも不審する程てす。尤も女中と女二人の暮しですから……。

家賃は初めは五圓で、それから六圓五十錢になり、終ひには水道をつけて貰つて十圓五十錢といふことになりました。

○

（碧）いつか升さんが、井戸端で母と妹が小聲で話してゐるのは、この病間へよくきこえる、それにいくら大きな聲をしたつて、ちつとも歸つて來ない、なんて不平を云はれたことがありますが、ともかく子規庵に附き物といふのも變てすが、想ひ出の深い井戸てすな。

（律）　どなたもお客様のない時など、別に用もないのに、そこに坐つてゐてくれ、とよく言ひました。やはり一人でゐると何となく心細く思つたのかも知れません。母と二人で、久しぶりのお天氣か何かで、溜つた洗濯物を片付けやうとでもしてゐたのでせう。宅の構への中にある專用井戸ではないのですから、近所お隣と一緒に汲む、待ち合せや讓り合などもありますし、それに小人數でも、繃帶共の他洗濯物が相應にありましたから。少し時間が長くかゝつたので呼んだのも知らずに夢中になつてゐた、そんなこともあつたでせう。

地つゞきの東隣の地所とも今は子規庵の所有になつて、倉庫が出來、寒川さん（寒川鼠骨氏）のお家が建ちまして、同時に加賀樣のお構へが分讓地となつて、そこらに立派なお家が列ぶやうになりました。

汚ない泥溝に沿うて、ガサ〳〵落ちた木の葉を蹈み、今にも倒れさうな古ぼけた板塀によりそふやうにぐる〳〵廻つて鶯横丁にはいつた昔が偲ばれることです。

（碧）　まだ伺ひ度いことも澤山ありますが又の機會を待つことに致しませう。難有う御座いました。——以上、昭和八年九月「同人」より——

子規を語る（終）

昭和九年二月十五日印刷
昭和九年二月二十日發行

「子規を語る」

定價貳圓

著者検印

著者　河東碧桐

發行者　阿部利行
東京市大森區山王二ノ一八七七

印刷所　大杉印刷所
東京市牛込區若松町五十四番地

東京市麹町區丸ノ内二ノ一八
昭和ビルディング三階

發行所　汎文社
電話丸ノ内〇五九五番
振替東京七七五九七番